麦野下古賀遺跡

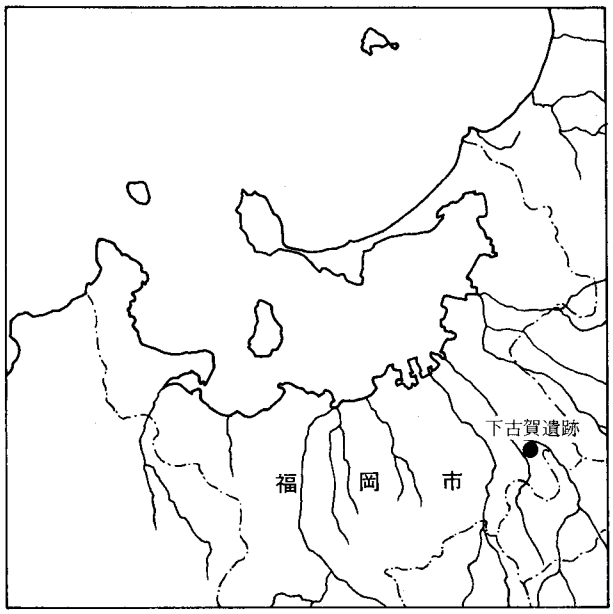
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第107集

1 9 8 4

福 岡 市 教 育 委 員 会

麦野下古賀遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第107集



1 9 8 4

福岡市教育委員会

序　文

福岡市教育委員では社会教育施設の拡充に努めており、その一環として板付公民館の改築をすることになりました。

社会教育課より埋蔵文化財の調査依頼を受けた文化課では試掘調査に基づき、昭和57・58年にかけて発掘調査を実施致しました。

本書は、その結果について報告するものです。報告書に見られるように中世後半の井戸の検出をはじめ多くの成果をあげることができました。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの人々の御協力に対し、心から感謝の意を表します。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となることを願うとともに研究資料としても活用いただければ幸いです。

昭和59年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　　西　津　茂　美

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会社会教育課の板付公民館改築工事に伴い、1982年９～10月、1983年５月に調査を実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．本遺跡は、麦野Ａ遺跡群の中に位置し、小字名をとって、麦野下古賀遺跡と呼ぶことにする。

3．本書に掲載した遺物番号は、すべてを通し番号とした。また、この遺物番号と縮尺は、実測図・写真図版ともに一致している。

4．本書の執筆・編集は、力武卓治・大庭康時が行なった。

5．資料整理にあたっては、花畑照子・溝口博子・安武裕子さん、報告書作成には、村田喜代美・寺田祥子・荒木由美子・実渕祥子・井手口千寿子・中野八寿子・林朝美・世利裕美・末永トシ子・寺田康子・中村美穂・金子幸世さんの御協力をいただいた。

本 文 目 次

第一章　はじめに……5
1．発掘調査にいたるまで……5
2．発掘調査の組織と構成……5
3．遺跡の位置と環境……6
第二章　発掘調査の記録
1．発掘調査の概要と経過……8
(1)　昭和57年度発掘調査……8
(2)　昭和58年度発掘調査……10
2．遺構と遺物……11
(1)　井戸　1号井戸……11
2号井戸……19
3号井戸……21
(2)　竪穴遺構　1号竪穴遺構……23
2号竪穴遺構……23
3号竪穴遺構……24
4号竪穴遺構……26
5号・6号竪穴遺構……28
7号竪穴遺構……28
8号竪穴遺構……31
(3)　その他の遺構と遺物……35
(4)　掘立柱建物　1号掘立柱建物……42
2号掘立柱建物……42
3号掘立柱建物……42
4号掘立柱建物……45
4号掘立柱建物の間取りについて……45
第三章　小　結……46

挿 図 目 次

Fig. 1　周辺遺跡分布地図（1/25,000）…… 7
Fig. 2　遺跡周辺図（1/400）…… 9
Fig. 3　遺構全体図（1/100）……折込
Fig. 4　1号井戸・2号井戸実測図（1/50）……12
Fig. 5　1号井戸井戸側内出土遺物（1/2）……13
Fig. 6　1号井戸出土遺物1（1/2）……14
Fig. 7　1号井戸出土遺物2（1/2）……15
Fig. 8　1号井戸出土遺物3（1/3）……16
Fig. 9　1号井戸出土遺物4（1/3・1/2）……17
Fig. 10　1号井戸出土遺物5（1/2・1/3）……18
Fig. 11　2号井戸出土遺物1（1/2・1/3）……20
Fig. 12　2号井戸出土遺物2（1/3）……21
Fig. 13　3号井戸出土遺物（1/2・1/3）……22
Fig. 14　1号竪穴遺構実測図（1/20）……23
Fig. 15　2号竪穴遺構出土遺物（1/3）……23
Fig. 16　2号竪穴遺構実測図（1/20）……24
Fig. 17　3号竪穴遺構実測図（1/40）……25
Fig. 18　3号竪穴遺構出土遺物（1/2・1/3）……26
Fig. 19　4号竪穴遺構出土遺物（1/3）……26
Fig. 20　4号竪穴遺構実測図（1/20）……27
Fig. 21　6号竪穴遺構出土遺物（1/2）……28
Fig. 22　5号・6号竪穴遺構実測図（1/40）……28
Fig. 23　7号竪穴遺構出土遺物1（1/2）……29
Fig. 24　7号竪穴遺構出土遺物2（1/3）……30
Fig. 25　8号竪穴遺構出土遺物1（1/2）……31
Fig. 26　8号竪穴遺構出土遺物2（1/3）……32
Fig. 27　8号竪穴遺構出土遺物3（1/3）……33
Fig. 28　8号竪穴遺構出土遺物4（1/3）……34
Fig. 29　8号竪穴遺構出土遺物5（1/2）……35

Fig. 30　その他の出土遺物１（１/２）……36
Fig. 31　その他の出土遺物２（１/２）……37
Fig. 32　その他の出土遺物３（１/２）……38
Fig. 33　その他の出土遺物４（１/３）……39
Fig. 34　その他の出土遺物５（１/３）……40
Fig. 35　その他の出土遺物６（１/２・１/３）……41
Fig. 36　１号掘立柱建物実測図（１/50）……42
Fig. 37　２号掘立柱建物実測図（１/50）……43
Fig. 38　３号掘立柱建物実測図（１/50）……43
Fig. 39　４号掘立柱建物実測図（１/50）……44
Fig. 40　古民家の模式平面図……45

図版目次

PL. 1　(1)　昭和57年度発掘調査検出遺構（南より）
　　(2)　昭和57年度発掘調査検出遺構（南東より）
PL. 2　(1)　１号井戸（東より）
　　(2)　１号井戸土層断面（西南より）
PL. 3　(1)　１号竪穴遺構（北西より）
　　(2)　１号竪穴遺構（東より）
PL. 4　(1)　２号竪穴遺構（南西より）
　　(2)　２号竪穴遺構（北より）
PL. 5　(1)　４号竪穴遺構（北西より）
　　(2)　４号竪穴遺構土層断面
PL. 6　(1)　５号・６号竪穴遺構（北より）
　　(2)　６号竪穴遺構、遺物出土状況（北より）
PL. 7　(1)　７号・８号竪穴遺構（北東より）
　　(2)　７号竪穴遺構（北より）
PL. 8　(1)　８号竪穴遺構（北より）
　　(2)　P. 21、青磁椀168出土状況（北より）
PL. 9　(1)　P. 51、銅銭出土状況
　　(2)　昭和58年度発掘調査北区検出遺構（南西より）

PL.10　(1)　昭和58年度発掘調査南区検出遺構（南西より）
　　(2)　昭和58年度発掘調査南区検出遺構（南東より）
PL.11　(1)　1号井戸井戸側内出土遺物（1/2）
　　(2)　1号井戸出土遺物1（1/2）
PL.12　　1号井戸出土遺物2（1/2・1/3）
PL.13　　1号井戸出土遺物3（1/2・1/3）
PL.14　　2号井戸出土遺物（1/3）
PL.15　(1)　3号井戸出土遺物（1/2・1/3）
　　(2)　3号竪穴遺構出土遺物（1/2・1/3）
PL.16　(1)　2号竪穴遺構出土遺物（1/3）
　　(2)　4号竪穴遺構出土遺物（1/3）
　　(3)　6号竪穴遺構出土遺物（1/2）
　　(4)　7号竪穴遺構出土遺物（1/2・1/3）
PL.17　　8号竪穴遺構出土遺物1（1/2）
PL.18　　8号竪穴遺構出土遺物2（1/3）
PL.19　　8号竪穴遺構出土遺物3（1/3・1/2）
PL.20　　その他の出土遺物1（1/2）
PL.21　　その他の出土遺物2（1/2）
PL.22　　その他の出土遺物3（1/2・1/3）
PL.23　　その他の出土遺物4（1/3）

第一章　はじめに

1．発掘調査にいたるまで

麦野下古賀遺跡は、福岡市博多区麦野一丁目28－56にある。板付公民館の敷地であり、福岡空港にかかわる防音改築工事のため、福岡市教育委員会社会教育課よりの申請をうけ、調査を実施することとなった。

申請地は、「福岡市文化財地図　東部Ⅰ」（福岡市教育委員会編　1981年）で周知の遺跡とされた麦野A遺跡群のほぼ中央に位置しており、1982年8月12日、試掘調査が行なわれた。その結果、旧公民館建築時の埋土の下に旧地形がそのまま残っていることが予想され、円形ピットが多数検出された。この結果を受けて、社会教育課との協議がくりかえされ、昭和57年度に公民館本体部分の調査を行ない、昭和58年度で残り部分の調査と整理報告をすることになった。

昭和57年度発掘調査は、1982年9月21日より10月31日まで、昭和58年度発掘調査は、1983年5月17日から26日まで実施した。この間、1983年4月には板付公民館が落成、オープンし、昭和58年度発掘調査は、公民館建物の前面を公民館活動に支障をきたさない様に配慮しながら行なわざるをえなくなってしまった。そのため、安全面には特に注意し、公民館への通路を確保し、発掘区周囲にフェンスを廻らせた。また、公民館改築に伴なって電線・ガス管・配水管などが埋設されており、それらをさけての調査となったため、当初予定していたよりも、面積が限定される結果となったのである。

2．発掘調査の組織と構成

調査委託　　福岡市教育委員会社会教育部社会教育課

調査主体　　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係

事務担当　　柳田純孝（係長）　古藤国生

調査担当　　田中寿夫（試掘調査）　力武卓治　大庭康時

調査作業員

昭和57年度調査　浅山徹　江越初代　加納雄三　河野徹也　岸原藤雄　近藤和敏　関加代子　関政子　竹原邦子　花畑照子　溝口博子　宮川登志子　村上エミカ　村上エミ子　村上キヨエ　山内タツ子　山崎三枝子　杠真知子　吉原京子　吉原満義

昭和58年度調査　糸山英雄　江越初代　加納雄三　河野徹也　黒木静子　関加代子　関政子　花畑照子　原田昌典　松尾浩孝　溝口博子

3．遺跡の位置と環境

麦野下古賀遺跡は、遺物散布地としてまとめられた麦野A遺跡群のほぼ中央に位置する。麦野A遺跡群は、御笠川左岸の南北にのびた台地上にあり、台地の西側には諸岡川が流れている。下古賀遺跡は、この台地の丘陵尾根の南西斜面側にのっている。この台地は、中位段丘面であり、約三万年前の阿蘇火山のカルデラ形成期に噴出した火砕流（阿蘇Ⅳ火砕流）によって形成された面である。第四紀層の花崗岩類が基盤になっている。火砕流による堆積物は、大部分は白色粘土化した八女粘土層であり、その直上には黄褐色軽石質火山灰（鳥栖ローム層）がおおっている。下古賀遺跡では、鳥栖ローム層が遺構検出の際のいわゆる地山になっている。

周辺には、先土器時代から中・近世までの遺跡が分布している。下古賀遺跡から北西に約1.4kmはなれた板付遺跡は、縄文時代晩期の夜臼式土器期の水田跡が発掘されたことで著名であるが、弥生時代前期を中心とした環溝集落遺跡である。板付遺跡の北に隣接する那珂遺跡群は、那珂深ヲサ遺跡・那珂君休遺跡・那珂久平遺跡などが発掘調査されているが、いずれも水田遺跡である。那珂久平遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて設けられた最大長約35mにも及ぶ堰が数列出土した。諸岡遺跡には、先土器時代の包含層も存在するが、弥生時代前期の板付Ⅱ式土器に共伴して朝鮮系無文土器が多量に出土したことで著名である。諸岡には、15～16世紀の居館址である諸岡館跡も存在する。麦野A遺跡群のすぐ北にある高畑遺跡では、台地縁辺部に調査が限られているが、８世紀中葉に創建されたと考えられる高畑廃寺の存在が確認されている。福岡市と大野城市にまたがる仲島遺跡は、弥生時代から歴史時代にかけての集落遺跡であって、人面墨書土器・貨布などが出土している。

以上は御笠川西岸の遺跡であるが、東岸に目を向けると、月隈丘陵の西斜面に遺跡・古墳が分布している。金隈遺跡は、甕棺墓や土坑墓を中心とする弥生時代の埋葬遺跡であり、昭和58年に遺構の一部に覆い屋がかけられ、遺跡の姿が常時見学できるようになった。下月隈天神森遺跡は土坑墓、下月隈宮ノ後遺跡は甕棺墓・土坑墓を中心とした遺跡である。その他、下月隈古墳群・上月隈古墳群・文殊谷古墳群・谷頭古墳群などが、丘陵西縁にそって北から南にならんでいる。

なお、弥生時代の奴国王の墓所といわれている須玖岡本遺跡は、麦野下古賀遺跡の南々西約1.75kmにある。

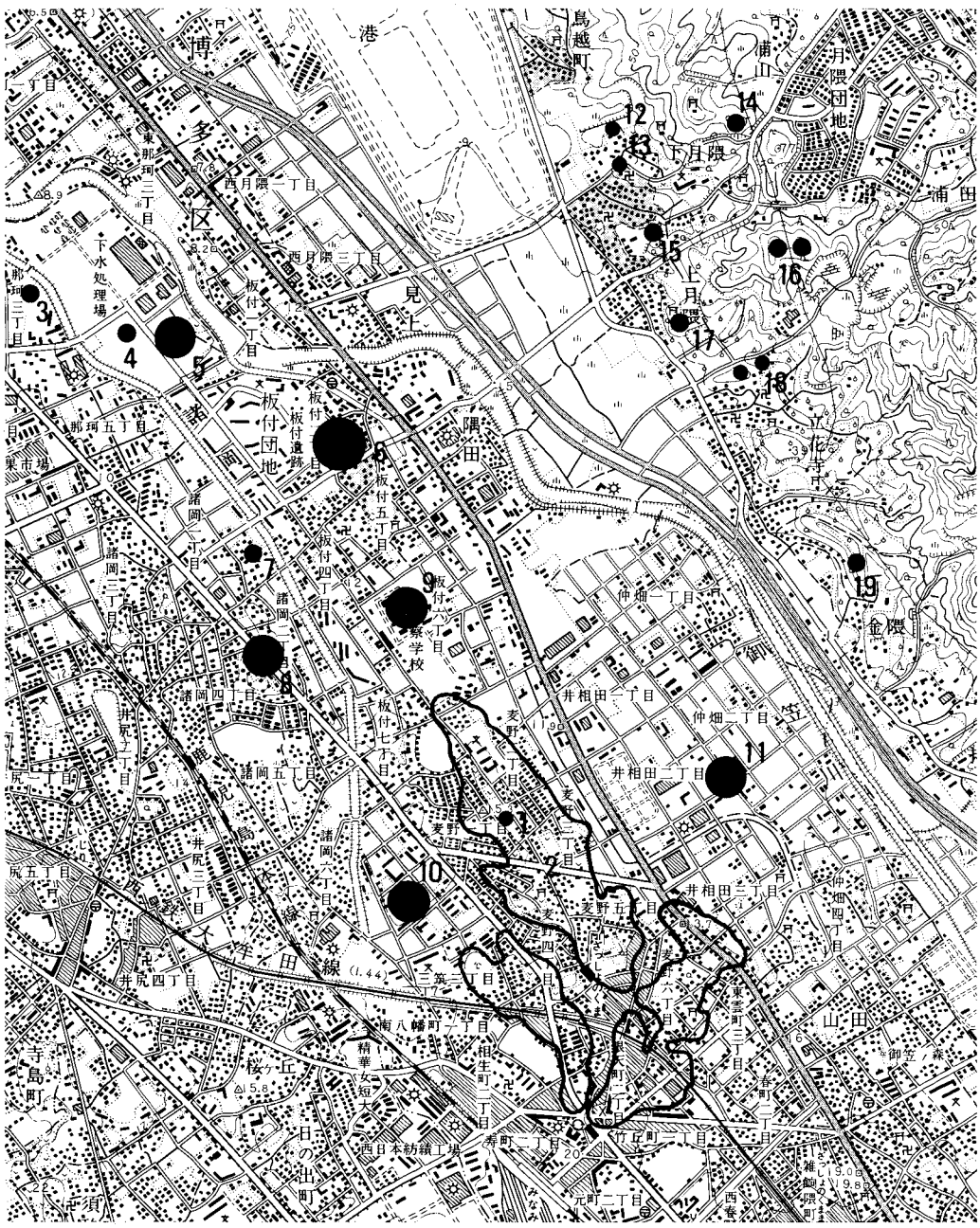


Fig. 1　周辺遺跡分布地図（1/25,000）

1．**麦野下古賀遺跡**　2．麦野A遺跡群　3．那珂深ヲサ遺跡　4．那珂君休遺跡　5．那珂久平遺跡　6．板付遺跡　7．諸岡館跡　8．諸岡遺跡　9．高畑遺跡　10．三筑遺跡　11．仲島遺跡　12．下月隈天神森遺跡　13．下月隈宮ノ後遺跡　14．下月隈古墳群　15．上月隈遺跡　16．上月隈古墳群　17．文殊谷古墳群　18．谷頭古墳群　19．金隈遺跡

第二章　発掘調査の記録

1．発掘調査の概要と経過

(1)　昭和57年度発掘調査　PL．1

前述した様に、昭和57年度調査は1982年９月21日から10月31日までの期間で、公民館建物部分を調査した。調査面積は、約420㎡である。

麦野下古賀遺跡における土層の堆積状況は、次の通りである。（Fig．3　遺構全体図）

Ⅰ層　灰褐色土層。表土層である。やや軟質で、遺物を含まない。

Ⅱ層　茶褐色土層。

Ⅲ層　暗茶褐色土層。粘り気を持つ。

Ⅳ層　茶褐色土層。Ⅱ層にくらべると粒子がきわめて小さく、粘性を持つ。遺物は、ほとんど含まれていない。

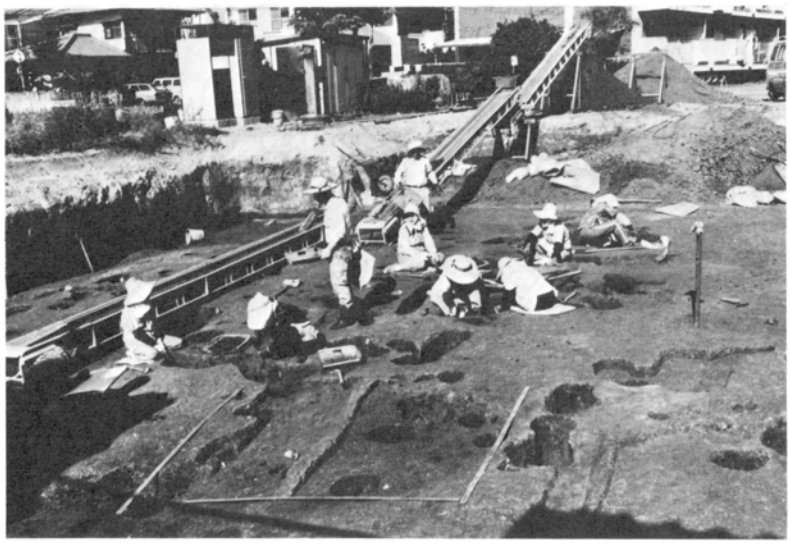
Ⅴ層　茶褐色土層。ブロック状のやや赤味を帯びた黄色粘土を部分的にふくむ。

Ⅵ層　暗茶褐色土層。Ⅲ層にくらべ、やや明るい。炭・小石をふくむ。

Ⅶ層　黄褐色土層。いわゆる鳥栖ローム層の上面である。

遺構は、Ⅵ層を切り込んだものと、Ⅶ層を切りこんだものとがあり、遺構面としては２面あることが考えられた。しかし、Ⅵ層を切りこんだものについては、土層観察断面においてもその遺構の立ち上がりが不鮮明であった。したがって、調査としては上から順次下げていったが、結局Ⅶ層面において遺構を確認する形となった。

遺構検出面の地形は、西側に向って次第に低くなっている。最も高い東南隅と最も低い西北隅との比高差は、約１ｍあり、この遺跡が台地西斜面の肩にのっていることを示している（Fig．2）。



昭和57年度発掘調査風景

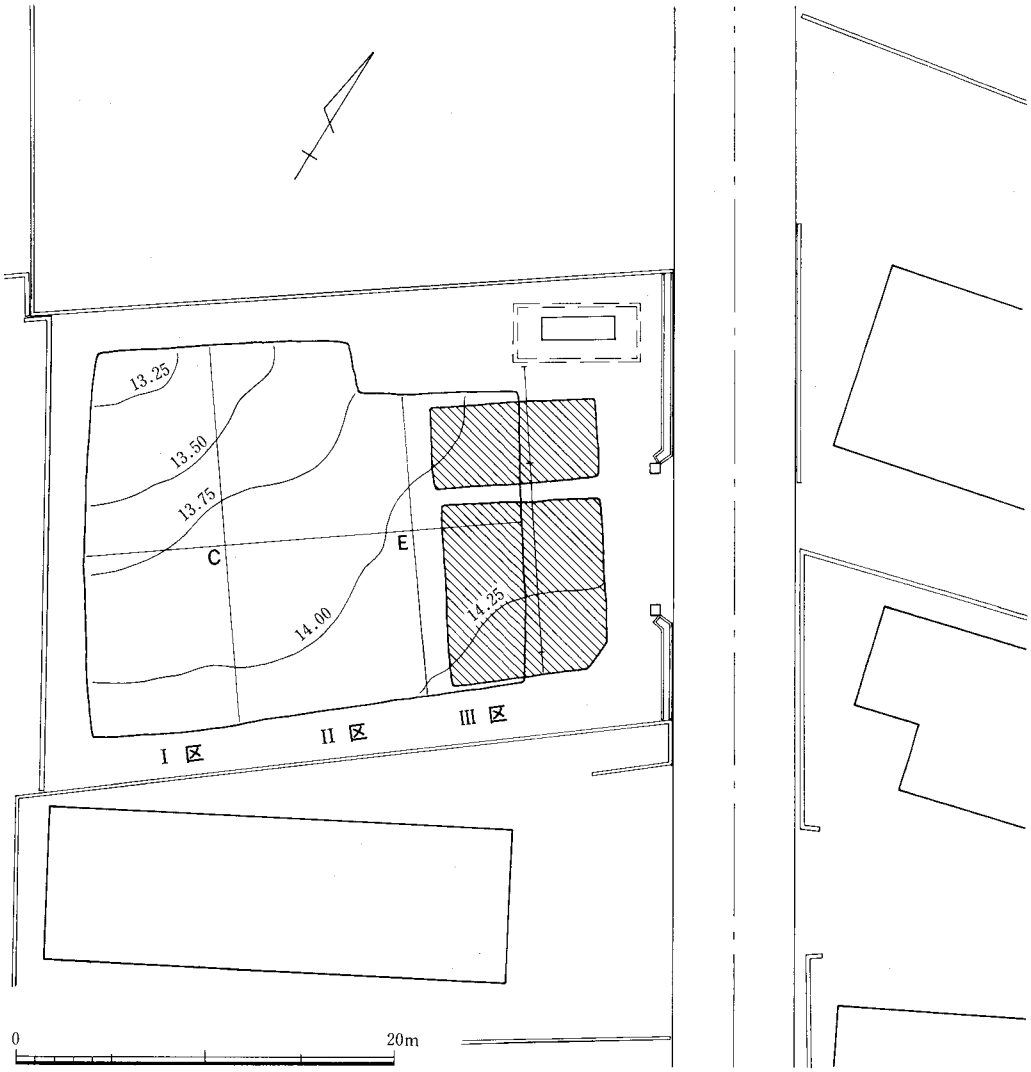


Fig. 2　遺跡周辺図（1/400）　斜線部分は昭和58年度発掘調査区

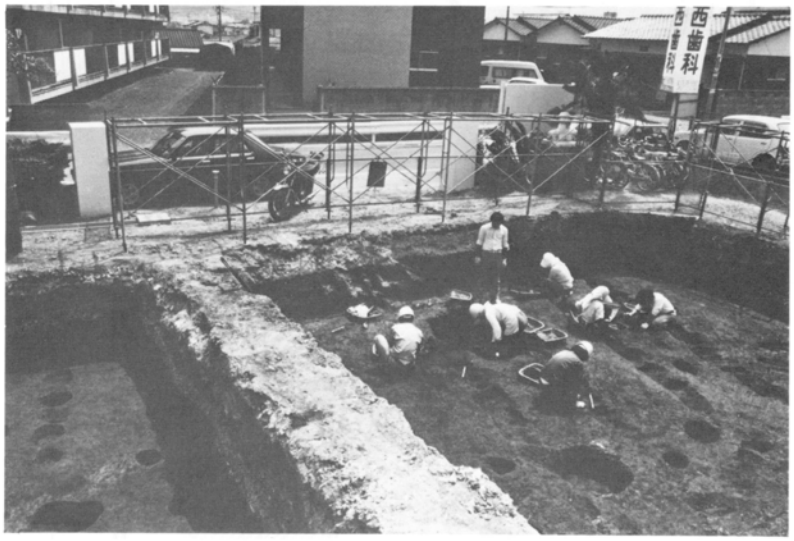
発掘調査に際しては、調査部分の形状を考慮に入れて調査区中央に直交する2本の基準軸を設定した。この交点をC点とし、C点から道路側に20mはなれてE点を定めた。そして、C点から西をI区、C点からE点までをII区、E点から東をIII区として調査を行なった。(Fig. 2)

検出された遺構は、井戸3基、竪穴遺構8基、ピット多数が検出された。遺構の検出・実測が一旦終了した10月下旬、遺構検出面をさらに10cm程掘り下げ、検討した。したがって、掘り残しや遺構の見落しはないものと思われる。しかし、性急な発掘調査であったため、多数検出された柱穴状ピットについて検討する余裕がなく、現場で掘立柱建物をひろうことができなかったのが残念であった。

(2)　昭和58年度発掘調査　PL.9-(2), PL.10

1983年5月17日から26日まで、約150m²を発掘調査した。調査予定区のほぼ中央に、下水管が埋設されてしまい、調査区は2分された。前年度調査時の基準杭も抜き取られてしまい、新たに設定しなおした。

検出された遺構は、柱穴状ピットのみであり、遺物も土師器の小片しか出土しなかった。なお、東西方向に7条の溝状の浅い落ち込みがみられるが、後世の畑の畝であろうと思われる。



昭和58年度発掘調査風景

昭和57年度発掘調査に参加した方々

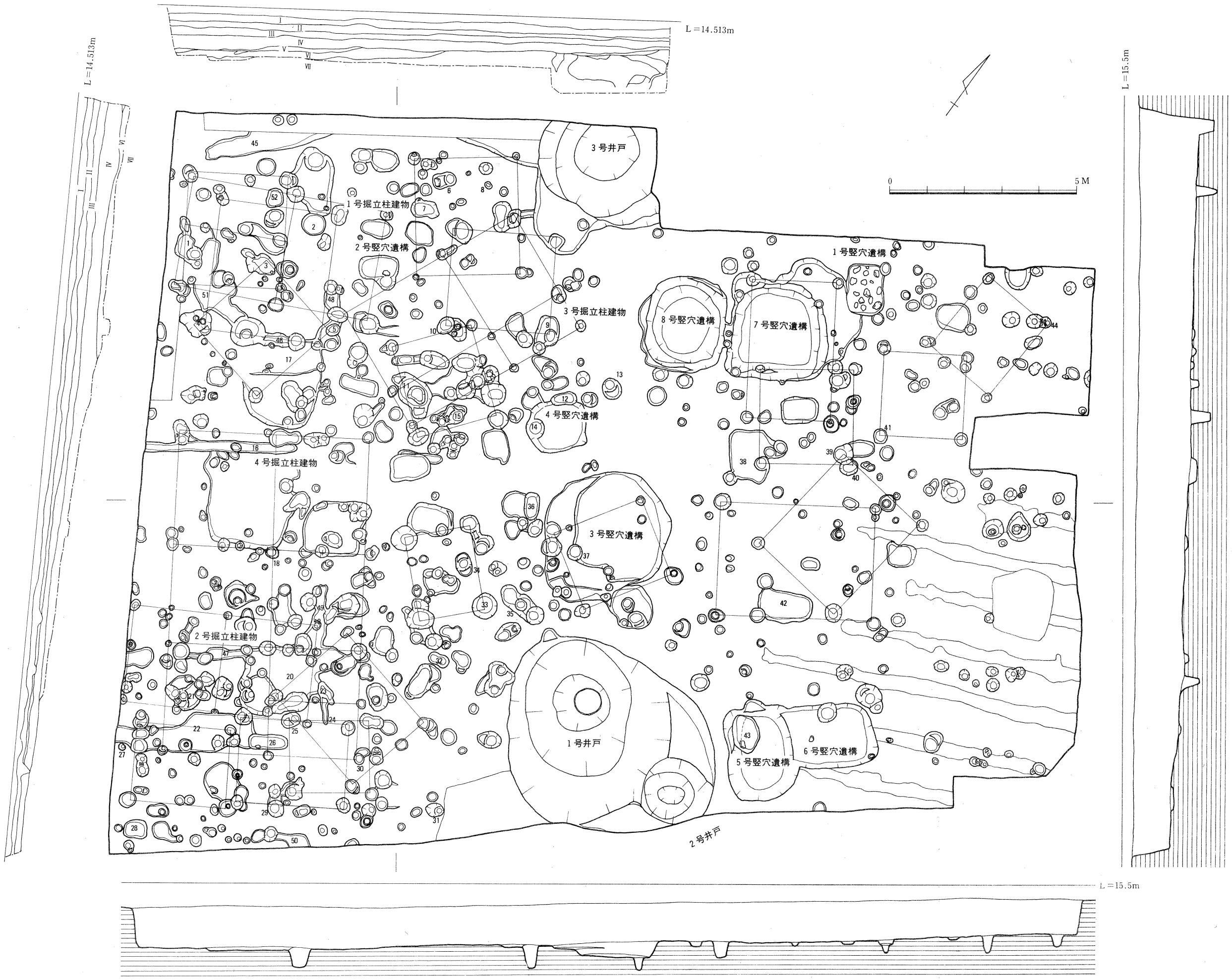


Fig. 3　遺構全体図（1/100）

2．遺構と遺物

2度にわたる発掘調査によって検出した遺構は、井戸・竪穴遺構・柱穴状ピット・不整形ピット・溝状遺構などである。これらの内、井戸・竪穴遺構についてはそれぞれ1項を設け、その他の遺構は一括して記すことにする。なお、柱穴状ピットから掘立柱建物の検出ができたが、調査後の図上による推定であるため、最後に一項をあててその可能性を述べるにとどめる。遺構・遺物は、発掘調査時は、各区ごとに番号を付けたが、整理・報告にあたって、通し番号につけ直した。

(1)　井戸

1号井戸　Fig. 4，PL. 2

井戸側に木桶を用いた井戸である。井戸直径約80cm、井戸掘り方の直径約500cmの円形の井戸で、確認できた深さは約330cmである。深くなり次第に狭くなり、危険を伴うので、掘り下げるのは断念した。

土層の状況は次の通りである。1層－褐色土層。土器細片を含む。きわめてかたい。2層－褐色粘質土層。木炭片を含む。3層－灰黒色粘質土層。a・b 2層にわかれる。aには、土器片が多く含まれる。bは、やや赤味をおび、土器片は少ない。4層－茶褐色土層。黄褐色の粒土を含む。5層－茶褐色土層。6層－茶褐色土層。黄褐色粒土大。7層－6層に比べ、やや粘着力を増す。8層－茶褐色土層。茶褐色粒土を含む。9層－明茶褐色土層。茶褐色粒土と黄褐色粒土を含む。10層－明茶褐色土層。灰黒色粒土を含む。11層－灰色粘質土層。灰黒色粒土を多く含む。12層－茶褐色砂質土層。13層－茶色土層。14層－灰黒色粘質土層。15層－茶色土層。16層－灰黒色粘質土層。17層－明茶色土層。18層－茶色土層。19層－灰色粘質土層。20層－茶色土層。21層－茶褐色土層。22層－茶褐色土層。灰黒色粘質土を含む。23層－茶褐色土層。24層－灰黒色粘質土層。粘着力が強い。25層－茶褐色土層。やや砂質。26層－明茶褐色土層。茶色粒土を含む。27層－灰黒色粘土層。28層－茶色土層。29層－茶色土層。八女粘土のブロックを含む。30層－灰色粘質土層。31層－茶色砂質土層。32層－茶褐色砂質土層。やや粘り気有。33層－黒色粘質土層。植物遺体を多く含む。4層から12層には、灰黒色粘質土と八女粘土の2cm大のブロックがまじる。

井戸側は、木桶を逆さにして重ねたもので、6段まで確認できた。木桶は、竹皮を撚った箍で上下2ヶ所をしめたもので、下の桶の底側の箍まで、上の桶の口がかぶさって組み合わされていた。最上段の桶は、口縁しか残っていないが、土層の状況からしてこの桶までしか積まれていなかったことがわかる。土層からみて、掘り方が埋まるには2～3段階ある様だが、埋土内の土器と木桶内の土器には時期差が認められず、最初から木桶の井戸側を用いた径80cm程の

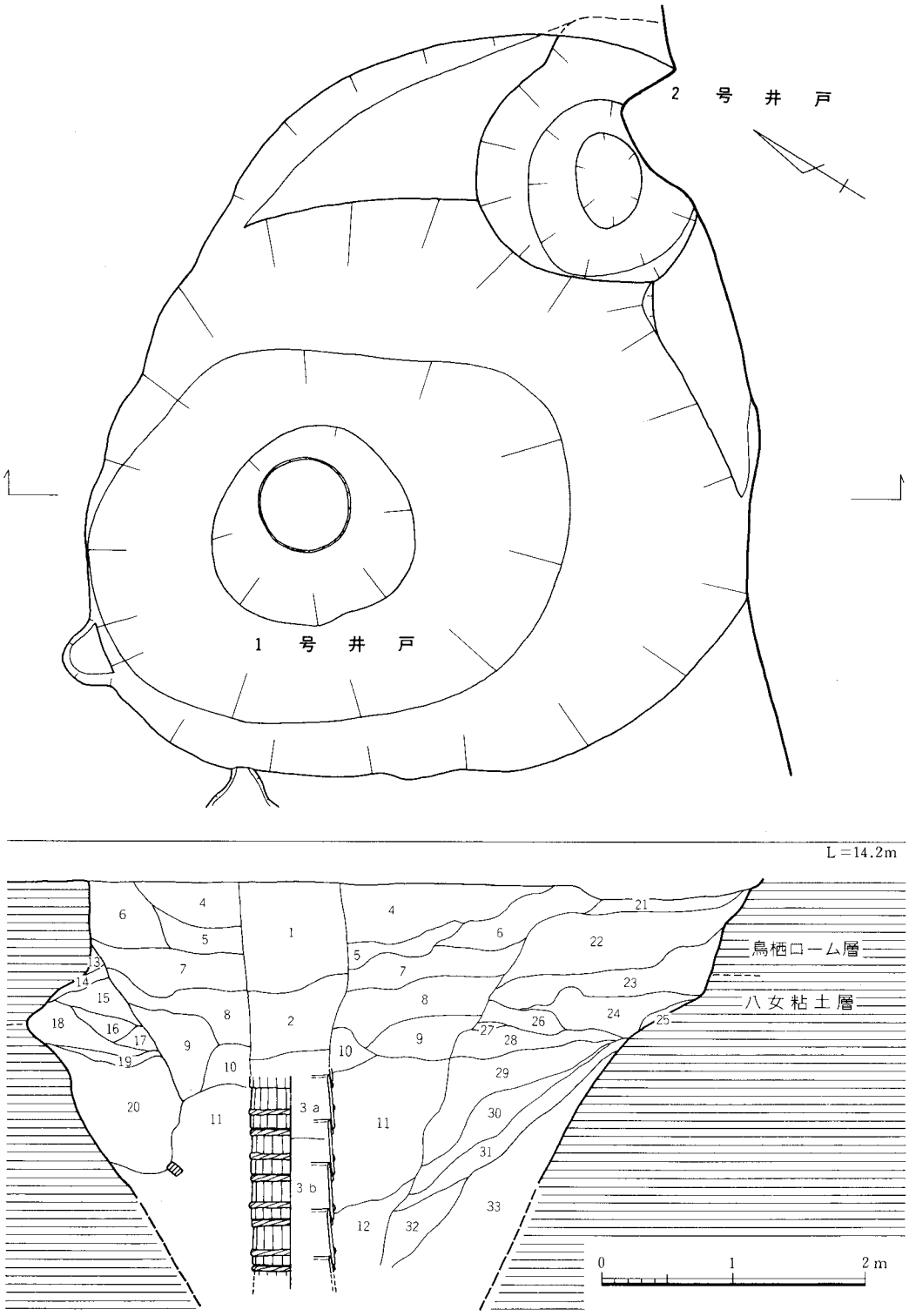


Fig. 4　1号井戸・2号井戸実測図（1/50）

井戸を計画していたと考えられる。

出土遺物は、まず井戸側内出土のものから記す。Fig. 5～10, PL. 11～13。

1～11は土師器である。1～6は小皿で、回転糸切り・ヨコナデがされる。1を除いて、いずれも、底部から外反気味に立ちあがり、内湾して口縁となる。1は口径7.2cm、底径5cm、器高1.8cmで、体部は丸味を持つ。2は口径6.5cm、底径4.6cm、器高1.8cm、3は口径8cm、底径5.5cm、器高1.8cm、4は口径8.8cm、底径6.1cm、器高1.9cmをそれぞれ測る。7～11は、坏で、回転糸切り・ヨコナデ調整である。器形の特徴は、小皿と共通する。8は口径11cm、底径7.3cm、器高2.9cm、9は口径12cm、底径8.6cm、器高2.8cmである。7・11は3b層出土、他は3a層

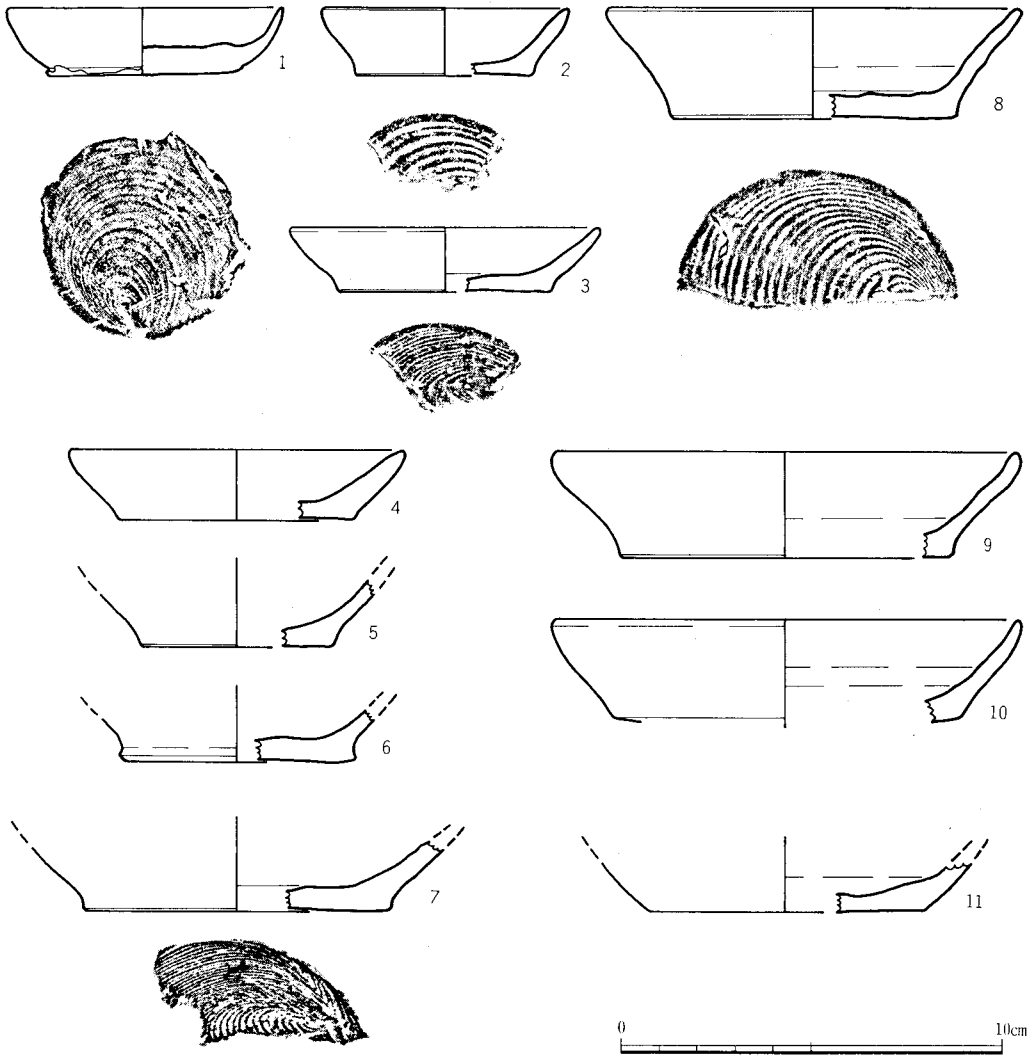


Fig. 5　1号井戸井戸側内出土遺物（1/2）

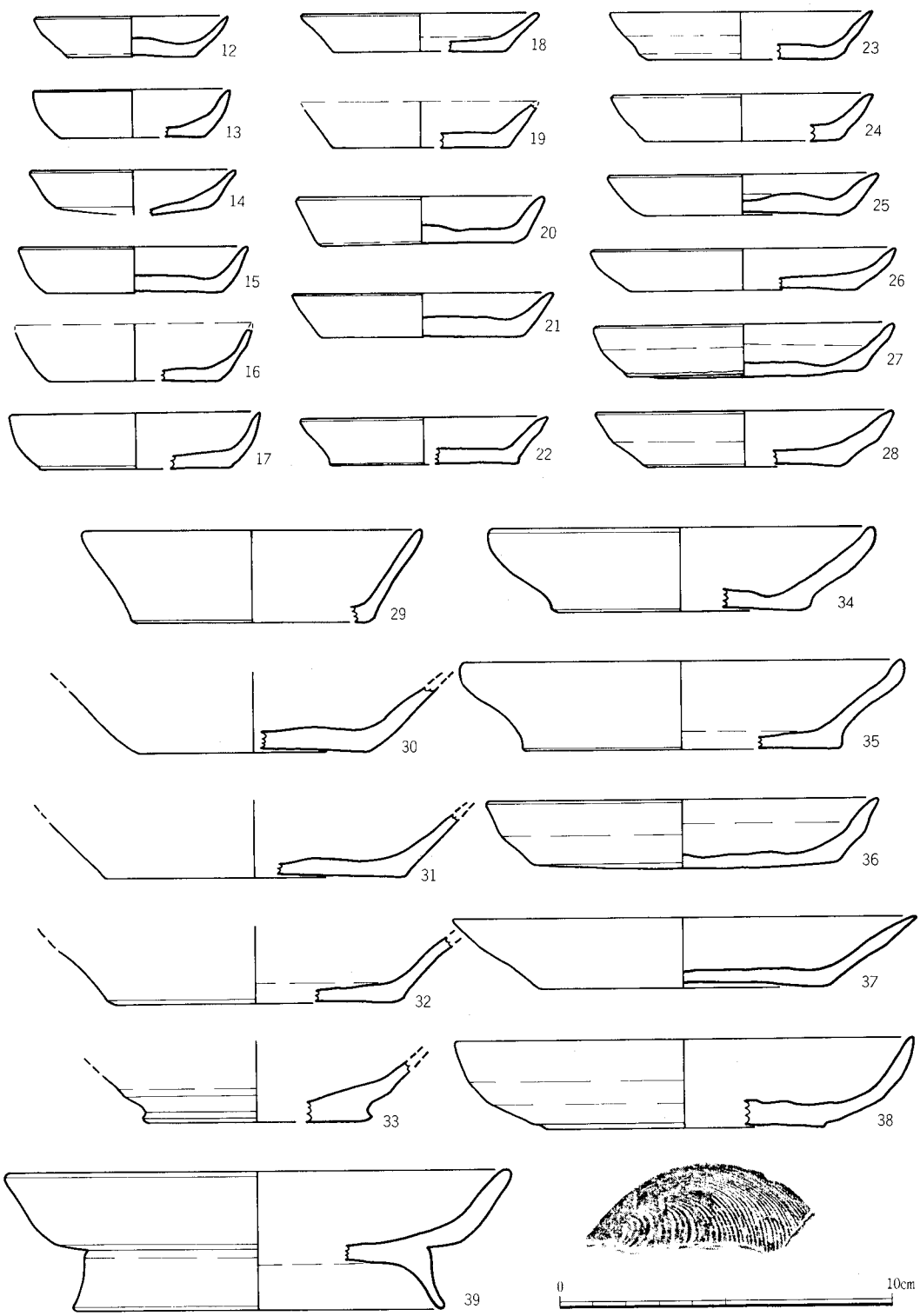


Fig. 6　1号井戸出土遺物1（1/2）

出土で、井戸側の木桶内より出土した。次に掘り方出土の遺物について記す。12～18は、土師器小皿である。12～17は、体部がやや丸味を持つ。12～14は口径5.2～5.9cm、底径3.8～4.6cm、器高1.2～1.5cmを測る。12は、回転糸切りである。15～17は口径6.8～7.5cm、底径5.1～5.6cm、器高1.3～1.7cmで、15はやや浅目である。16は、回転糸切りでヨコナデ調整される。18～21は、体部が直行して外側に開くもので、回転糸切り・ヨコナデ調整をうける。口径7.1～7.9cm、底径5.1～6cm、器高1.2～1.5cmである。22は、体部が一旦外反した後内湾して口縁に至るもので、口径7.5cm、底径5.6cm、器高1.4cmを測る。回転糸切りで、ヨコナデされる。23～25は、底部から丸味を持って体部につながるもので、口径7.8～8.1cm、底径5.6～5.9cm、器高1.3～1.5cmである。26～28は、口径の広い浅い皿状のもので、口径9～9.2cm、底径5.8～7cm、器高1.3～1.7cmを測る。底部は回転糸切りで、体部はヨコナデである。29～39は、土師器の坏である。高台を持つ39を除いて、回転糸切りで内外面はヨコナデされる。29は口径10cm、底径6.8cm、器高2.8cmで、体部は直行する。34・35は、体部が外反した後に内湾・肥厚するタイプ

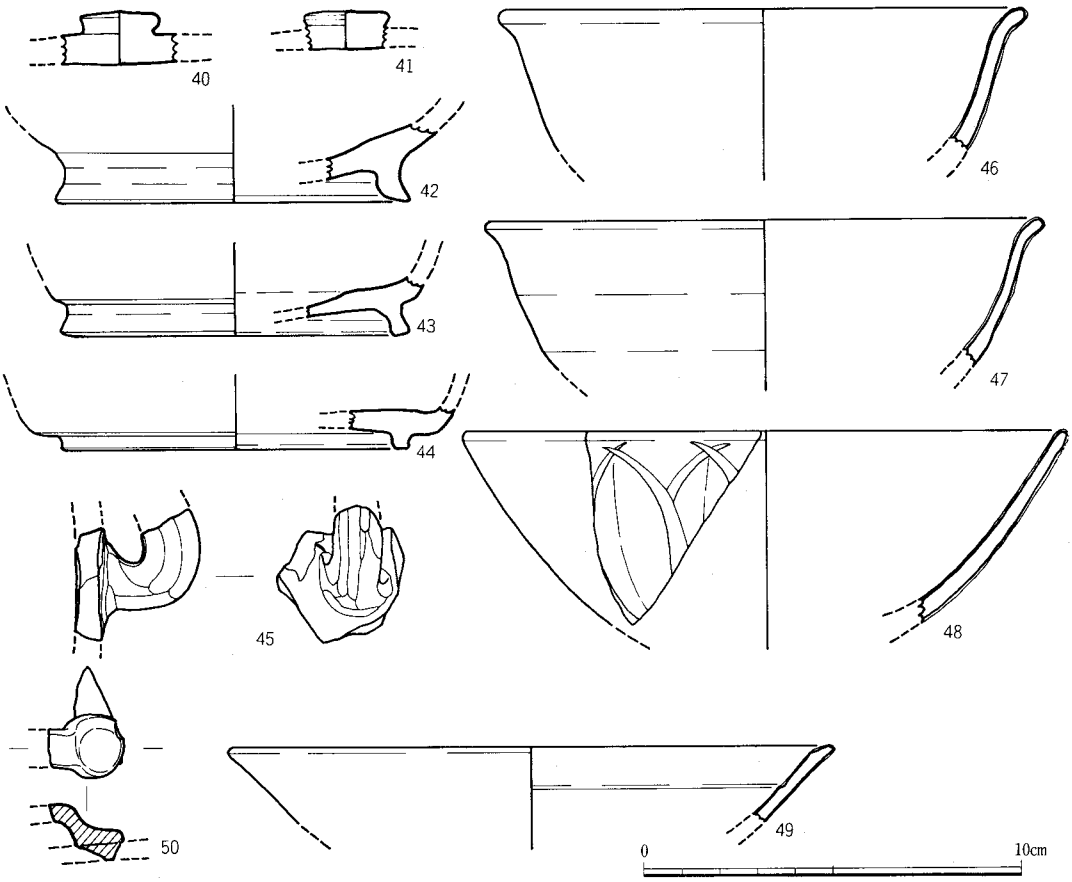


Fig. 7　1号井戸出土遺物2（1/2）

である。**34**は口径11.5cm、底径7.4cm、器高2.6cm、**35**は口径13.1cm、底径9.5cm、器高2.8cmを測る。**36**～**38**はいわゆる皿で、口径11.7～14cm、底径8.6～9cm、器高2.1～2.8cmである。**39**

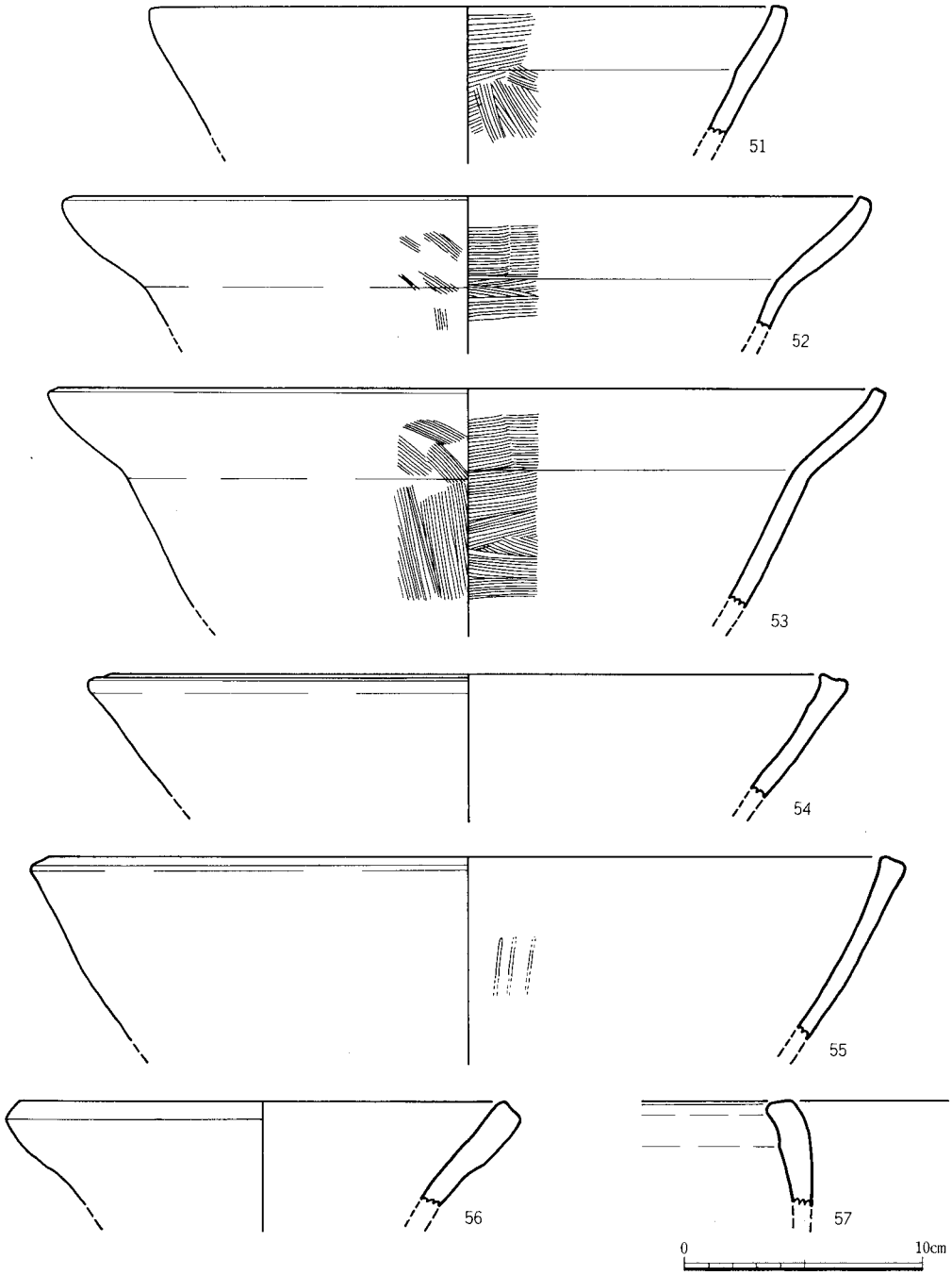


Fig. 8　1号井戸出土遺物3（1/3）

は、高台が付く。口径15cm、高台径11cm、器高4.3cmを測る。焼成はよくない。40～45は須恵器である。40・41は、宝珠状つまみ、42～45は底部、45は把手で上半を欠く。46～48は青磁椀である。46・47は、口縁が外反するもので、46は径13.5cmで灰緑色、47は径14.5cmでくすんだ緑色を呈する。48は径15.8cm、淡緑褐色の釉がかかる。鎬蓮弁文が施される。49は白磁椀で、径15.8cm、やや青味をおびた透明の釉が薄くかかる。50は、青磁の耳である。くすんだ緑色を呈す。51～53は、土師器の土鍋である。51は、口縁がほとんど屈曲せず内面にわずかな稜をとどめる。口径は、51が26cm、52が33cm、53が34.5cmである。いずれもススが付着する。54

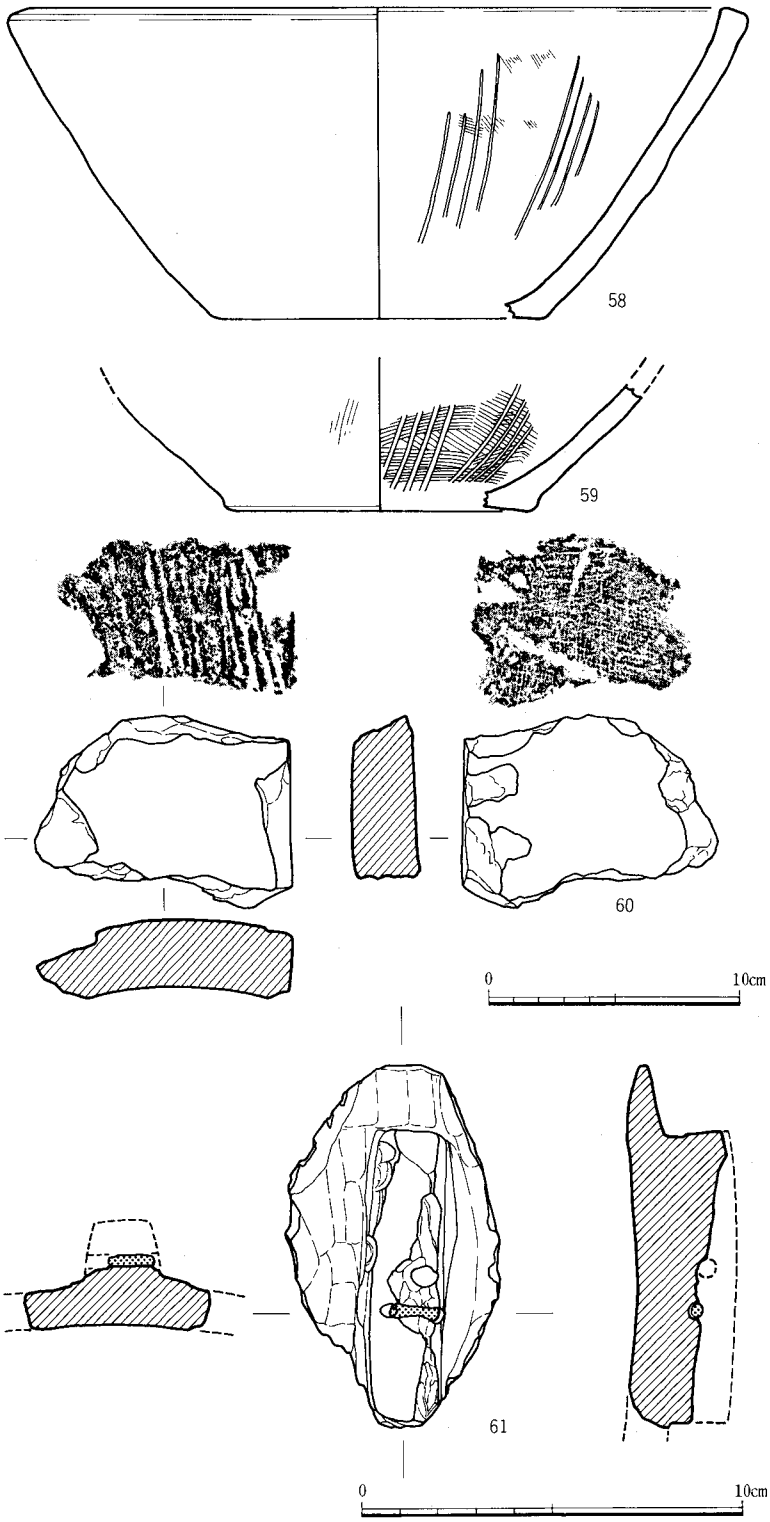


Fig. 9　1号井戸出土遺物 4（1/3・1/2）

・55は土師器の鉢で、54は径30cm、55は35cmを測る。55は摺鉢で、内面に3条の沈線が残る。共に淡褐色で、焼成は悪い。56は、土師質土器の鉢で、径20cm、淡灰褐色を呈し、砂質で焼成は悪い。57は土師器の火鉢である。胎土は粗く、焼成は悪い。58・59は、瓦質土器の摺鉢である。58は、不整形土坑P．43出土のものと接合できた。口径27.5cm、底径13cm、器高12.4cmを

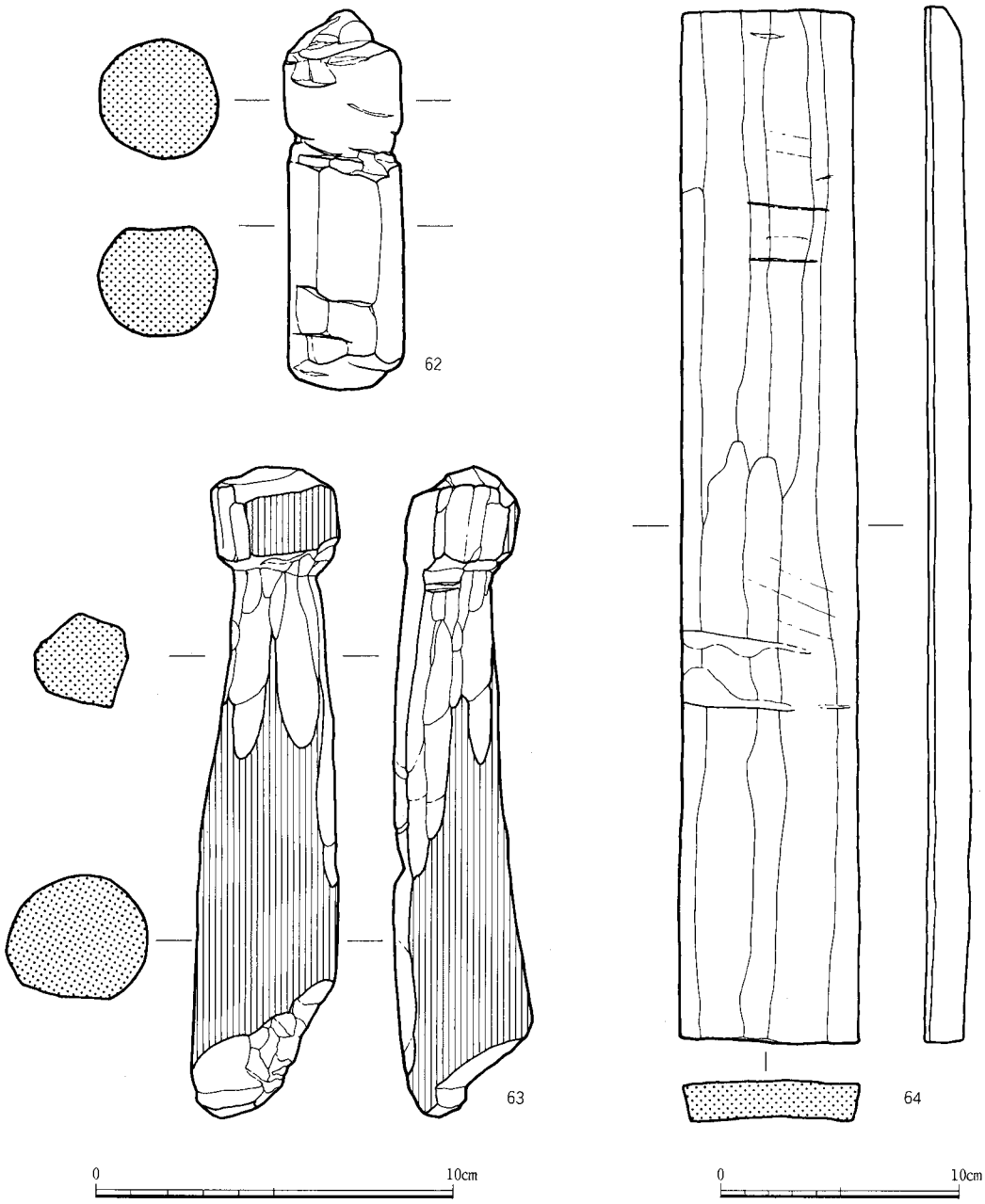


Fig.10　1号井戸出土遺物5（1/2・1/3）

測る。黄灰色を呈し、焼成は悪い。内面に4条単位の沈線が刻まれ、部分的にナナメハケの痕が残る。**59**は、底径12cmの底部である。暗灰色を呈し、焼成はややあまく、特に外面の器壁は流れる。内面は、ヨコハケの上から4条単位の沈線を刻む。外面には、部分的にタテハケが残る。**60**は、平瓦の破片である。厚さ27mmを測る。焼成が悪く、褐色を呈する。**61**は、石鍋片であるが、折損した箇所に磨り削った痕跡が見られ、再加工品と思われる。鉄芯が、銹着して残っている。**62**～**64**は、木製品である。**62**・**63**は、用途不明である。折損はしていない。**62**は長さ10.8cm、径3.3cm、**63**は長さ18.5cm、径4cmを測る。**63**は、部分的に樹皮を残す。**64**は、井戸枠の木桶に使われていた板材である。出土した状態で上下を決めたので、木桶の底側を上とした。長さ43.8cm、幅7.4cm、厚さ1.6cmで、底部側内端を斜めに削りおとす。表面は削って仕上げる。上下に2ヶ所、箍の痕跡がみられる。

2号井戸　Fig. 4

1号井戸の埋土に切り込んで作られていた。直径は、検出面上で175cmを測り、下に行き次第に狭くなる。深さ1.5m付近まで調査した所で、なお狭くなりながら深くなることが予想されたが、安全のため掘り下げるのを断念した。深さ1.5mあたりで、直径は65cm前後である。深さ1m程から下には、犬頭大の礫がぎっしりとつまっていた。井戸側に積まれていた石が倒壊したものかとも考えられるが、発掘調査をした深さまででは、井戸側に石が積まれていた形跡は確認できなかった。もし、井戸側に石が積まれていたとすれば、礫の形状から、野面積みであったことが推測できる。礫にまじって、石臼の破片が3片出土している。

出土遺物は、土師器・瓦質土器・備前焼き・石臼などである。 Fig. 11・12, PL. 14

65は土師器の坏である。底径5.1cm。胎土は砂質で、淡黄褐色を呈する。焼成は悪い。回転糸切りで、ヨコナデ調整を受ける。**66**は、土師器の羽釜である。口径14.5cmを測る。耳は折損する。耳の孔に、鉄銹が付着している。外面はヨコナデ、頸部内面はヨコナデ、体部内面には指頭圧痕が残る。頸部外面に、亀甲形のスタンプ文を押す。胎土は砂質、淡褐色を呈し、焼成は甘い。体部外面に、ススが付着する。**67**・**68**は、土師質土器の摺鉢である。**67**は、口径39cm、淡褐色を呈する。焼成は普通であるが、体部外面の器壁は流れ調整不明、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面はナナメハケで、3条単位の沈線を刻む。**68**は、底径16.4cm、外面は灰褐色、内面は淡褐色を呈する。底部外面には、ハケメを残す。内外面は、ヨコナデを施す。5条単位の沈線が刻まれる。焼成は良い。**69**は、瓦質土器の火舎である。口径31cm。2条の突帯を貼り付け、その間に四ツ目結のスタンプ文を付ける。器壁は、ナデ調整される。胎土は微砂まじりで、暗褐色を呈し、焼成は悪い。**70**は、備前焼きの摺鉢である。口径40.3cmを測る。口縁は、上端が摘み上げ気味、下端が垂れ気味になるが、それぞれ端部を欠く。内外面ともヨコナデ調整されている。体部内面の沈線は、5条単位である。胎土は粗い砂粒を含み、赤茶色で、

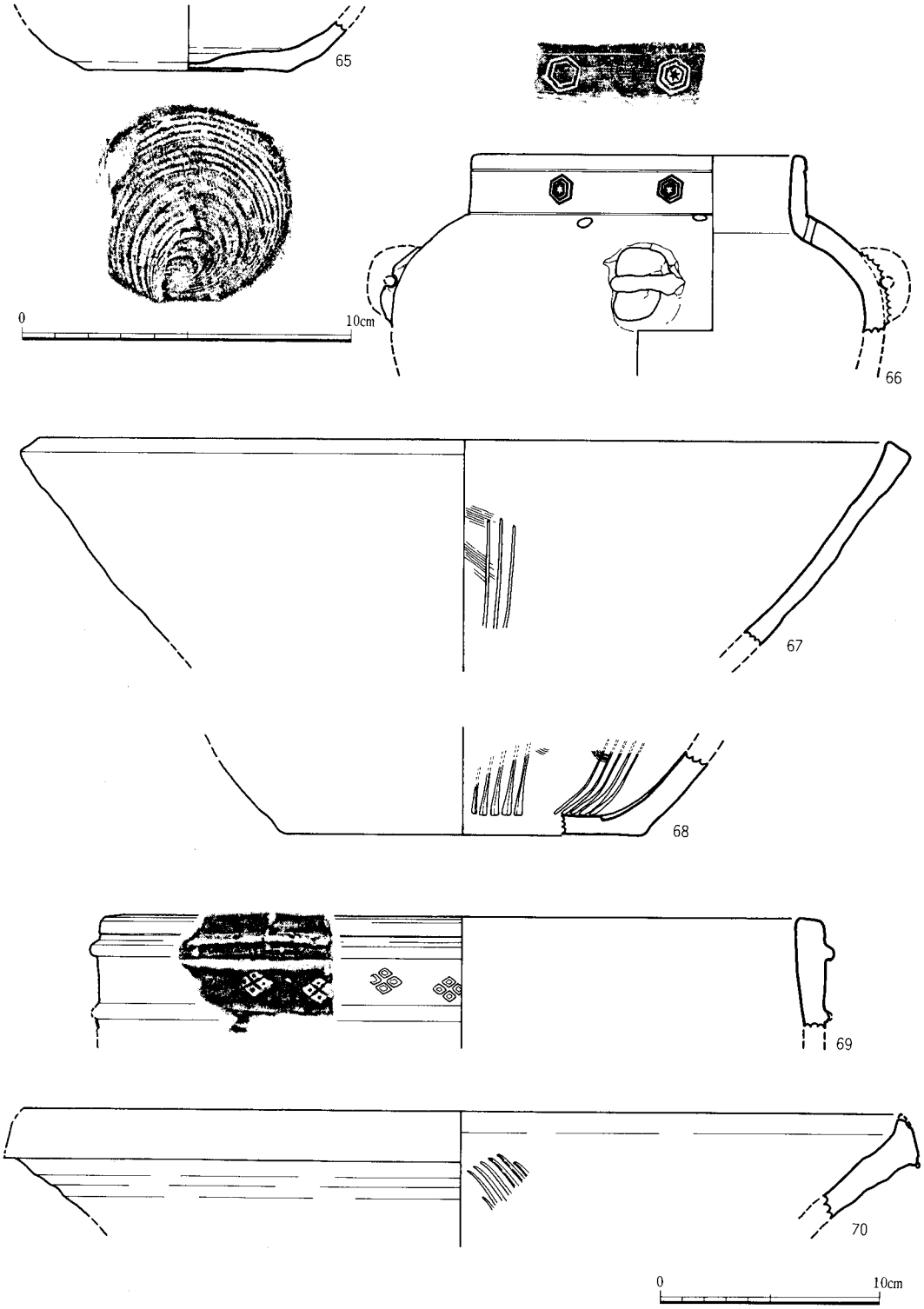


Fig. 11　2号井戸出土遺物 1（1/2・1/3）

焼成は堅緻である。**71**は、器種不明の土師器である。両端を欠くが、元来は輪状であったと思われ、内径18cmを測る。内外面はヨコハケ、上下面はナデである。突起があり、その反対側は折損面をみせる。ここに脚が着いていたことが推定でき、三本脚の五徳状の器形と思われるが、ススは付いていない。淡褐色を呈し、焼成は甘い。**72**〜**74**は、石臼片である。弧に近い表面側は、磨れてつやを持つ。

3号井戸　Fig. 3

直径約4mの素掘りの井戸である。深さ約2.5mまで掘り下げたが、それ以上は断念した。八女粘土層まで掘り込んでいる。

出土遺物　Fig. 13
PL. 15−(1)

75・76は、土師器の小皿である。浅い皿状を呈す。**75**は、口径6.5cm、底径4.4cm、器高1.1cm、砂粒をまじえ、焼成はよくない。ヨコナデ調整がされる。茶色を呈する。**76**は、口径8.7cm、底径6cm、器高1.4cm、淡灰褐色で焼成は悪い。**77・78**

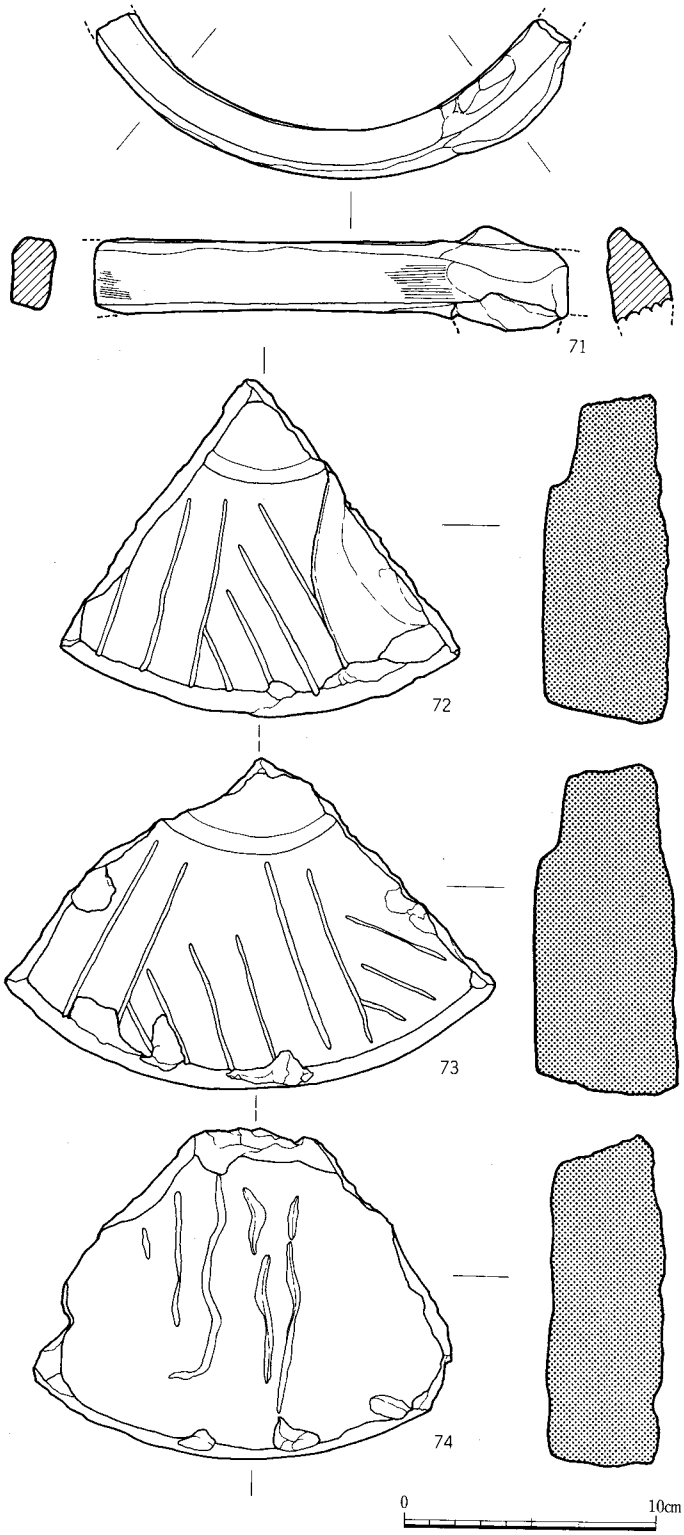


Fig. 12　2号井戸出土遺物2（1/3）

は、土師器の皿である。77は、口径11.8cm、底径9.1cm、器高2.1cmを測る。胎土は、砂粒を含むがよく整い、淡褐色を呈す。焼成は普通であるが、器壁は流れ気味で調整はわからない。糸切り底である。78は、口径11.4cm、底径7.8cm、器高2cmである。糸切り底で、内外面はヨコナデ調整である。底部は、外側にやや張り出す。胎土は精良で、キンウンモを交える。淡褐色を呈する。焼成は普通である。79・80は、青磁椀である。79は、口径16.3cmで、くすんだ淡緑色の釉がかかる。外面に雷文を施す。80は、口径10.2cm、淡緑灰色の釉が薄くかかるが、表面があらく光沢をもたない。見込みに圏線を有する。朝鮮の青磁である。81・82は、土師器の鉢である。81は、口径31.5cmを測る。胎土は、径3mm大の石英粒や径1mm大の砂粒を多く含み、非常に粗い。焼成も悪く、褐色を呈す。82は、口径30.4cm、細砂粒を多く含み、焼成はやや甘い。外面は暗褐色、内面は淡灰褐色を呈す。

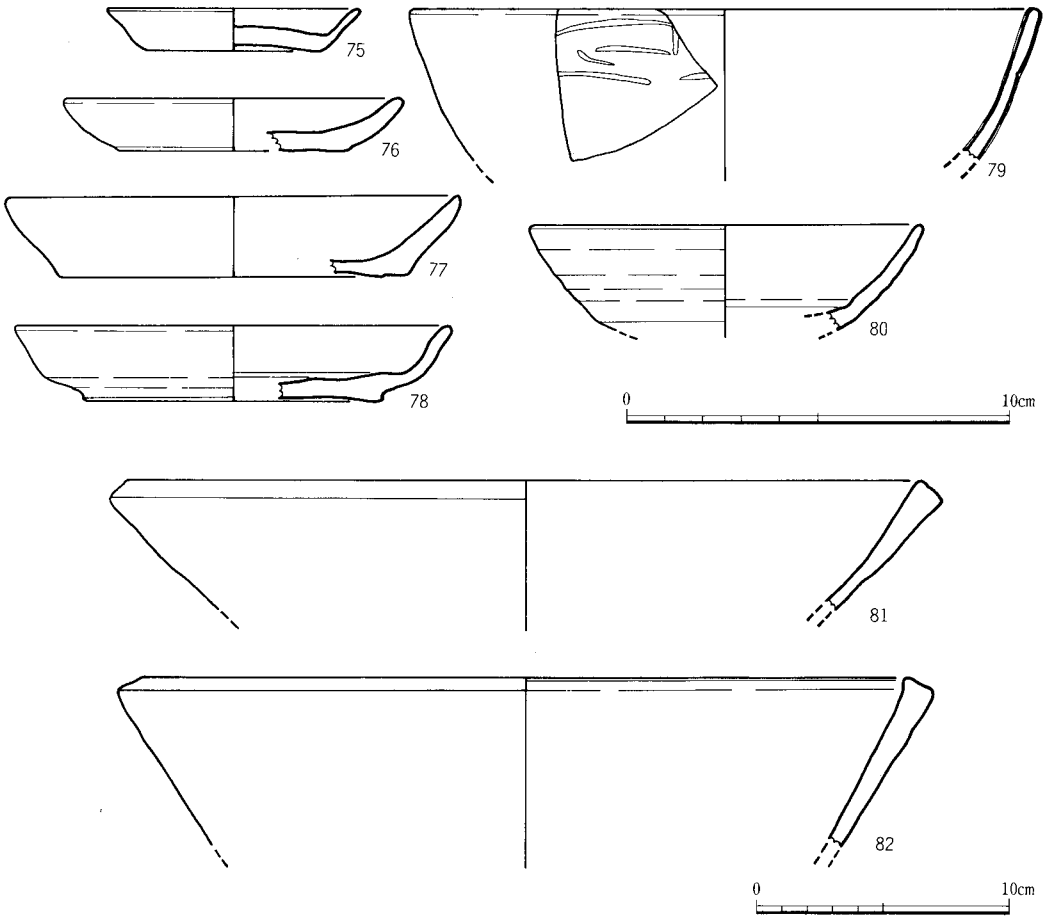


Fig.13　3号井戸出土遺物（1/2・1/3）

(1)　竪穴遺構

1号竪穴遺構　Fig. 14,　PL. 3

7号竪穴遺構の北の土坑である。主軸方向を$N-44°10'-W$にとる。土坑の床面には、大小15個の石が置かれている。長軸143cm、幅108cm、深さ13cmを測る。遺物は、なにも出土していない。敷石土坑墓かとも考えられたが、不明である。

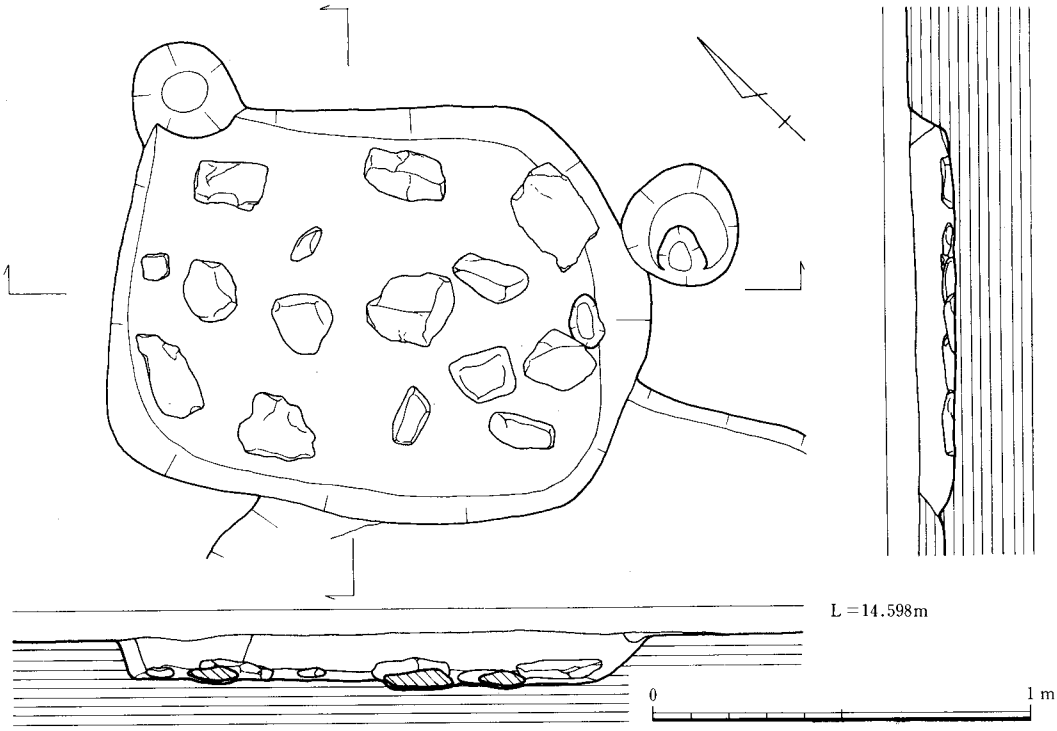


Fig. 14　1号竪穴遺構実測図（1/20）

2号竪穴遺構　Fig. 16
PL. 4

小判形の平面を示す土坑。長さ108cm、幅62cm、深さ48cmである。埋土の中位から、土師器の鍋（Fig. 15, PL. 16−(1)）が出土した。口径26.5cm、器高は復元で12.5cmを測る。底部から体部にかけて、ゆるい稜をな

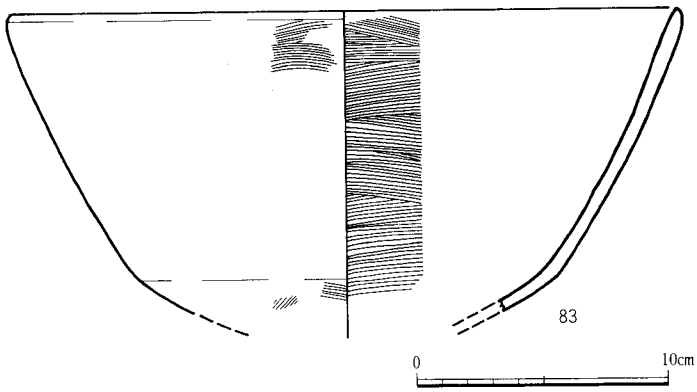


Fig. 15　2号竪穴遺構出土遺物（1/3）

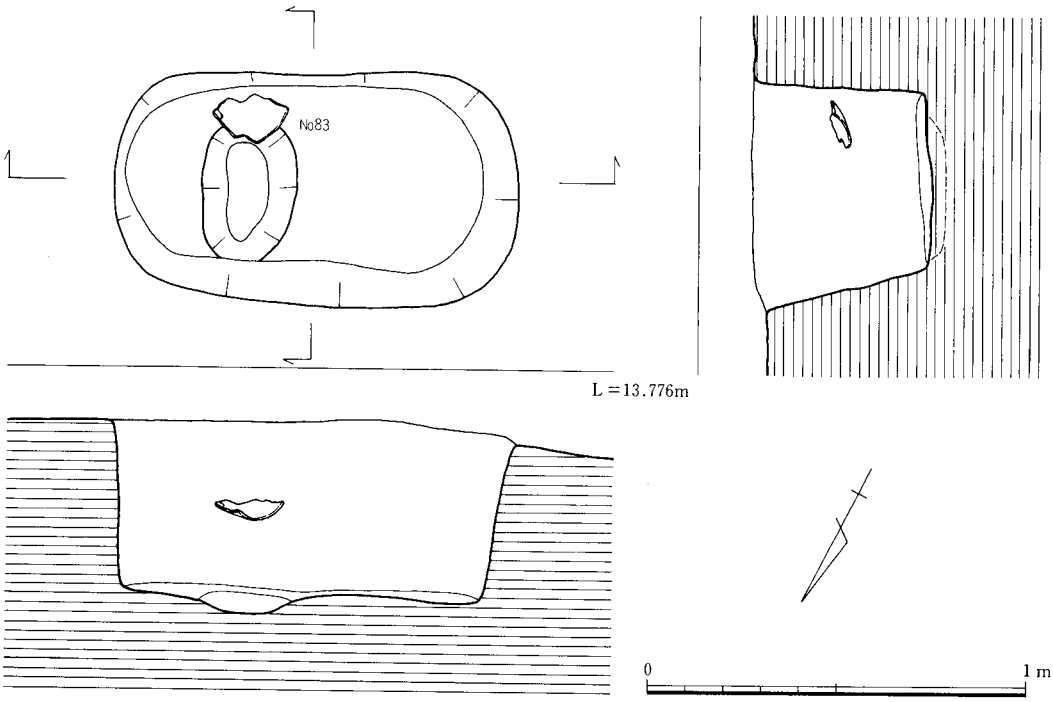


Fig. 16　2号竪穴遺構実測図（1／20）

し、口縁は直行する。内外面ともヨコハケ調整がなされるが、内面において特に残りが良い。底部外面は、遺存部分が少ないのでよくわからないが、タテハケ調整のようである。口縁端部は、ヨコナデがされている。内外面とも褐色を呈すが、外面は口縁部下から赤味を増し、底部付近では赤褐色になる。ススの付着はみられない。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。

3号竪穴遺構　Fig. 17

円形で皿状の土坑である。長径約300cm、短径約250cm、深さ50cmをはかる。埋土の土層は、次の通りである。1層―淡褐色壌土質土層、2層―褐色土層、3層―暗褐色粘土層、鉄分を多く含む、4層―黄灰色砂質土層、5層―黄褐色壌土質土層、6層―黄褐色粘質土層、7層―暗灰色粘質土層。埋土中には、5層を主として壁土塊がまじっている。

出土遺物は、土師器のみである。　Fig 18, PL. 15－(2)

84～**86**は、小皿である。**84**は、口径8cm、底径6.2cm、器高1.3cmで、胎土には径1mm程の砂粒をところどころにまじえる。淡黄褐色を呈す。焼成が悪く、調整痕はみえない。**85**は、口径7.8cm、底径6.2cm、器高1.5cmを測る。胎土は、若干の微砂粒をまじえるものの全体によくととのっている。灰褐色を呈する。焼成不良のため調整はわからないが、外面体部はヨコナデされている。**86**は、口径7.7cm、底径6cm、器高1cm。小砂粒をところどころに交え、淡褐色を呈する。焼成は悪く、調整が窺えない。

87～**89**は、坏である。**87**は、口径13cmで、大きく外に開く器形をなす。体部中程で、明瞭な段

をなして器壁が薄くなる。外面は灰褐色、内面は淡赤褐色を呈する。胎土は、径1㎜大の砂粒を多く含み粗く、焼成も悪い。88は、口径13.6cmを測る。砂粒はほとんど含まないが、胎土は粗く、淡褐色である。89は、口径13cm、底径11cm、器高2.5cmである。径2㎜大の砂粒をところどころ含む。焼成不良のため、調整の状態はわからないが、底部には回転糸切り痕が残る。淡赤褐色を呈する。

90～92は、鉢である。90は、口径28.2cmである。胎土には、径2㎜以下の大粒の砂粒が含まれる。淡灰褐色を呈する。焼成が悪いため、器壁表面が剝落し、調整はわからない。91は、片口の鉢である。口部分のすぐ下に径2㎜程の穴が一孔穿たれ、うすく鉄銹が付着している。胎土は、細かい砂粒を多く含む。焼成は悪く、表面が流れている。淡茶色。92は、口径が不確実であるが、38cm程度で、外面は赤褐色、内面は灰褐色。胎土は粗い砂粒を含み、焼成はあまい。

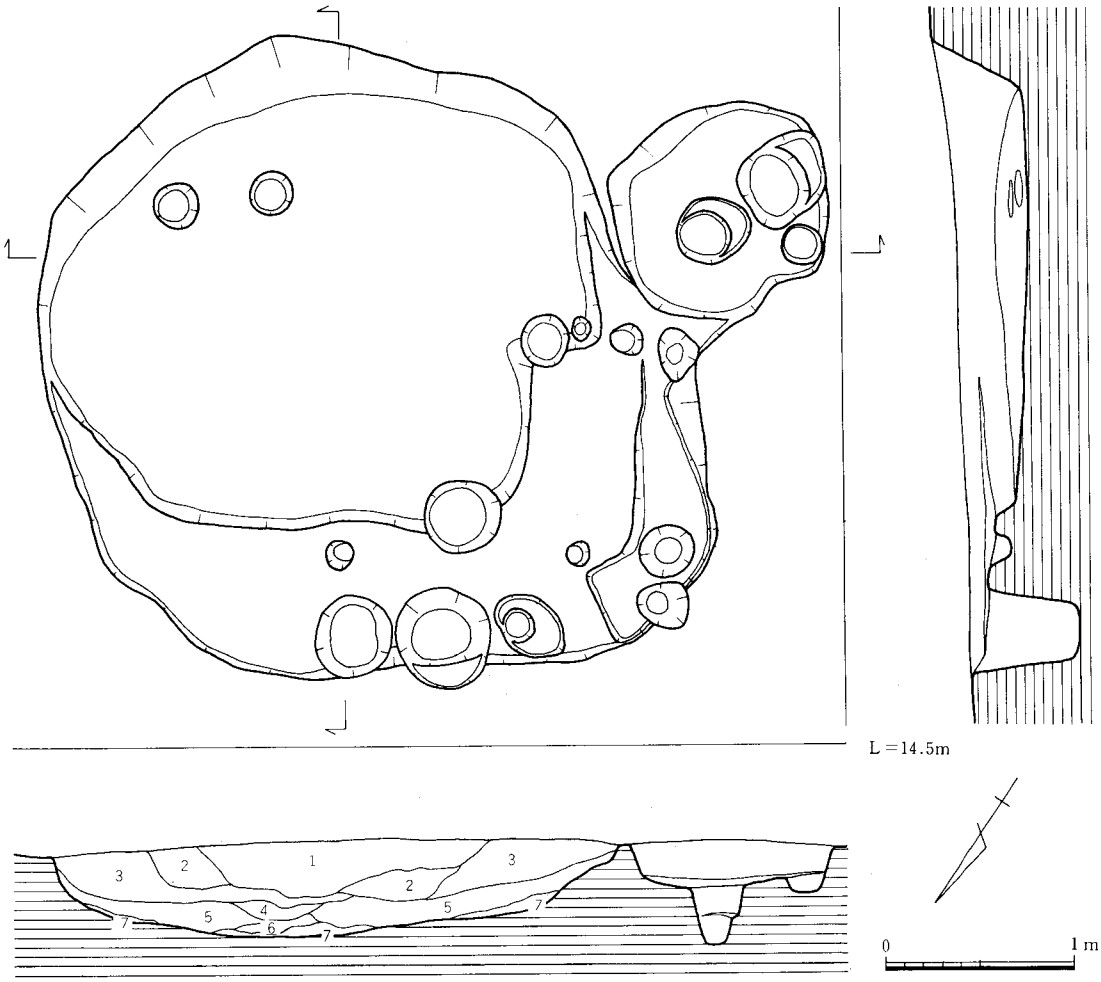


Fig. 17　3号竪穴遺構実測図（1/40）

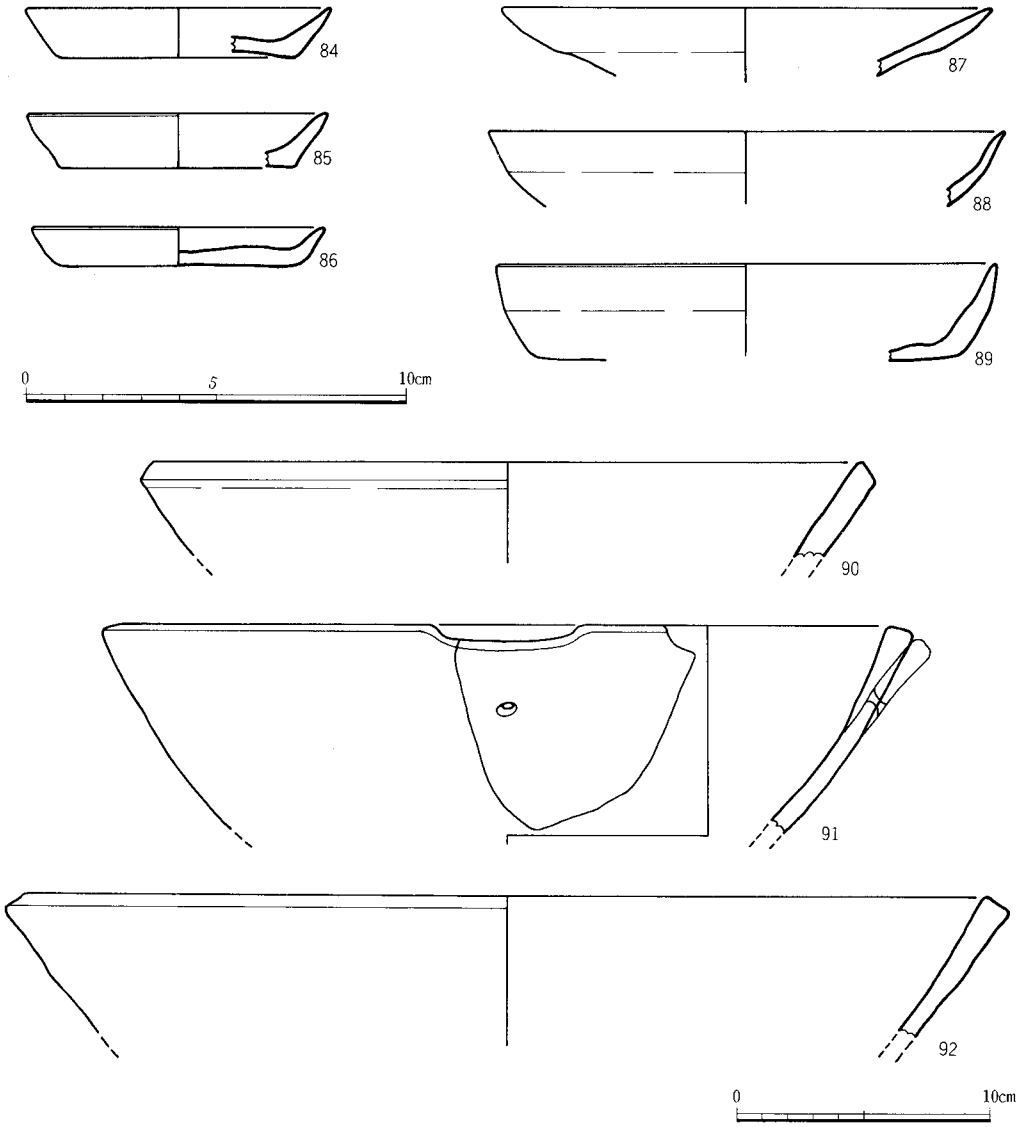


Fig. 18　3号竪穴遺構出土遺物（1/2・1/3）

4号竪穴遺構

Fig. 20, PL. 5

ほぼ円形の土坑である。壁土塊が多量にはいっていた。土層図の1層が、壁土塊を含む灰色

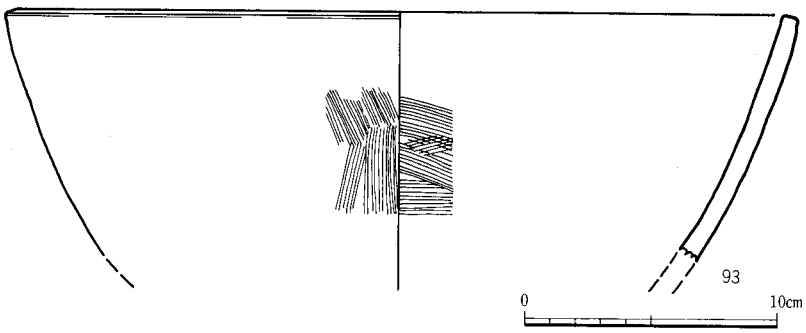


Fig. 19　4号竪穴遺構出土遺物（1/3）

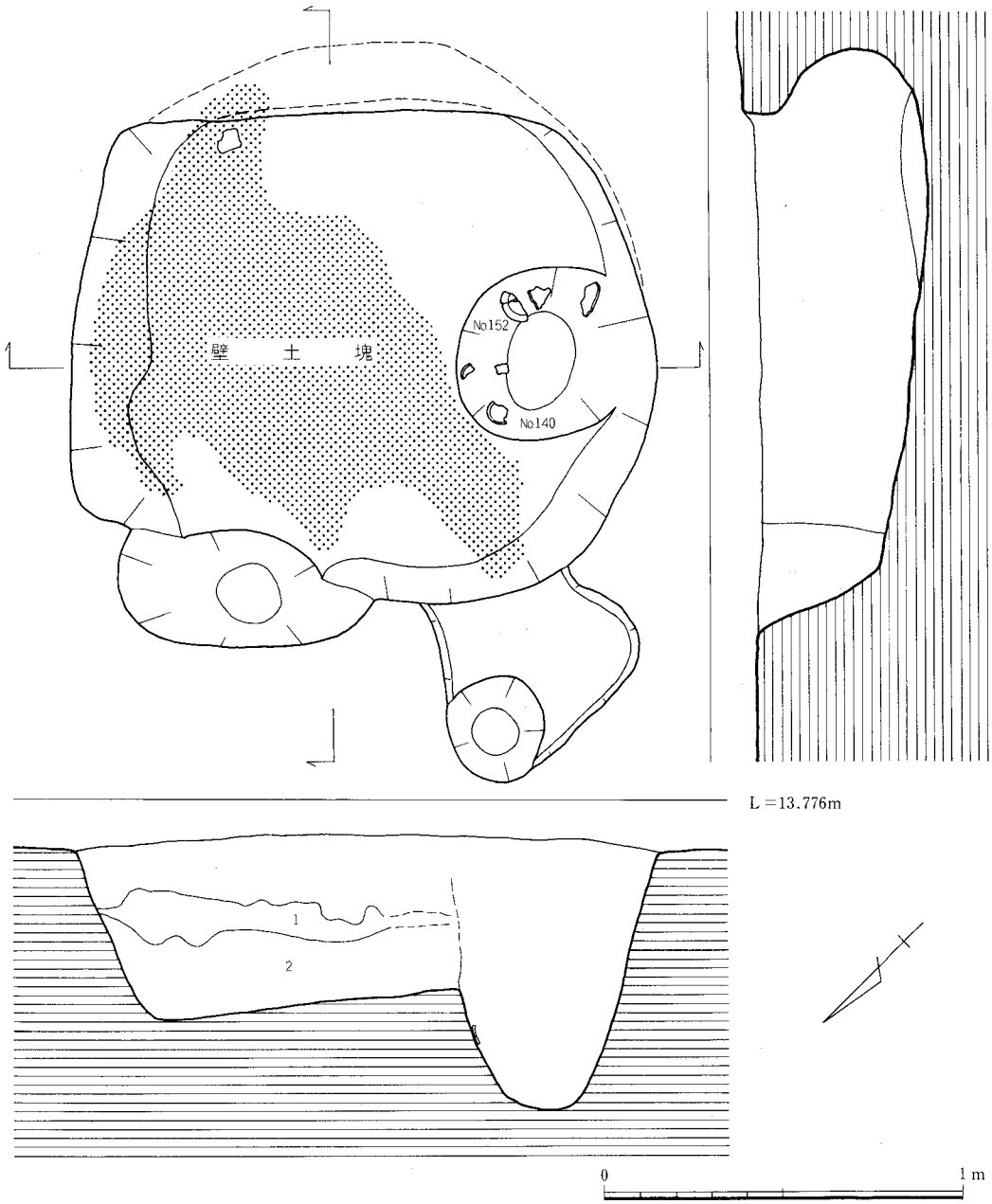


Fig. 20　4号竪穴遺構実測図（1/20）

粘質土層である。2層の暗黄褐色土層は、炭化物を若干含むが、壁土はほとんどまじらない。土師器の鍋が出土した。（Fig. 19, PL. 16－(2)）口径32cmで、下半部を欠く。口唇部は、平坦にナデが施されている。内面はヨコナデ、外面は口縁部をヨコナデし体部をタテハケで調整している。胎土には、小砂粒を多く含み、焼成は普通。内面は茶色、外面は暗赤褐色を呈するが、外面にはススが付着している。

5号・6号竪穴遺構　Fig. 22,　PL. 6

5号竪穴遺構は、6号竪穴遺構を切る。なお、5号竪穴遺構覆土に掘りこまれたP. 43出土の瓦質摺鉢片は、1号井戸出土の物と接合できた。(Fig. 9, **58**) 5号竪穴遺構は、長軸方位$N-36°10'-W$で、長軸250cm、幅192cm、深さ52cmである。6号竪穴遺構は、長軸方位$N-53°50'-E$で、5号竪穴遺構に切られているため長さはわからないが、少なくとも260cm以上、幅172cm、深さ34cmを測る。5号竪穴遺構からは、遺物が出土していない。6号竪穴遺構からは、土師器の坏が出土している。Fig. 21,　PL. 6－(2),　PL. 16－(3)

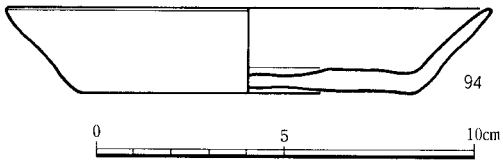


Fig. 21　6号竪穴遺構出土遺物（1/2）

埋土の中位よりの出土である。口径12.8cm、底径8.8cm、器高2.3cmで、体部はやや外反気味に鋭く立ちあがる。径1mm大の砂粒をところどころまじえ、淡黄褐色を呈す。焼成は悪い。

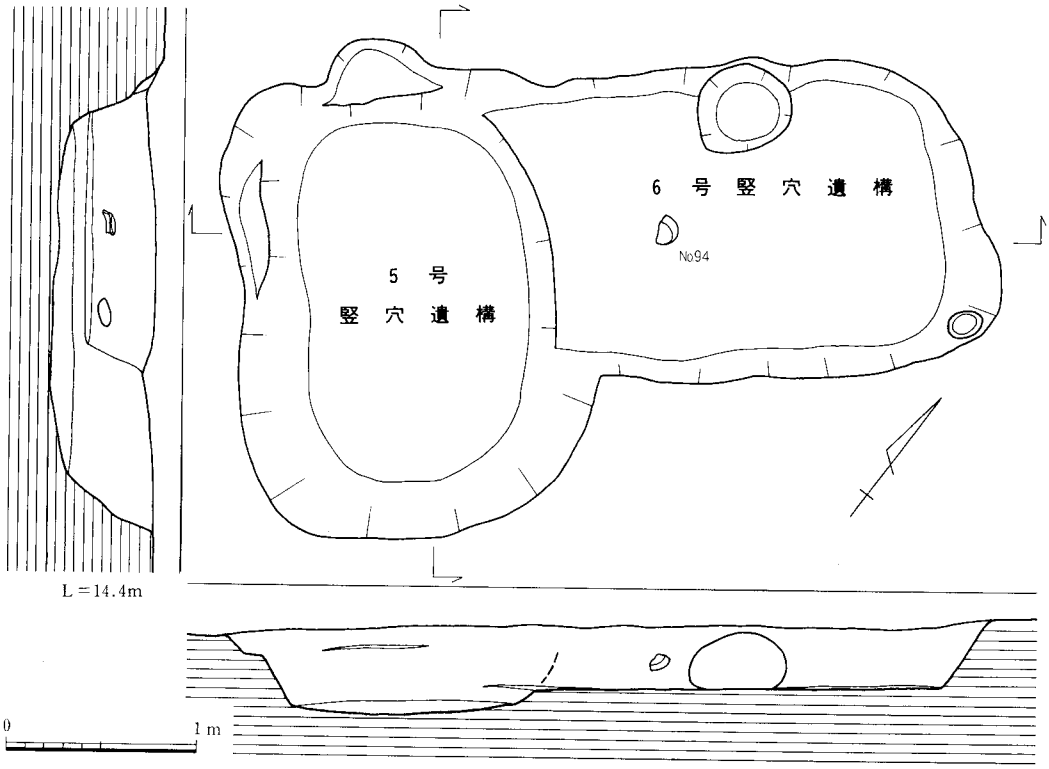


Fig. 22　5号・6号竪穴遺構実測図（1/40）

7号竪穴遺構　Fig. 3,　PL. 7

平面形は、隅丸方形を示す。一辺は約250cm、深さは45cmをはかる。底は、一辺約150cmの平らな方形を呈する。8号竪穴遺構との前後関係はわからなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器・磁器などである。Fig.23・24, PL.16－(2)

95～**97**は小皿である。**95**は、口径6.8cm、底径5cm、器高1.4cmで赤褐色を呈する。砂粒を含み焼成は悪い。**96**は、口径8cm、底径5.4cm、器高1.6cmで、回転糸切り、焼成はよくない。**97**は、口径8cm、底径5cm、器高1.4cm、回転糸切りで、焼成不良で、器壁表面は剝落する。**98**～**100**は坏である。**98**は、口径10.5cm、底径7.5cm、器高2.8cm、粗い砂粒を多く含む。**99**は、口径11.6cm、底径7.4cm、器高1.8cmで、砂粒を若干含む。**98**・**99**は、焼成が悪い。**100**は、口径13cm、底径9cm、器高2.2cm、胎土は粒がそろわず粗い。回転糸切りで、内外面ともヨコナデであるが、体部下半には指頭圧痕が残る。**101**は、白磁皿で、口径10cm、灰白色の胎土に透明の釉が薄くかかる。**102**・**103**は須恵器である。**102**は高台付近、**103**は口縁破片である。**104**は土鍋で、口径33cm、暗褐色を呈し、外面にはススが付く。口縁内面にヨコハケが残る。**105**は土師質土器の鉢である。口径34cmで、口縁部は肥厚する。淡褐色を呈し、大粒の砂粒をまじえる。**106**は、口径26.5cmの鉢である。胎土は粗く焼成もよくない。褐色を呈する。**107**～**110**は、摺鉢である。**107**は、口径31cmで、淡褐色を呈す。焼成が悪く、4条単位の沈線をわずかに残す。**108**は、口径45cmで、内面の沈線は3条単位、灰褐色を呈し、砂粒を多く含む。**109**・**110**は底部で、沈線の単位は4条・3条である。淡褐色を呈し、焼成はあまい。**111**は、羽釜である。口径16cmで、外面下半にはススが付く。淡黄褐色で、焼成はややあまい。

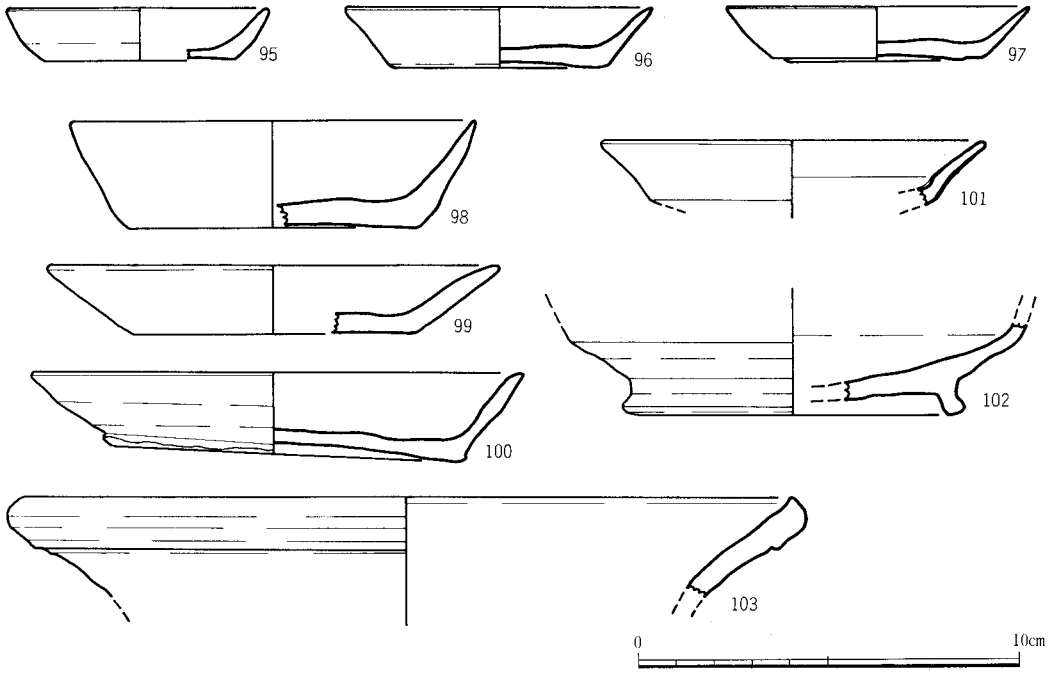


Fig.23　7号竪穴遺構出土遺物1（1/2）

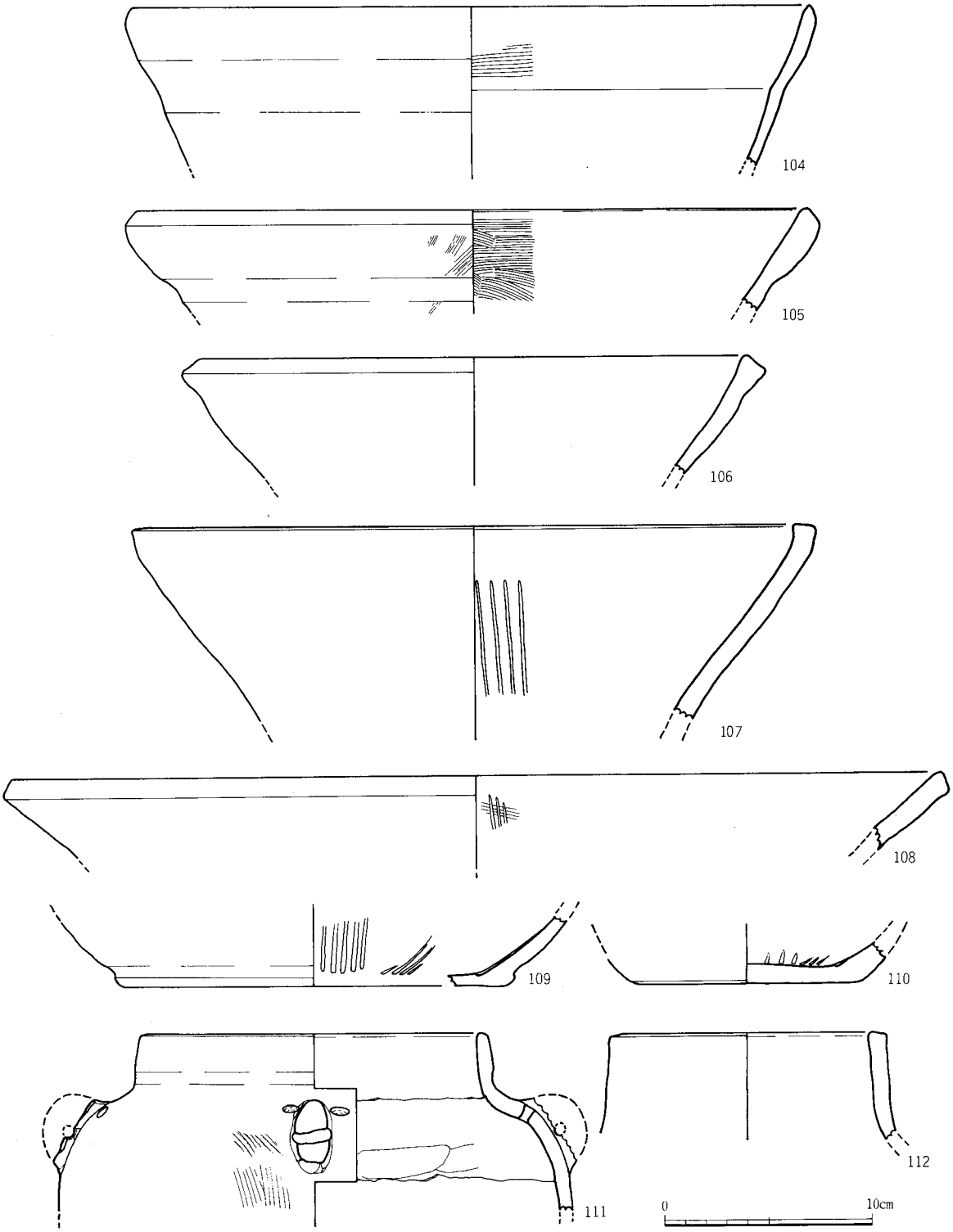


Fig. 24　7号竪穴遺構出土遺物2（1/3）

112は、径12cmをはかる口縁部破片である。暗茶色を呈し、胎土は砂粒を含んで粗い。

8号竪穴遺構　Fig. 3，PL. 7－(1)・8－(1)

径250cm、深さ140cmの円形土坑である。底は、八女粘土層まで掘りこまれている。

出土遺物は、土師器・磁器・瓦質土器・石器等、多岐にわたる。Fig. 25～29，PL. 17～19

113～116は小皿である。113・114は、口径6cm、底径5cm、器高1.2cmで、淡黄褐色を呈す。115・116は、口径7～7.2cm、底径4～5cm、器高1.5～2cmで、回転糸切りである。115は、内外面ともヨコナデされている。褐色である。117は、口径10cm、底径7.5cm、器高3cmの坏で

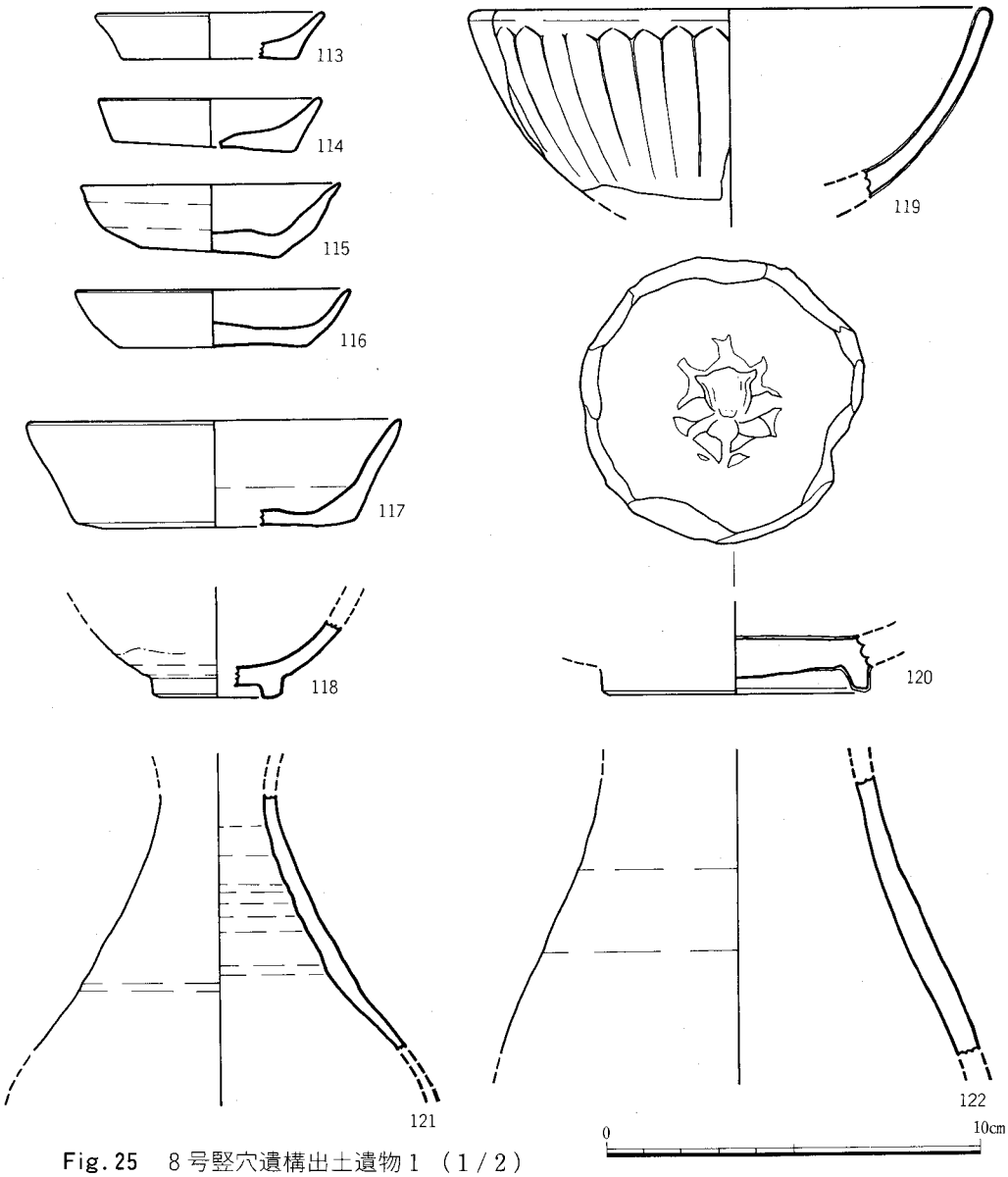


Fig. 25　8号竪穴遺構出土遺物1（1/2）

ある。体部外面はヨコナデされる。淡褐色を呈す。焼成不良。118は白磁椀である。褐色の胎土に白色の釉がうすくかかり、外面下半分には釉がかからない。119は青磁椀である。体部外面に、沈線で蓮弁文を刻む。灰白色の胎土に灰緑色の釉がかかる。120は青磁椀底部である。印花文が施される。灰緑色の釉が厚くかかる。121・122は雑釉陶器である。121は黄緑色、122はくすんだ緑色の釉が、赤褐色の胎土にかかる。123は、土師器の土鍋である。外面はタテハ

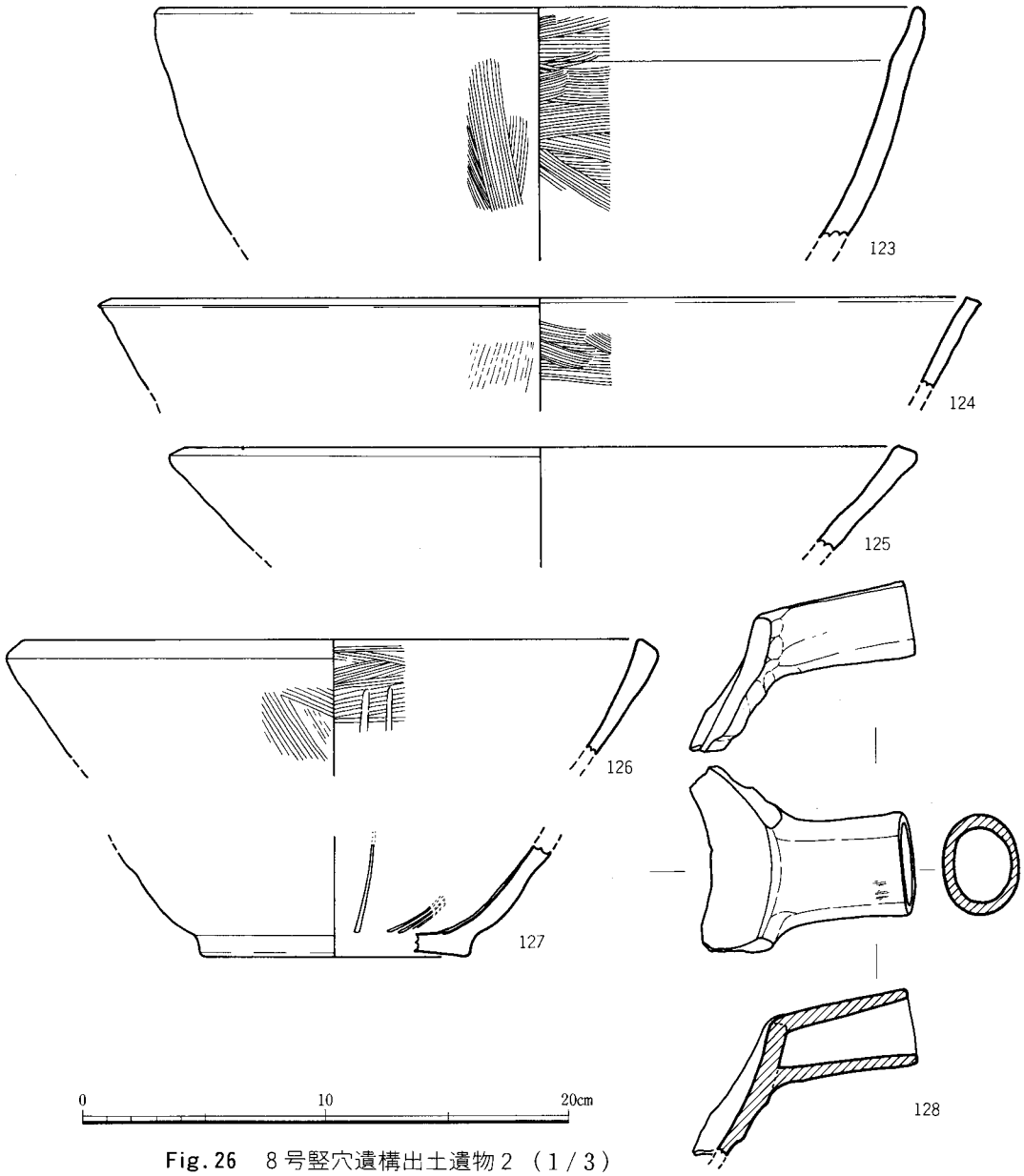


Fig.26　8号竪穴遺構出土遺物2（1/3）

ケ、内面はヨコハケである。124は土師器の鍋で、ススが付着する。125は土師器の鉢である。焼成は悪い。126は摺鉢である。浅い沈線がみとめられる。胎土は砂質で粗い。127は、土師質土器の摺鉢底部で、3条単位の沈線が施されている。大粒の砂粒を多く含む。128は、土師器の把手部分である。赤褐色で、把手はナデ整形され、接合部分は指でおさえている。129～131は羽釜である。129は耳を持たず、肩部分にスタンプで文様が押される。文様は、2個単位の箇所と1個のみの箇所があり規則性はみとめられない。130・131とも、破片のため、耳の個数は不明。130は、体部下半にススがついている。129・130は胎土が砂質で焼成が悪い。132・133は、瓦質土器の火舎である。

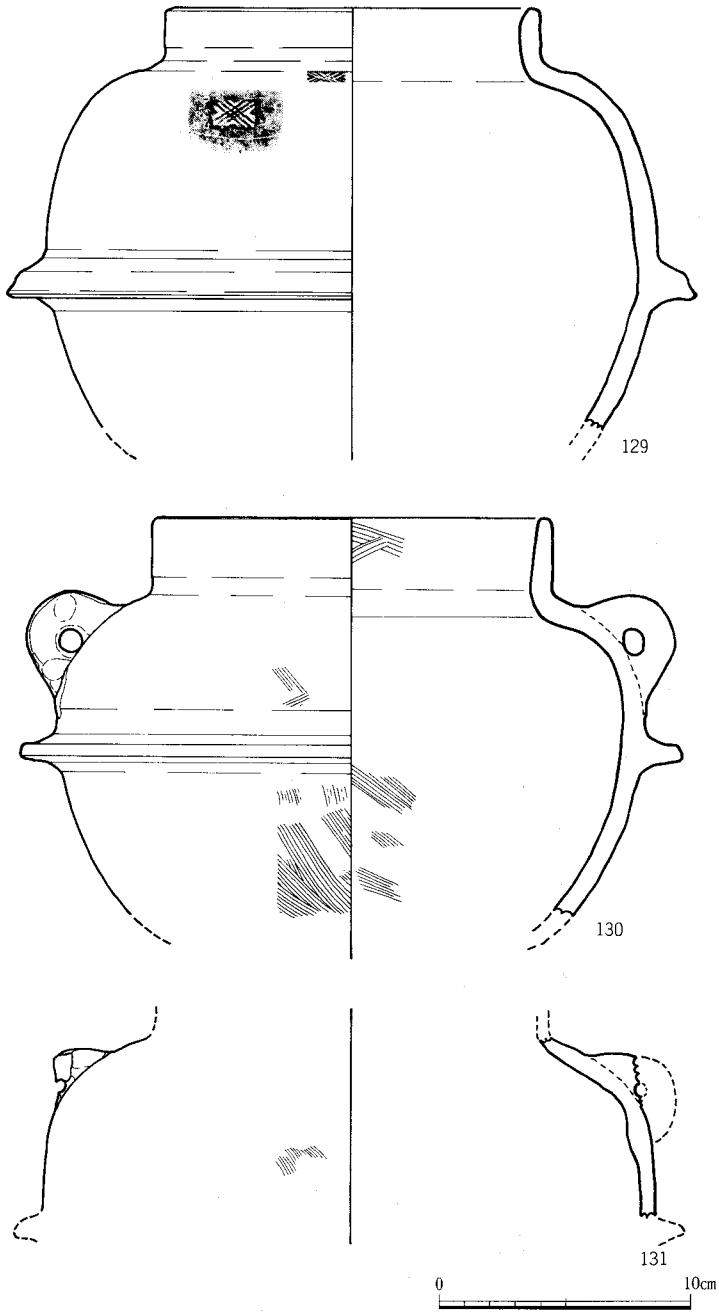


Fig. 27　8号竪穴遺構出土遺物3（1/3）

132は、スタンプの文様が連続して、とぎれなく回ると思われる。133には、2本の脚が残るが、配置からみて、元は3脚であった。上段と下段の突帯間に、横8の字形のスタンプをおす。脚にも円形スタンプが押される。体部外面はタテケズリ、内面上半はナナメハケで、下半はヨコハケになる。内面の底部にもハケ目が見られる。脚の接合部分には上に反った弧状の沈線がみ

られるが、これは、脚上半部分の上向きに傾く面を面取りした際に意識的につけられたものと思われる。130・131とも焼成は良く、暗灰色を呈する。134は、砥石である。4面が砥石として使われている。砂岩である。135は、磨製石剣である。基部を欠く。刃部はやや丸味を持ち、鋭くない。現存長9cm、最大幅3.2cm、厚さ1.1cmをはかる。

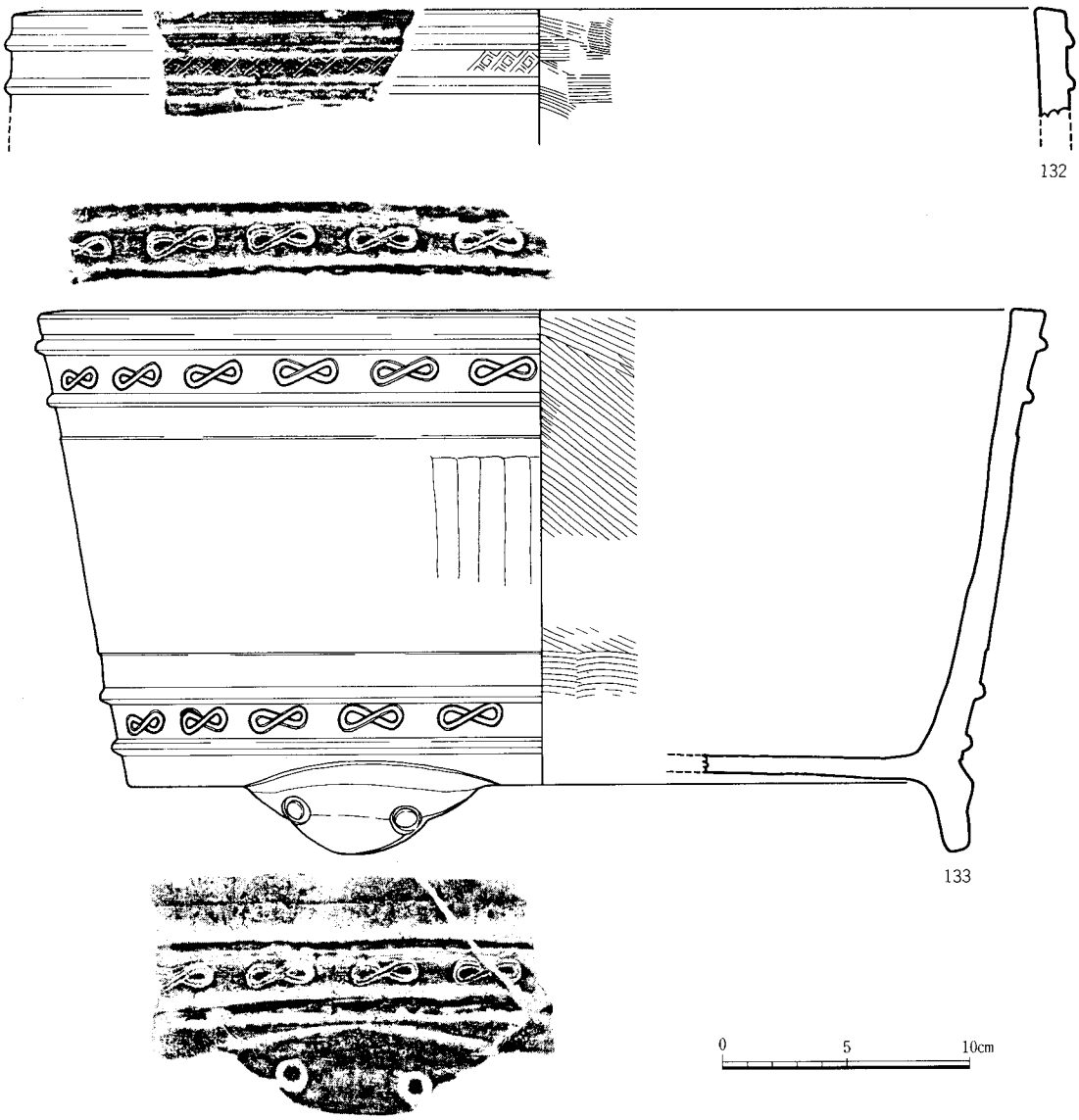


Fig.28　8号竪穴遺構出土遺物4（1/3）

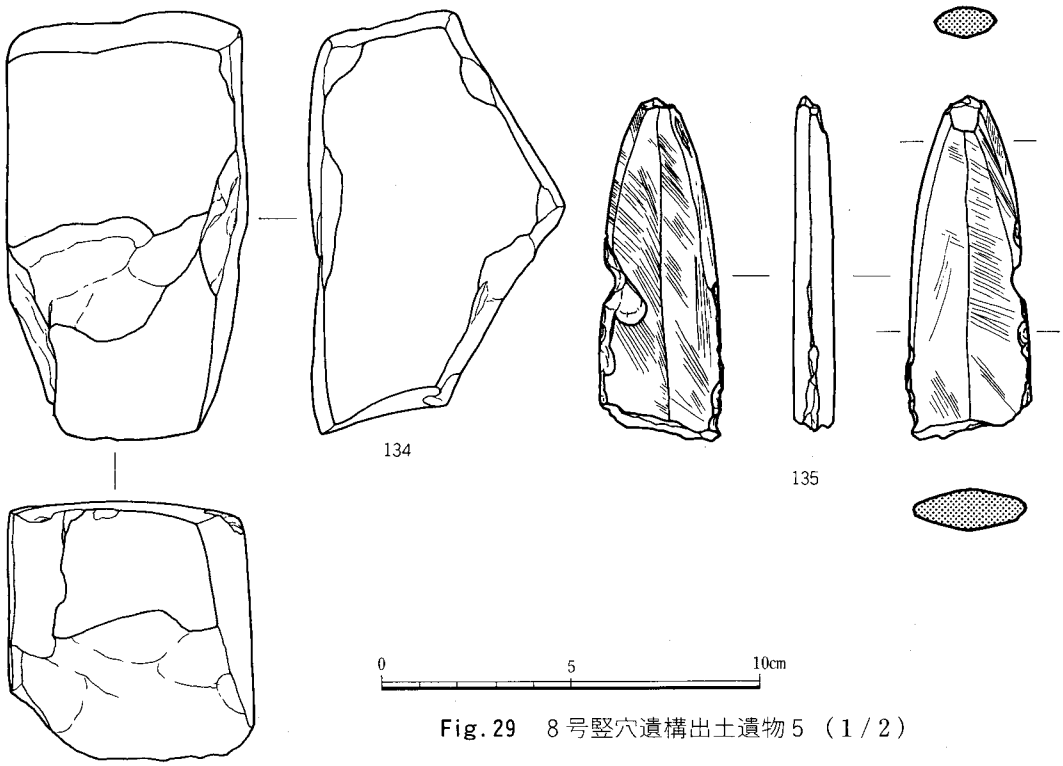


Fig. 29　8号竪穴遺構出土遺物5（1/2）

(3)　その他の遺構と遺物　Fig. 3

柱穴状ピット・不整形土坑・溝状遺構等がある。溝状遺構は、57年度調査のⅠ区で4列平行し、$N-55°-E$を示す。遺構からは、壁土の塊を出すものがある。P－1～8・11・12・16・17・22・29・31・32・36・40・42がこれにあたる。

出土遺物は、遺構内出土、遺構面出土、表採をまとめて述べ、実測図の遺物番号にその旨を併記した。Fig. 30～35, PL. 20～23

136～146は小皿である。**136**は、口径6.5cm、底径4.3cm、器高1.6cmで、体部が外反する。糸切り底で、外面をヨコナデする。**137**は、口径5.8cm、底径3.9cm、器高1.4cmで、内面をヨコナデする。**138・139**は、口径7～7.5cm、底径5.3～5.8cm、器高1.7～1.9cmで、回転糸切り、内外面をヨコナデする。**140・141**は、口径7.5～7.8cm、底径5.3～6.2cm、器高1～1.3cmで、浅い皿状である。回転糸切りで、内外面はナデ調整される。**142・143**は、口径8.5～8.8cm、底径6.3～7cm、器高1.4～1.6cmで、浅い皿状を呈すが、**140・141**に比して、大振りである。**144**は、口径7.2cm、底径5.6cm、器高1.4cmで、器壁が厚い。回転糸切り。内面ヨコナデ。**145**は、底径4.7cmで、体部は直行し、回転糸切り痕をよく残す。**146～157**は坏である。**146～148**は、口径11～11.2cm、底径6.8～7.5cm、器高2.4～2.6cm、回転糸切りでヨコナデ調整。口縁端部が

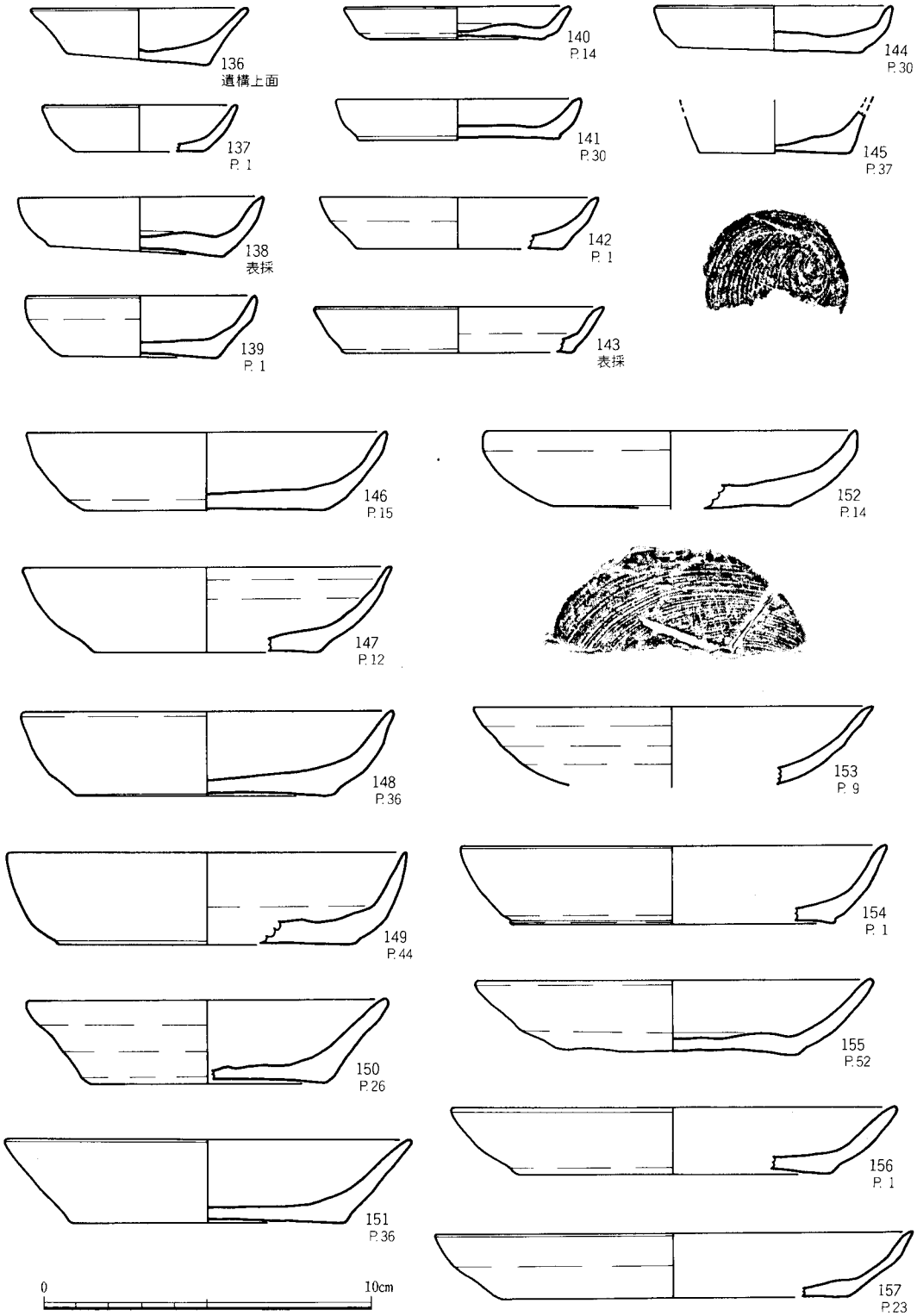


Fig. 30　その他の出土遺物１（１/２）

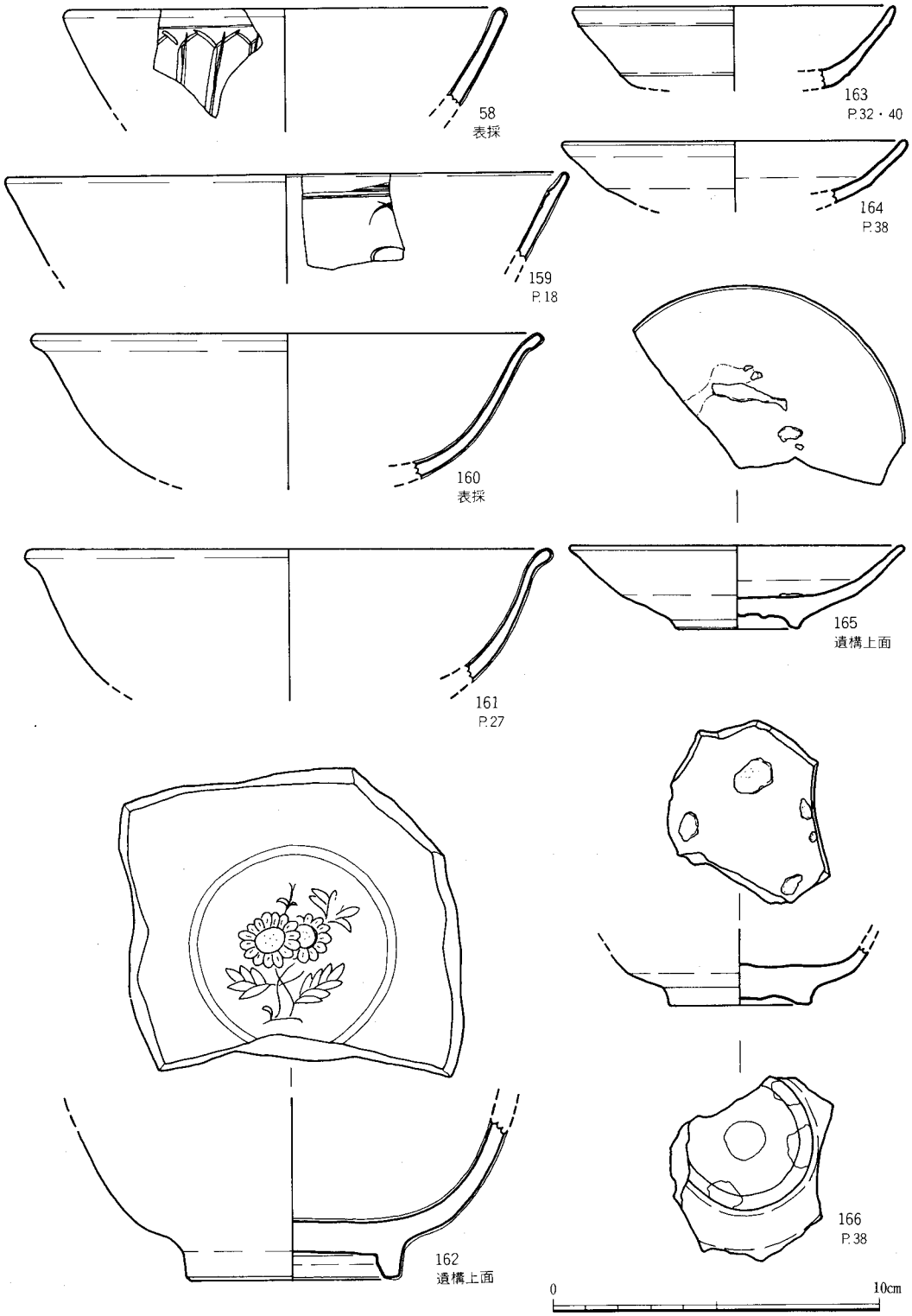


Fig. 31　その他の出土遺物２（１/２）

やや外反する。149は、口径12.2cm、底径９cm、器高2.9cm、糸切り底である。150・151は、口径11～12.2cm、底径7.1～8.2cm、器高2.6cmで、体部は直行する。回転糸切り。152は、口径11.4cm、底径7.4cm、器高2.4cm、体部が大きく外反し、口縁部で直立する。器壁は厚く、ヨコナデされ、回転糸切り。153は、口径12.2cm、体部は丸味を持つ。154～157は、皿状を呈す。口径12～14.4cm、底径７～10.5cm、器高２～2.4cmで、回転糸切り。特に157は、口径14.4cmに対し器高２cmと最も浅く、器壁も薄い。158～168は、青磁である。158は口径13cm、沈線で蓮弁文が描かれる。釉色は濃緑色である。159は口径17cm、内面に劃花文が窺われる。灰緑色の釉がかかる。160は口径15.4cm、161は15.8cmで、口縁部は外反する。160はくすんだ淡緑色、161は灰緑色の釉色を呈す。162は椀の底部で、見込みに菊花文が描かれる。緑色の釉が畳付まで厚く施されている。胎土は淡青灰色であるが、高台部分の露胎は茶色を呈す。163～166は、朝鮮の青磁である。163は口径9.7cmで、濃青灰色の釉を薄く施す。164は、口径10.4cmの皿である。165も皿で、口径10cm、底径3.6cm、器高2.6cmで、濃緑灰色の釉がかかる。見込みに、重ね焼きの目痕が残る。166は、底径4.3cmの椀の底部で、見込みと畳付きに重ね焼きの目痕が残る。釉色は青灰色を呈する。167は、底径７cmの椀である。見込みに劃花文が窺われる。淡

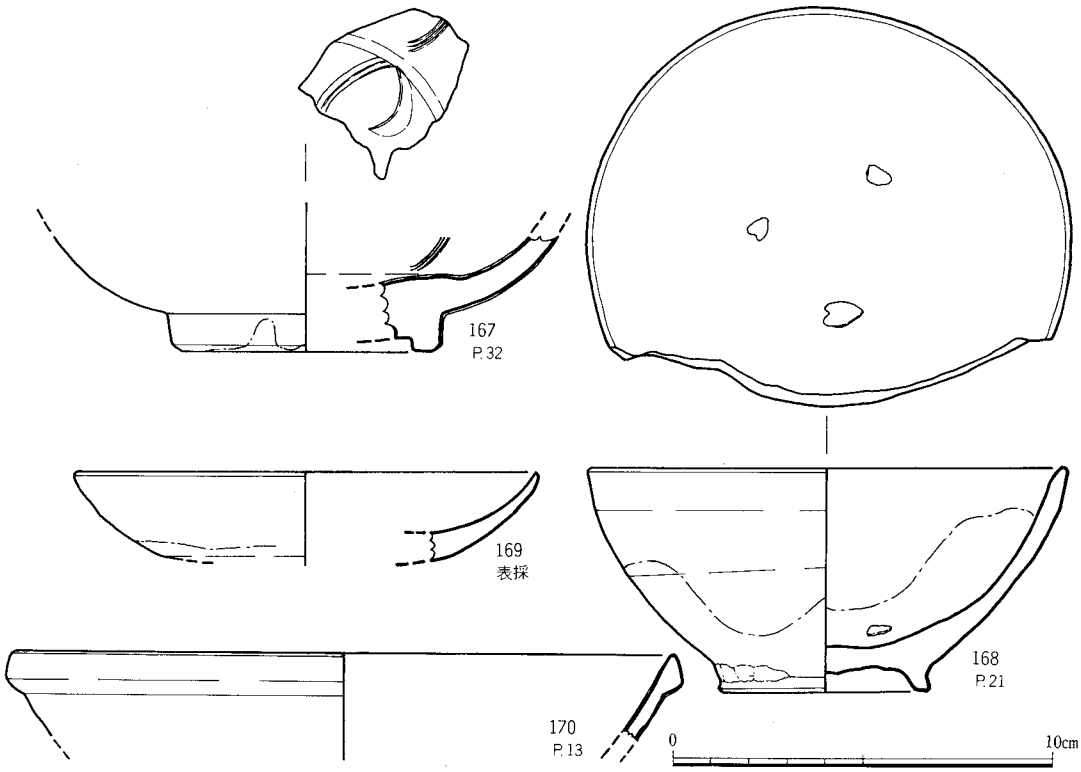


Fig.32　その他の出土遺物３（1/2）

緑色の釉が畳付外側までかかる。168は口径12.4cm、底径5.4cm、器高6cmの椀である。釉色は黄緑色であるが、発泡して発色が悪い。見込みに重ね焼きの目痕が残る。169は白磁皿で，口径12cm。体部下半は無釉になる。170は、玉縁の白磁椀で、口径17.3cmを測る。171～176は、土師器の土鍋である。口径23～28cm、器高は175で推定12cmを測る。171～173は、口縁部が大きく屈曲し、口唇をナデで平らに仕上げる。口唇直下で最も肥厚する。174・175は、口縁の屈曲が大きくなく、口縁内面の方が明瞭な曲線を描く。口唇部は、丸味を持つ。176は、口縁の屈曲が小さく、口唇は外側に倒れて、やや平坦に仕上げる。177は、土師器の口縁部で、24.5cmを測る。口唇部直下に小さな突帯をつける。178～180

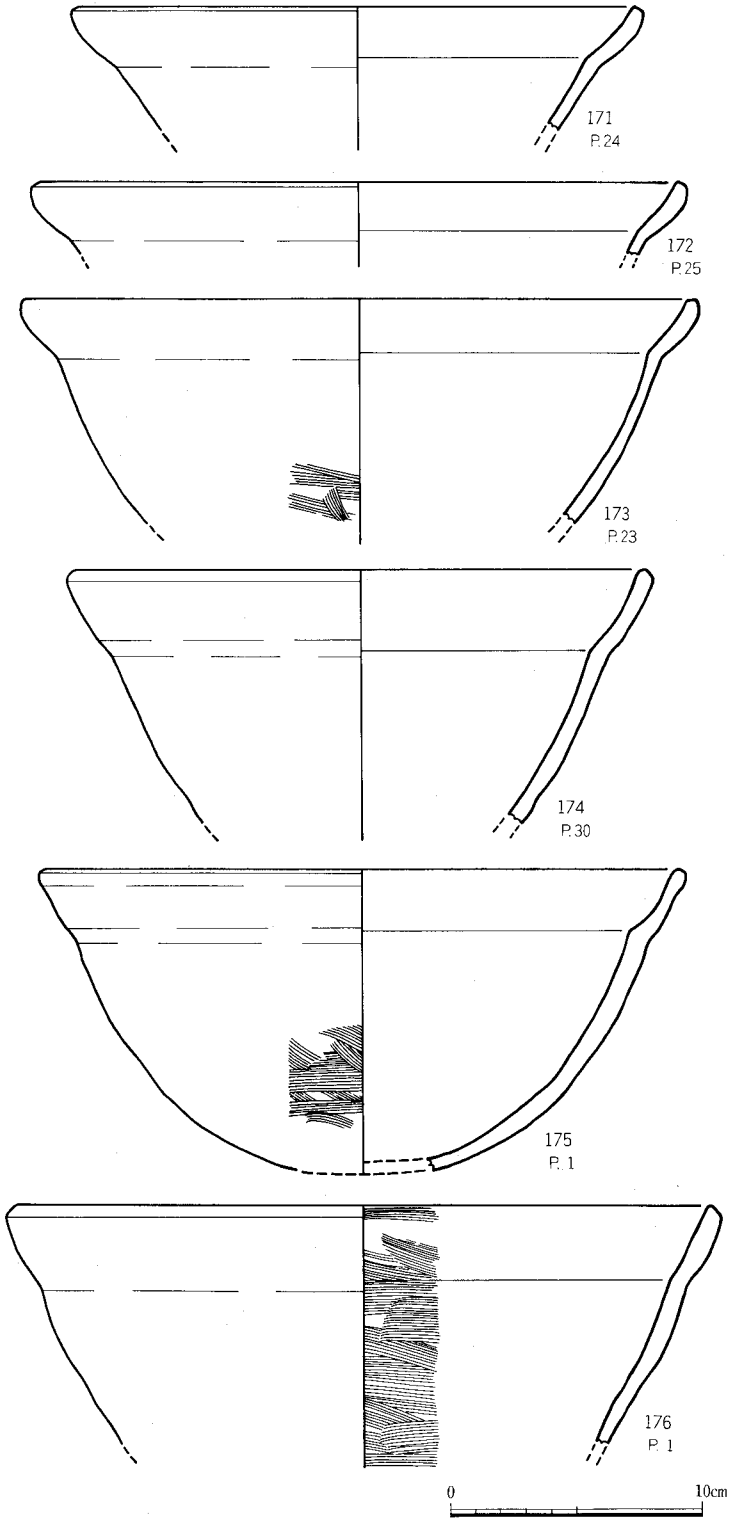


Fig. 33　その他の出土遺物４（１/４）

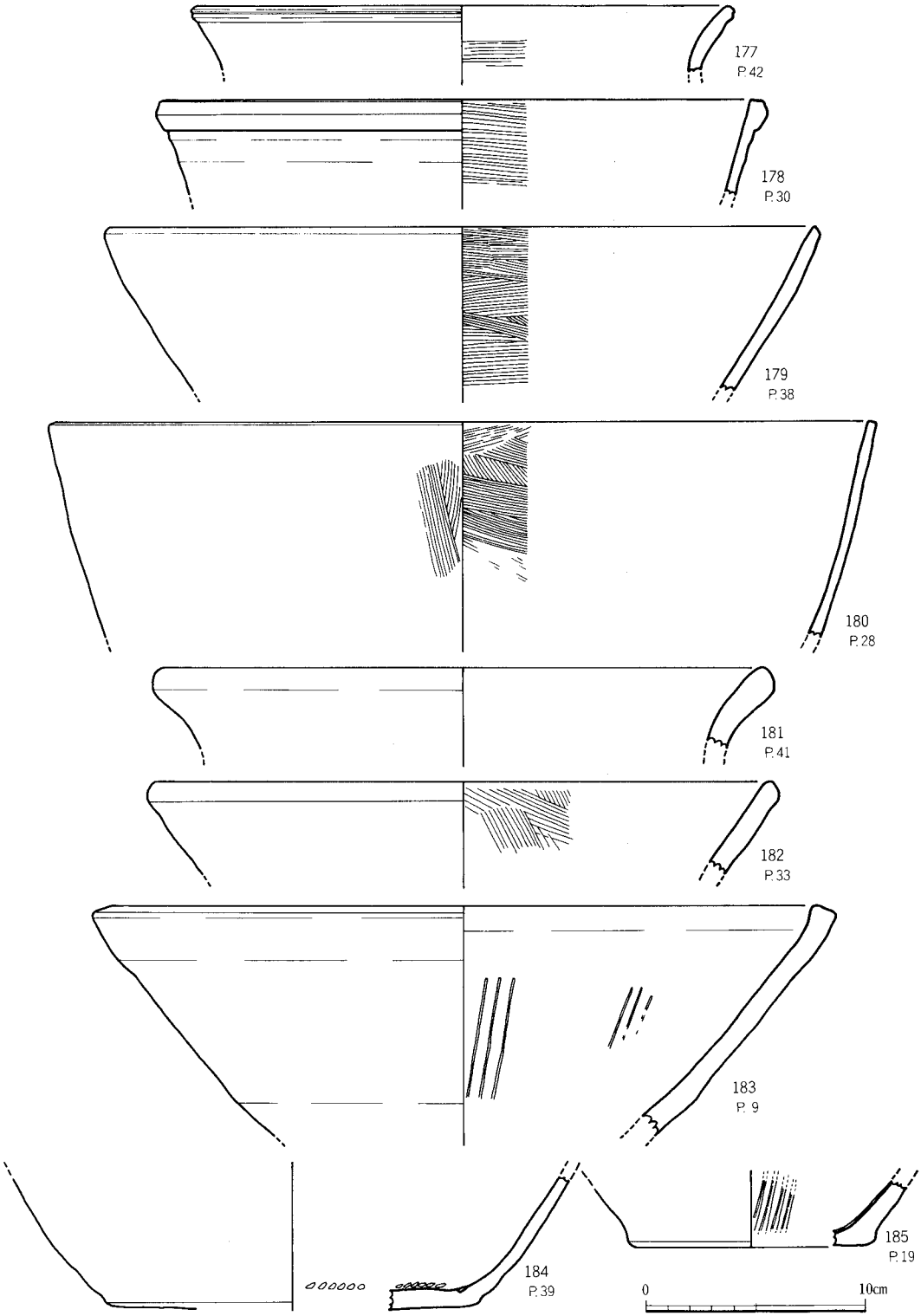


Fig. 34　その他の出土遺物５（１/３）

は、土師器の鍋である。178は、径26.6cmで、断面三角の突帯を直行する口縁端部に貼付する。外面には、ススが付着する。179・180は、直行する体部・口縁部を持つ。179は、径32.4cmで、口唇端部は摘み上げた様に尖る。180は、径37.2cmで、口唇部を平らにつくる。ともに、ススが付着している。181は、土師質土器の口縁部で、径27.6cmを測る。淡褐色で、胎土は砂粒を多く含んで粗い。182は、瓦質土器の鉢である。径28.5cmで、外面暗灰色、内面灰色を呈す。口唇部は、ナデで丸く仕上げる。183は、土師質土器の摺鉢である。径32cmで、内面に3条単位の沈線を刻む。184は、土師器の底部で、底径17cmである。内底部に、板の小口による刺突が6本単位で並ぶ。185は、土師質土器の摺鉢で、底径10.6cm。4条以上を単位とした沈線を刻む。186は、土師器の口縁で、径13cmを測る。187は、土師器の羽釜の口縁で、径13cm、四ツ目結のスタンプが施されている。188は、土師器の甑の把手で、焼成が悪いためかなり磨滅している。189は、須恵器の把手である。端部を欠く。190は、須恵器の甕の破片である。内側には、同心円文のタタキ、外側には、平行タタキが施される。その他、ピット51の埋土上面から、銅銭2枚が出土した。PL.9－(1)、1枚は天禧(カ)通寶、もう1枚は□(欠)□(欠)元寶と判読できる。

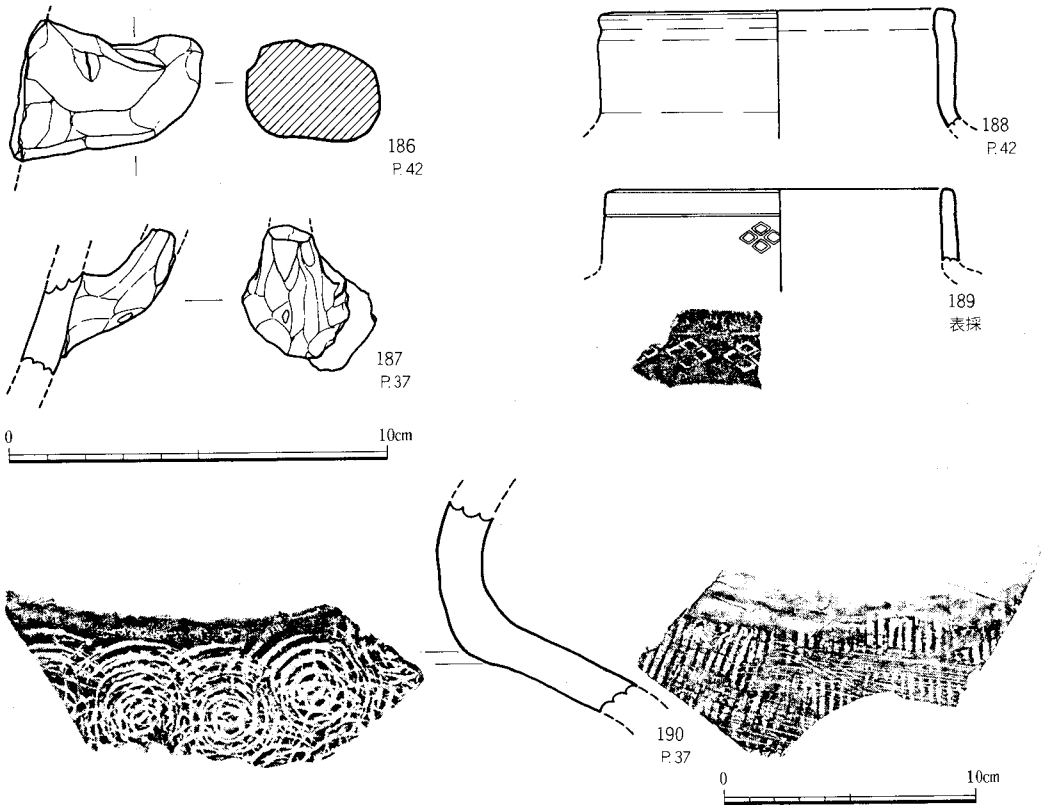


Fig.35　その他の出土遺物（1/2・1/3）

(4)　掘立柱建物

掘立柱建物については、調査時に充分な検討ができず、整理作業時に図面上で操作した。発掘調査では、柱穴状ピットが多数検出され、また検出・実測後さらに地山面を深さ10cm程度下げて、遺構の有無を確認したため、発掘調査区域内の遺構にはほとんど掘り残しはないと思われる。したがって、本来はすべての柱穴状ピットが何らかの形で建築物遺構を形成している筈であるが、残念ながら検討しえたのは22棟にすぎない。内、1間×1間が18棟あるが、建築物として扱うには、やや疑問が残るため、Fig. 3　遺構全体図に記すにとどめる。なお、遺物は前項「その他の遺構と遺物」で述べているので、ここではその遺物番号をあげておく。

1号掘立柱建物

Fig. 36

1間×2間。長軸方位は$N-63°-E$である。[註1] 土師器の小片が柱穴2・3・6・7から出土している。

2号掘立柱建物

Fig. 37

1間×2間。長軸方位を$N-60°-E$にとる。柱穴1・6からそれぞれ土師器片1片が出土。

3号掘立柱建物

Fig. 38

1間×2間の母屋に、幅半間程度の東庇が付いた様な平面を示す。母屋中程の柱は、やや北に偏している。長軸方位は$N-23°-E$を示す。出土遺物はなかった。

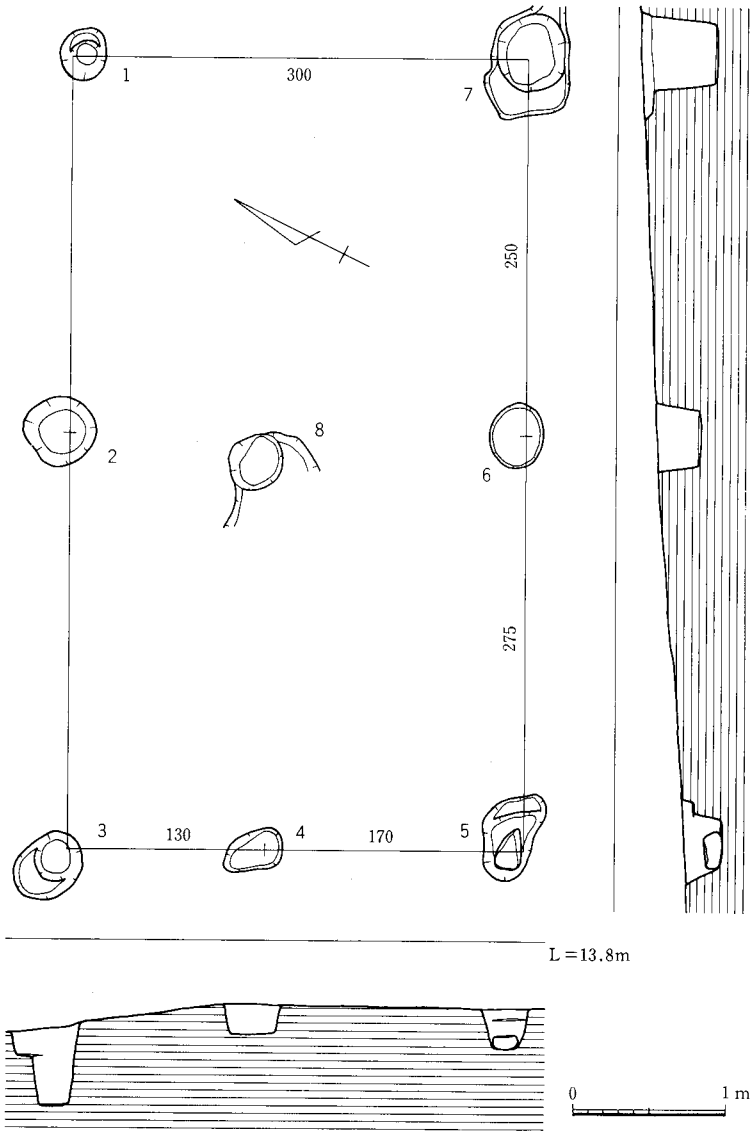


Fig. 36　1号掘立柱建物実測図（1/50）

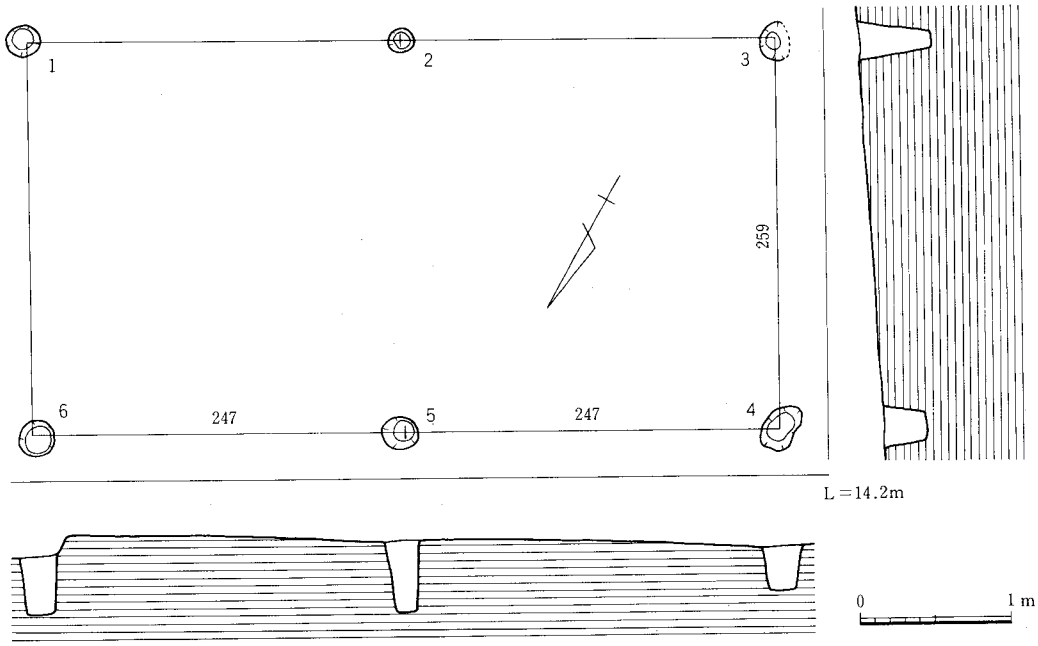


Fig. 37　2 号掘立柱建物実測図（1 /50）

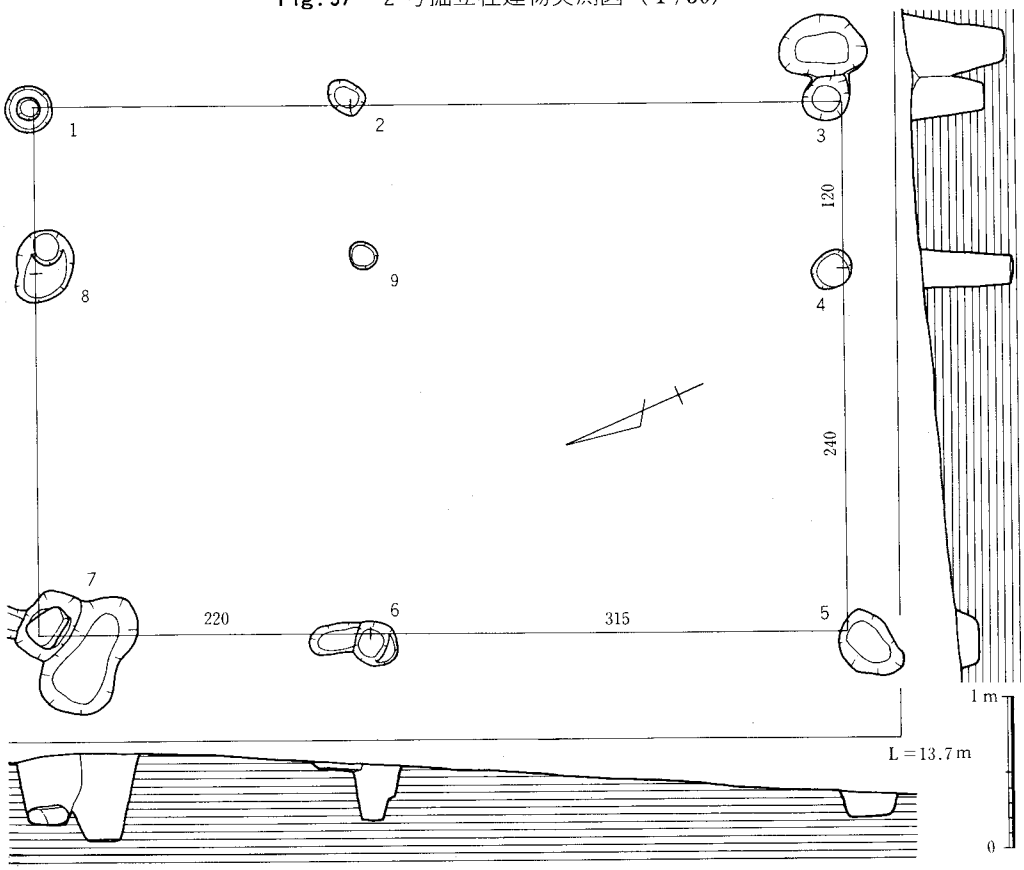


Fig. 38　3 号掘立柱建物実測図（1 /50）

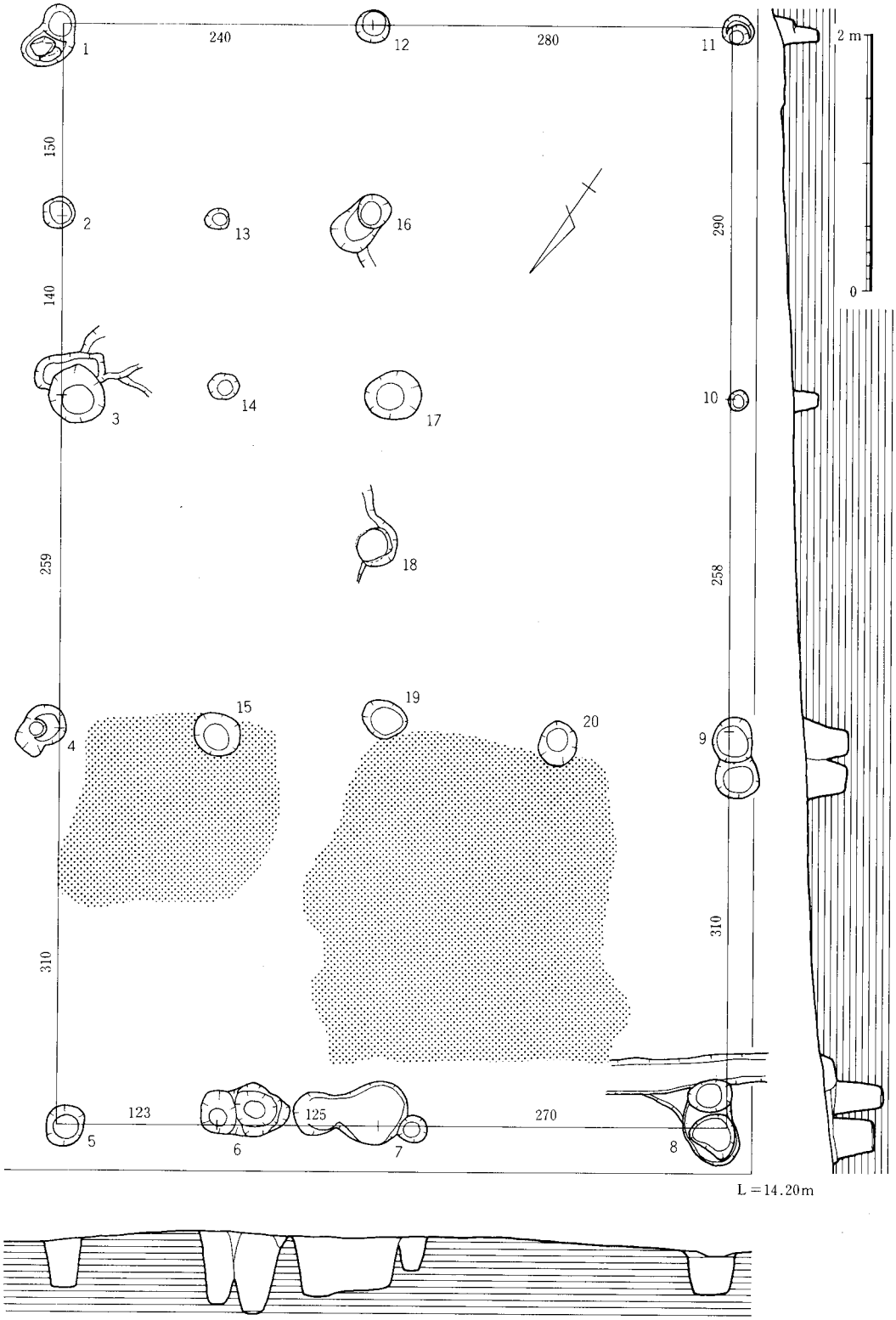


Fig. 39　4号掘立柱建物実測図（1/50）

4号掘立柱建物　Fig. 39

2間×3間である。長軸の方位は、$N-33°-W$をさしている。柱筋を考慮して柱穴をみると、建物内部で間取りに関連すると思われる柱穴を拾うことができる。また、建物内の北西部分には、かたくしまった粘土床が2ヶ所みられる。この部分は、建物北西側の柱穴4～9・20・19・15でかこまれた2間×1間の範囲内にちょうどおさまる。土間に相当すると考えられる。土間の南東の2間×2間の部分は、長軸方向にほぼ中央の柱穴12・16～19を結ぶ筋で二分される。土間から向って右手は、奥に長い一室であると思われる。左手は、手前から奥へ二室あるいは三室にわかれている。

遺物は、柱穴1・7・8・12・18・19から出土している。柱穴1からは、土師器小皿**141**・**145**（Fig. 30）、土師器土鍋**174**（Fig. 33）が、柱穴19からは、青磁椀片**159**（Fig. 31）が出土した。この4点以外は、いずれも小片であるが、土師器坏片、鍋片、青磁椀片が採集された。

註1、桁・梁という用語は、本来屋根の架構方向にかかわっている。遺構平面からは、家屋の上部構造までは、明確には窺えない。したがって、ここでは桁・梁という用語はあえて使わないことにする。

(5)　4号掘立柱建物の間取りについて

4号掘立柱建物では、土間と3～4室の間取りが推定できた。そこで、古民家の例を参考に考えてみる。古井千年家は16世紀、清宮家は17世紀と推定されている。現在窺い知れる民家の中で下古賀遺跡の時期に最も近い例である。寝室である納戸は、一番奥まった小部屋である。また、桁方向に長い1室があり床面積の半分以上をしめている。この部屋は、古井家では、「おもて」とよばれ、座敷のかわりにも使われたらしく、「ちゃのま」にはいろりが切られ、日常生活の中心であったと思われる。これを参考にすると、4号掘立柱建物は、長軸方向の棟を持ち、東隅の小室は納戸にあたり、1間×2間の1室は「おもて」に相当するものと推定できる。

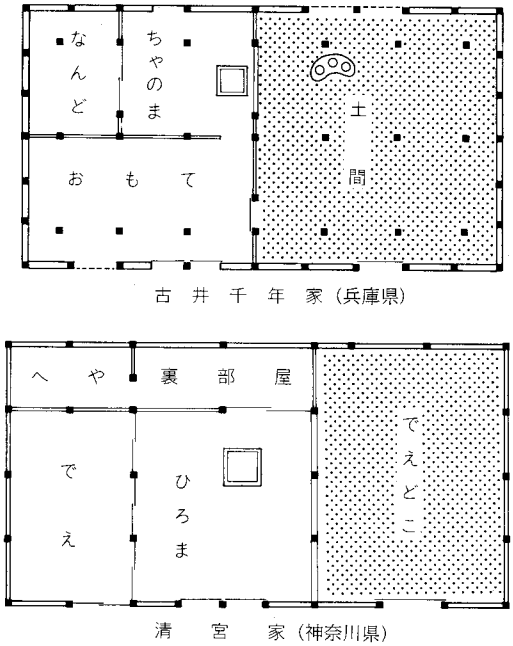


Fig. 40　古民家の模式平面図

平井聖「図説 日本住宅の歴史」より作成

第三章　小　　結

以上、2度にわたる発掘調査の結果について述べてきたが、年代は中世の後半、15～16世紀にあてることができる。遺構の切り合いは少なからず見られたが、層位と結びつかず、遺構の時期区分はできなかった。最後に、若干の問題点について触れておく。

溝状遺構について　第二章2(3)で記した様に、昭和57年度発掘調査のⅠ区から、4列の平行する溝状遺構と、これに直交する小溝状遺構が検出された。Fig. 3のP－16・22・45～50がこれにあたる。雨落ち溝状であり、平行する4列は、$N-55°-E$をさす。一方、遺跡前面を通る道路は、板付の集落と麦野の集落とを結んで、台地上を縦貫する道路で、古くから存在したと思われる。この道路は、$N-32°-W$をさし、溝状遺構に直交する方位$N-35°-W$と近似する。この点から、道路から間をおいて道路に向いた建物があったという可能性を考えることができる。この場合、4列の溝が、棟割りを示すのか、家割りを示すのか、なお問題の残るところである。

掘立柱建物について　第二章2(4)で考えた掘立柱建物は、いずれも柱間が2.5～3mを測る。これは、古民家の例と比べて、広いと言える。例に掲げた古井千年家でも、柱間は桁行6.6尺（1.99m)、梁行7尺（2.12m）である。下古賀遺跡においては、柱穴状ピットの掘り残しはないと思われるので、もし柱に見おとしがあるとすれば、柱筋からはずれているのか、あるいは掘立柱ではないのか（例えば礎板）のいずれかであろう。どちらにしても、検討の余地があると言える。

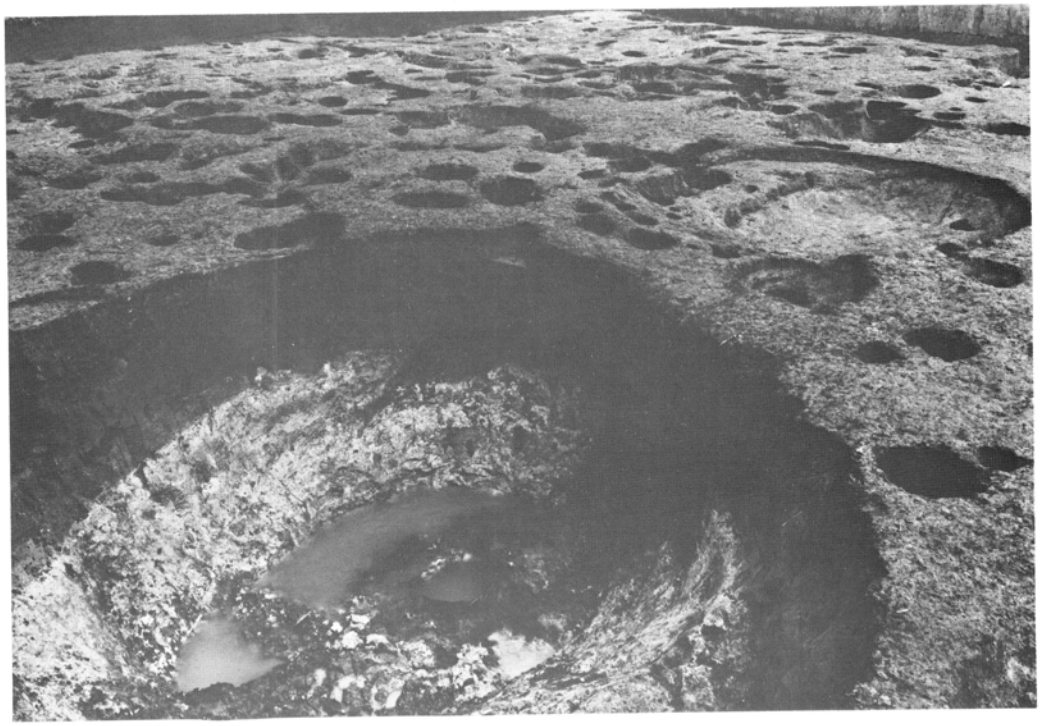
おわりに　文化課の事前審査の一つとして、公共事業に伴う開発行為については、前年度より担当局、課に照会文書を提出し、その事業に支障がないよう翌年度の発掘調査の計画を立てています。今回の板付公民館新築工事については、この方法が生かされず、いわば社会教育課の割り込み的な発掘調査となりました。当該地が福岡空港の防音工事指定地内でその補助金も絡み年度内完成は不可欠でしたが、単に補助金との関係ばかりではなく、教育施設という公民館の性格からも完成延期は大きな社会的問題で、両課とも真剣に協議を続けました。しかし文化課にはこれに速応できる体制はなく、それまで席田遺跡群赤穂ノ浦遺跡を担当していた力武、大庭は発掘調査を急きょ中断し、充分な準備期間がないまま麦野下古賀遺跡に移動することになりました。このような経過で発掘調査を着手しましたので、当初の目的が達成できたかは疑問とせざるをえません。本来、発掘調査の成果を活用実践すべき文化課、社会教育課、さらにその地域に即して活動している公民館にとって遺跡＝埋蔵文化財を軽視する結果を招いたことは大いに反省すべきことであり、二度と繰り返してはいけないことです。（力武、大庭）

図　版

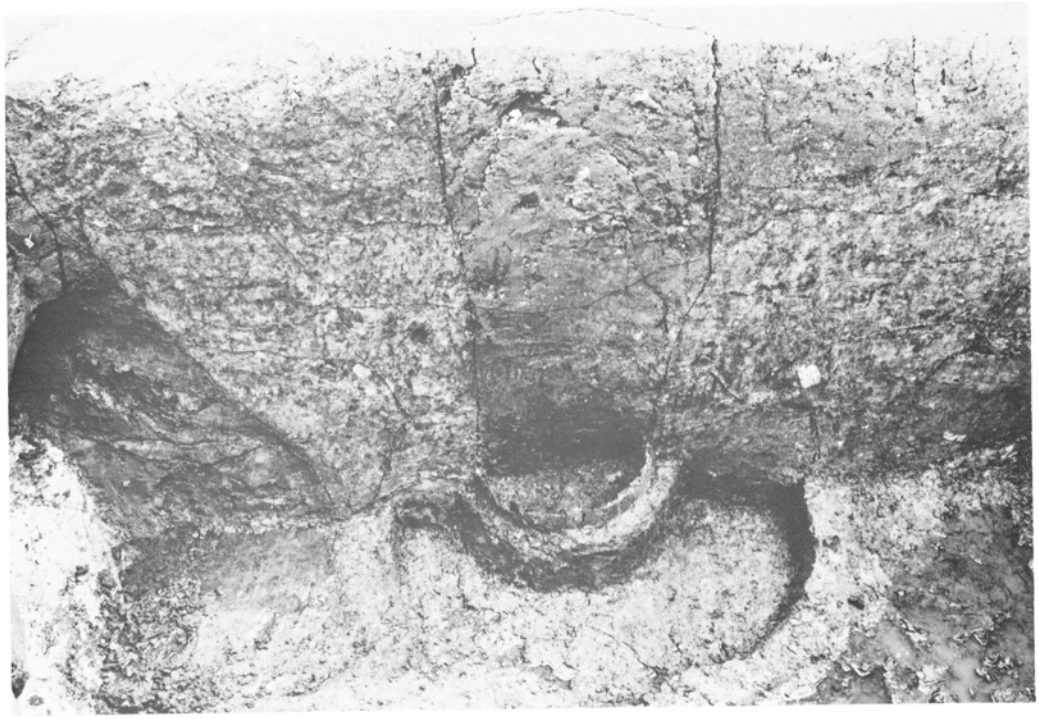
PLATES

(1)　昭和57年度発掘調査検出遺構（南より）

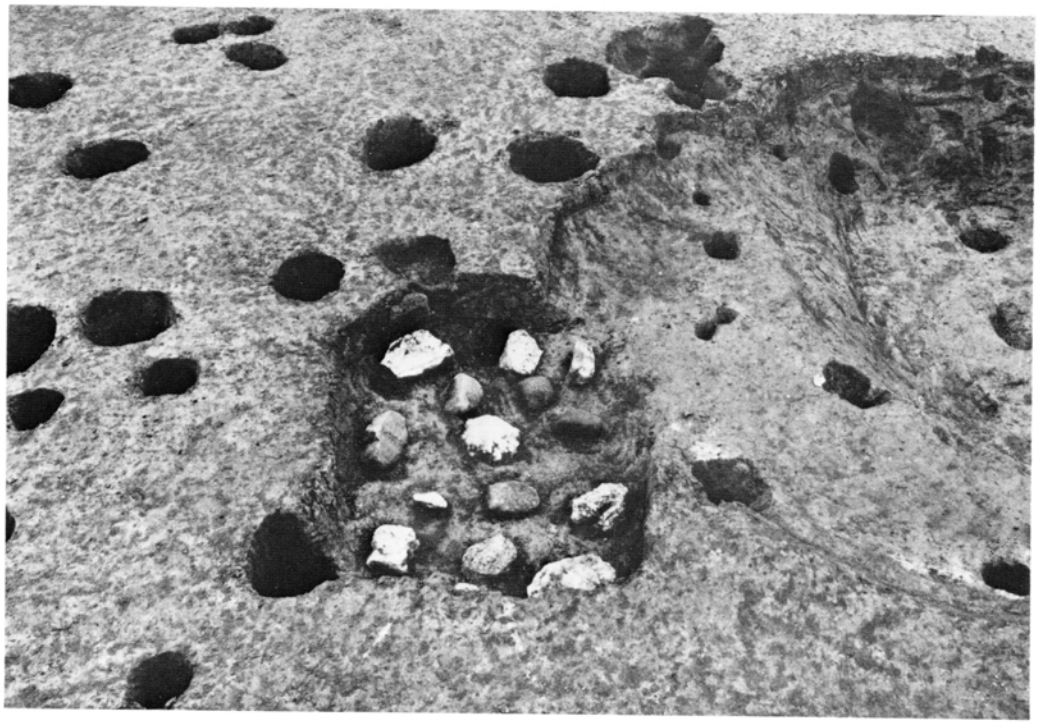
(2)　昭和57年度発掘調査検出遺構（南東より）



(1)　1号井戸（東より）

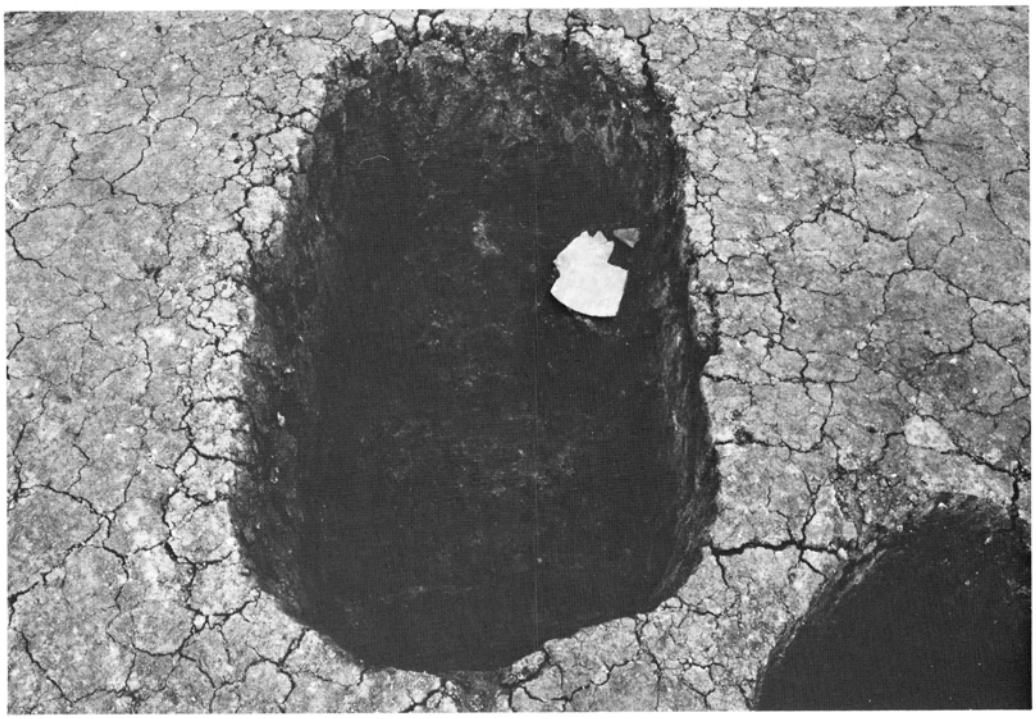


(2)　1号井戸土層断面（西南より）

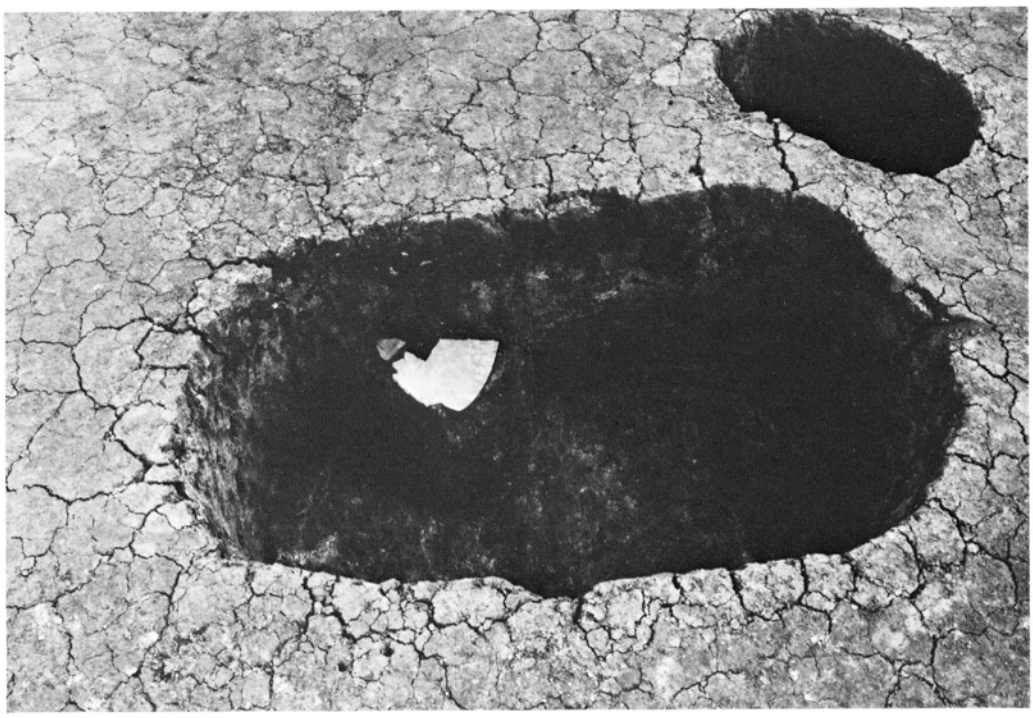


(1)　1号竪穴遺構（北西より）

(2)　1号竪穴遺構（東より）



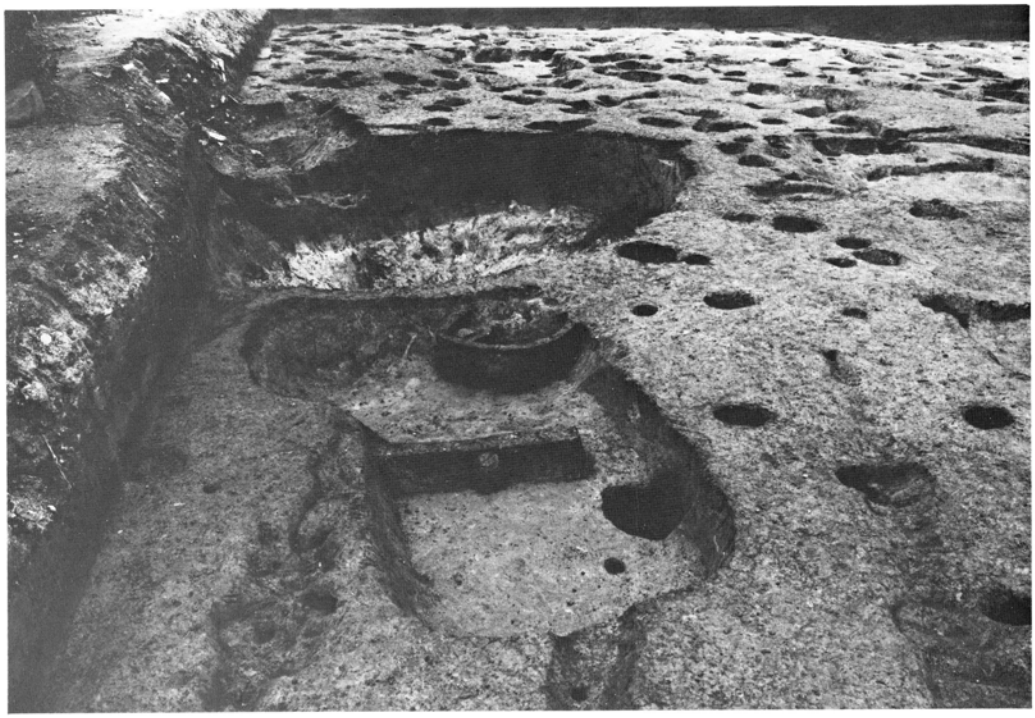
(1)　2号竪穴遺構（南西より）



(2)　2号竪穴遺構（北より）

(1)　4号竪穴遺構（北西より）

(2)　4号竪穴遺構土層断面

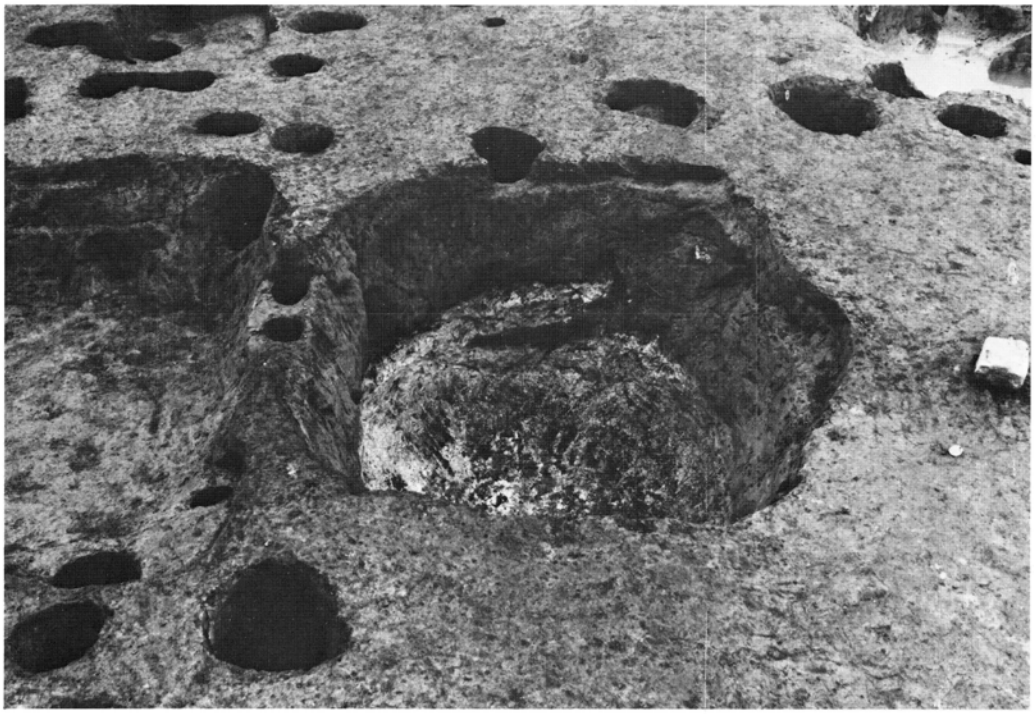


(1)　5号・6号竪穴遺構（北より）　手前が6号竪穴遺構

(2)　6号竪穴遺構、遺物出土状況（北より）

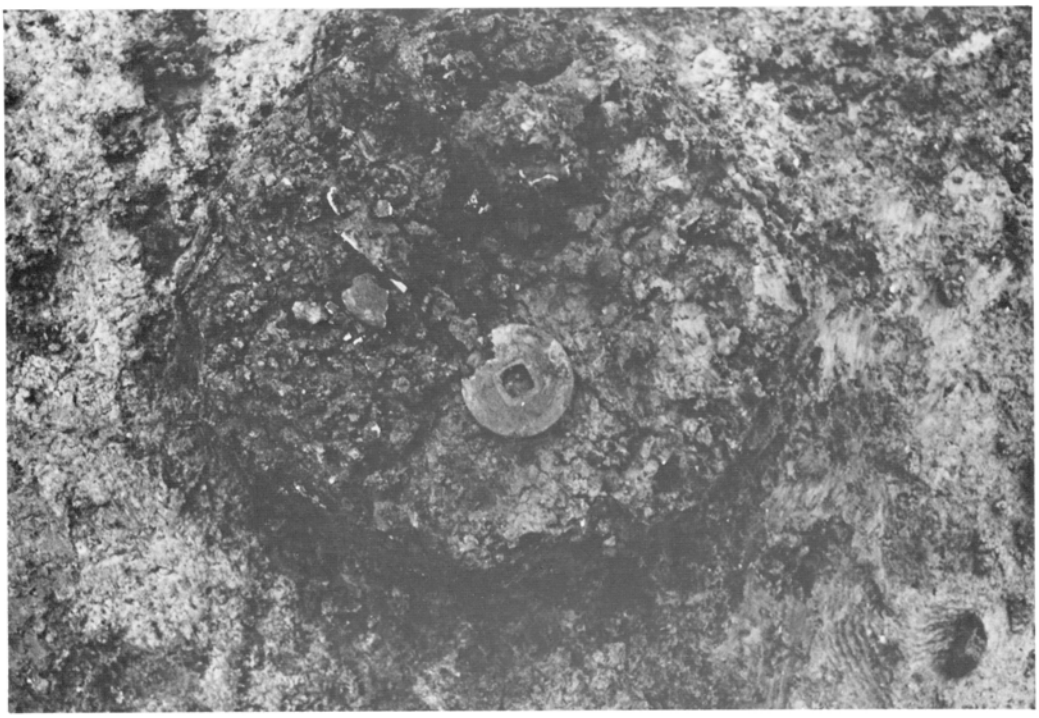
(1)　7号・8号竪穴遺構（北東より）　手前が7号竪穴遺構

(2)　7号竪穴遺構（北より）



(1)　8号竪穴遺構（北より）

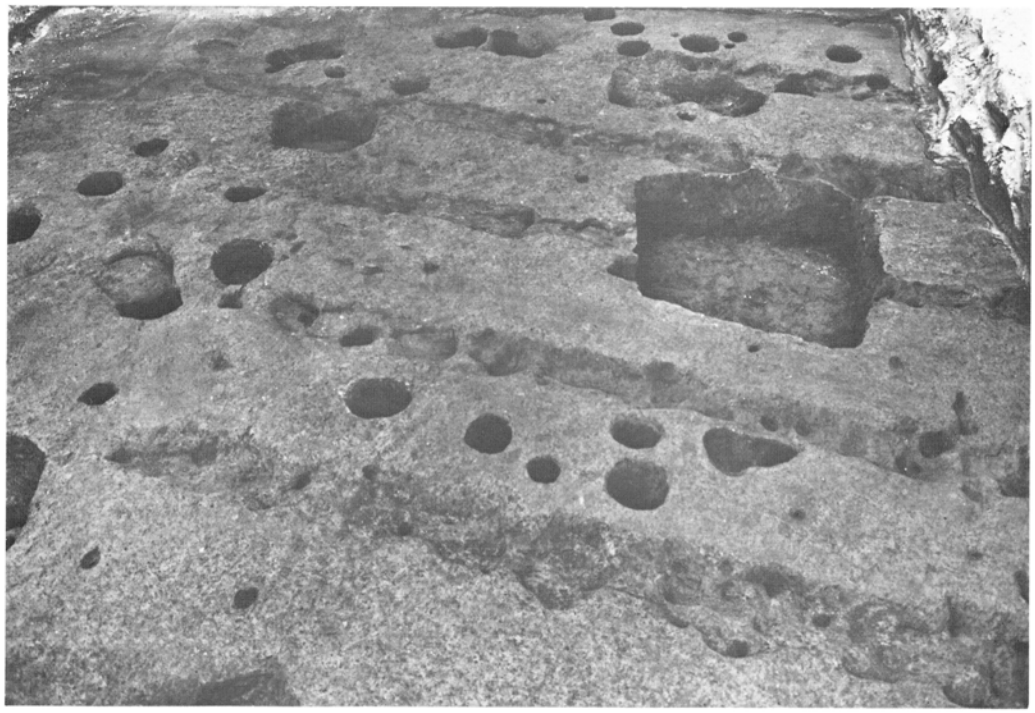
(2)　P. 21、青磁椀168出土状況（北より）



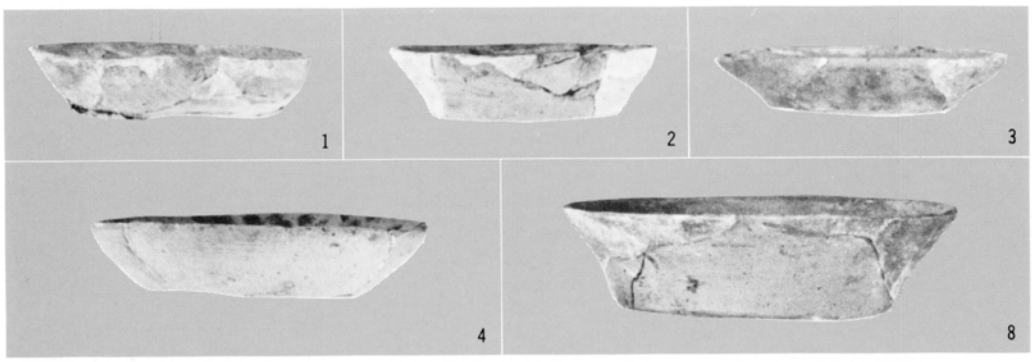
(1)　P. 51、銅銭出土状況

(2)　昭和58年度発掘調査北区検出遺構（南西より）

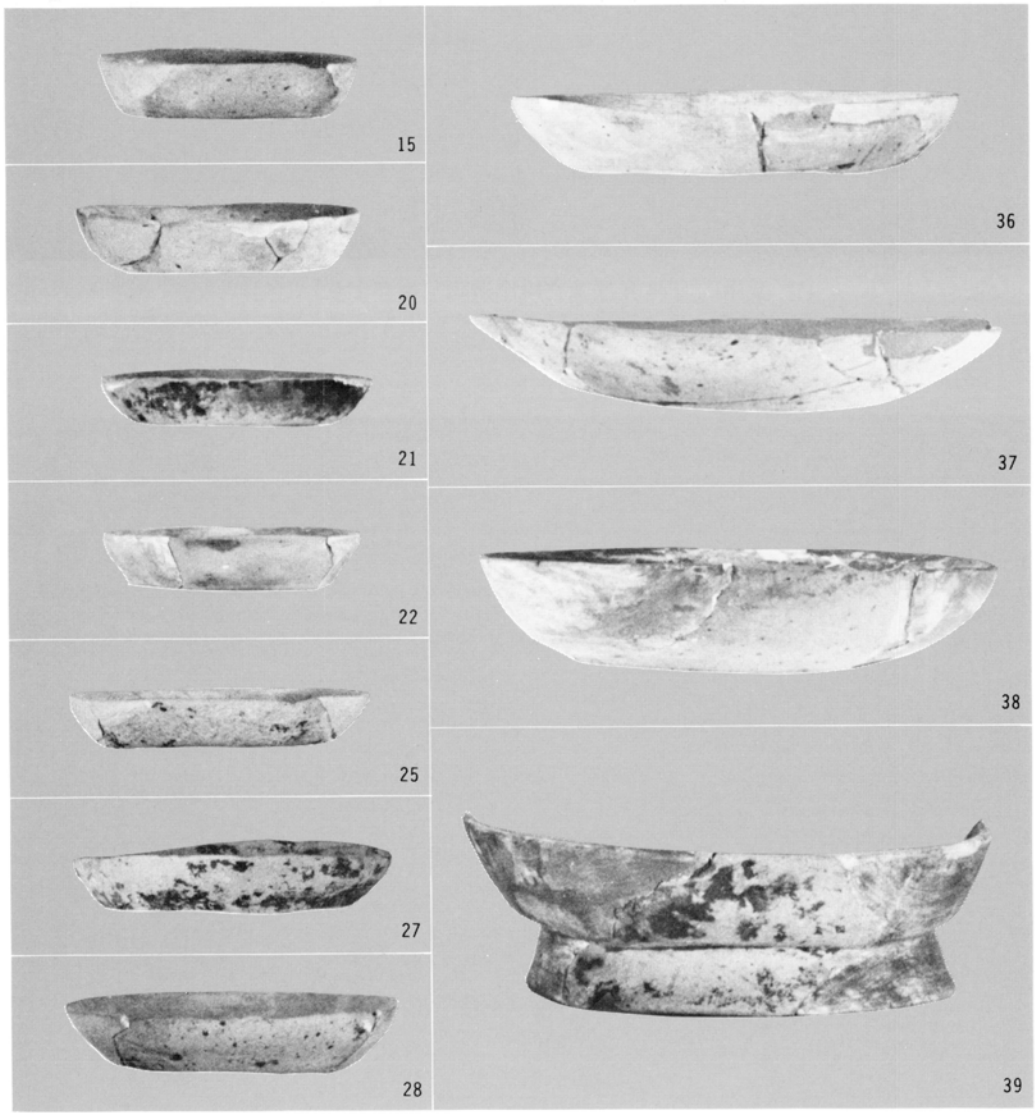
(1) 昭和58年度発掘調査検出遺構（南西より）



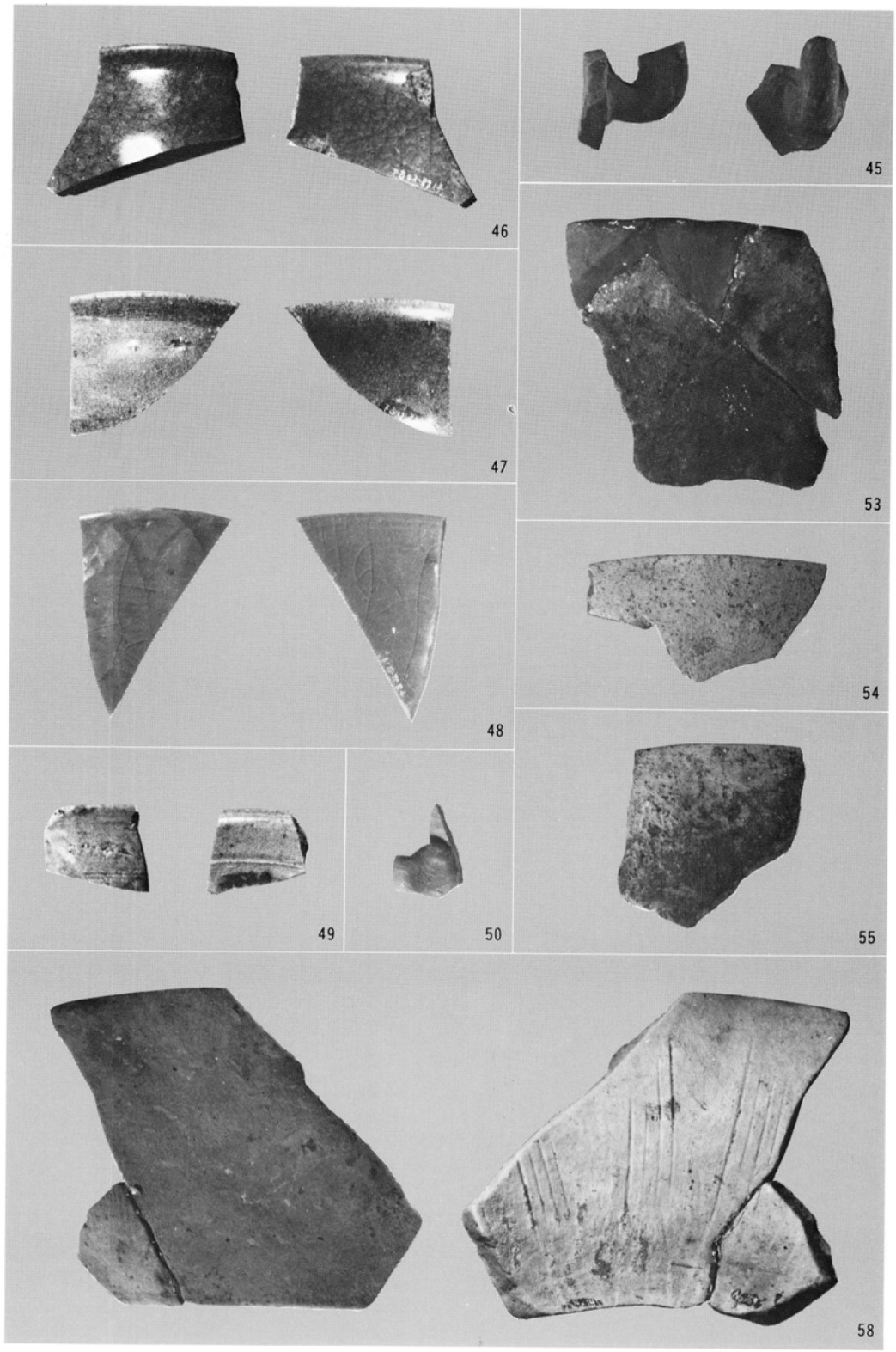
(2) 昭和58年度発掘調査検出遺構（南東より）



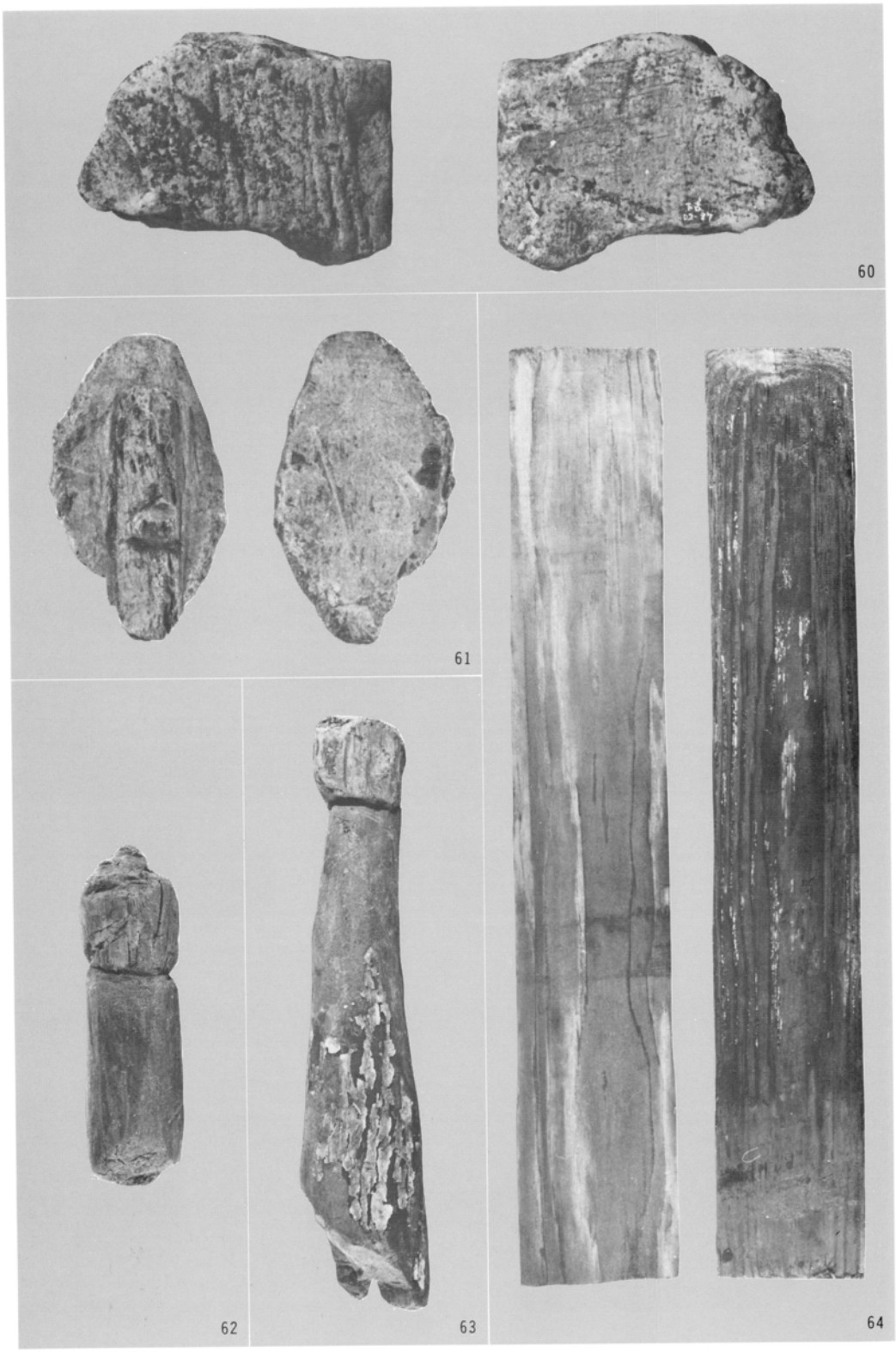
(1)　１号井戸井戸側内出土遺物（１/２）



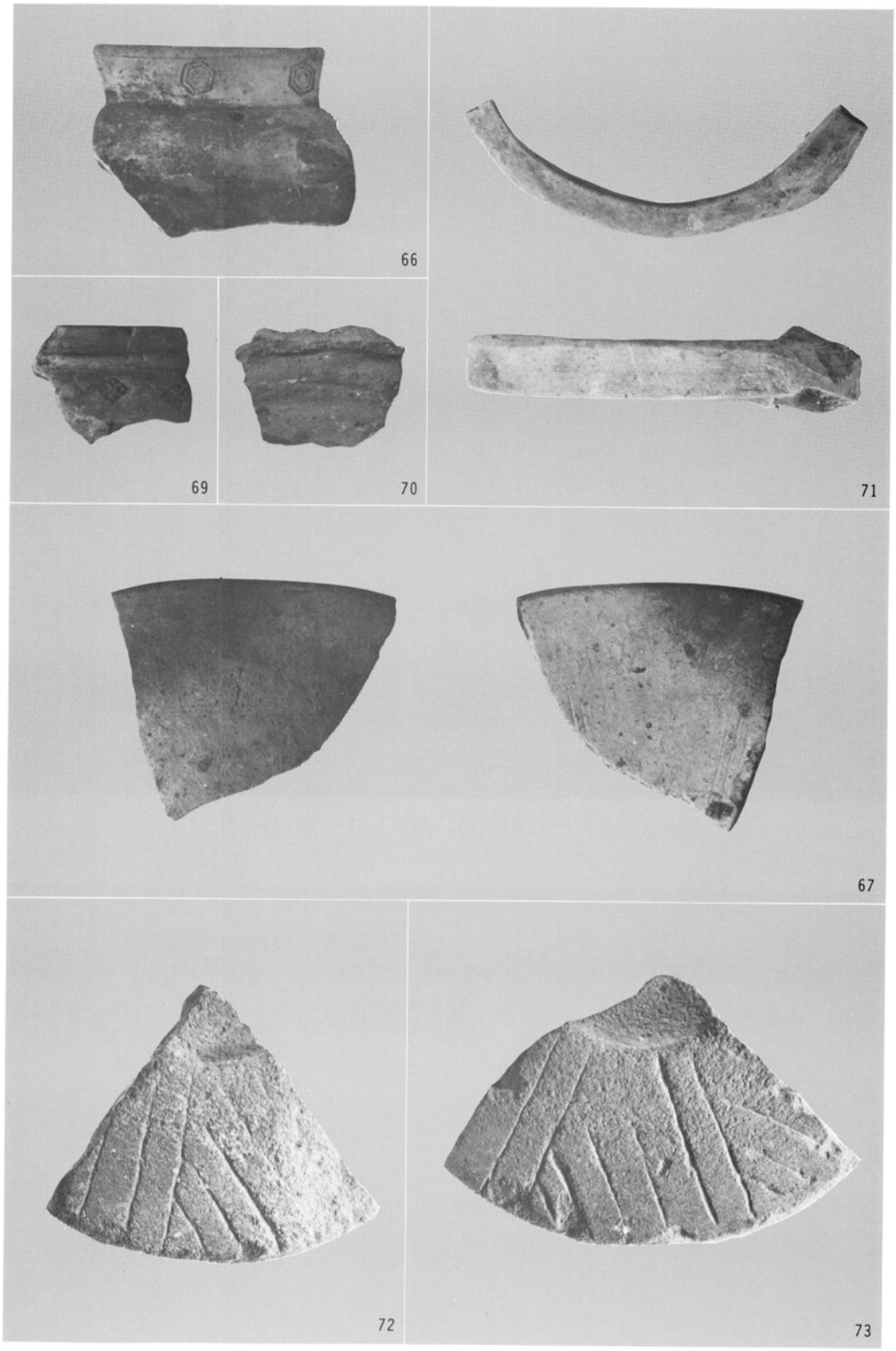
(2)　１号井戸出土遺物１（１/２）



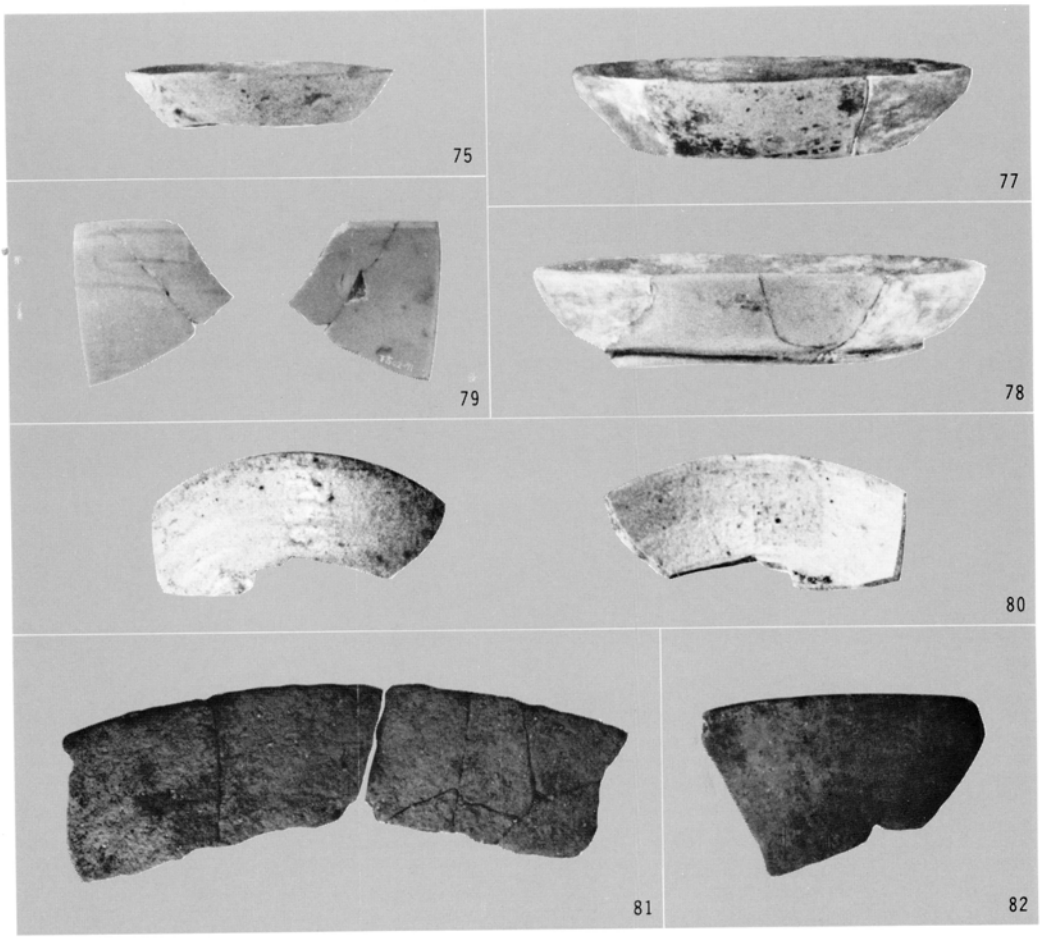
1号井戸出土遺物2 （45～50…1/2、53～58…1/3）



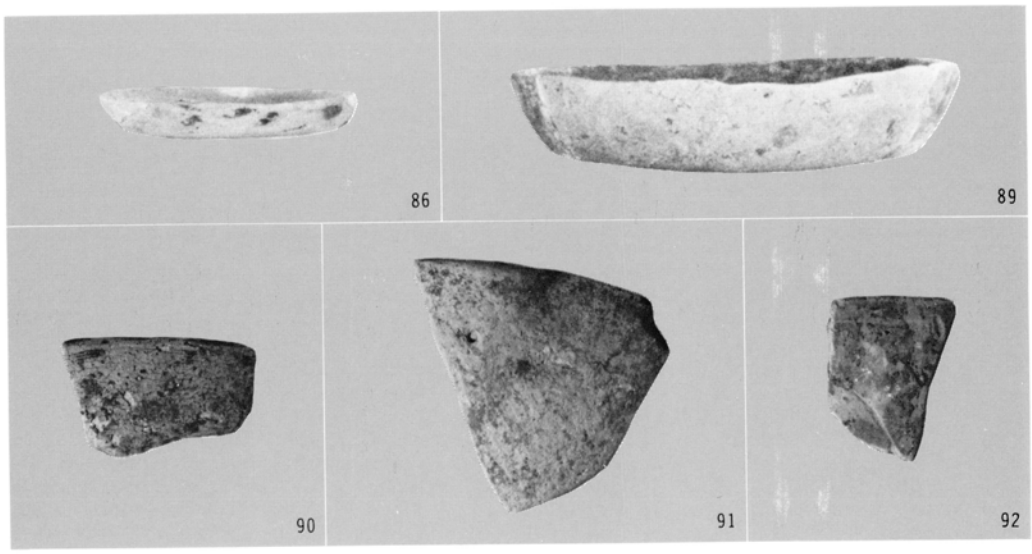
1号井戸出土遺物3（60～63…1/2、64…1/3）



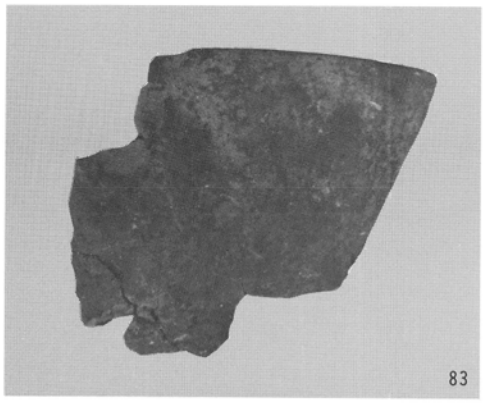
2号井戸出土遺物（1/3）



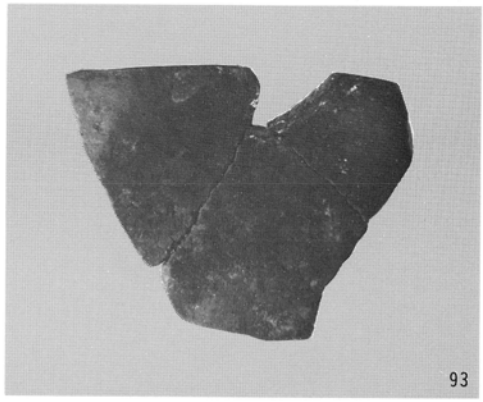
(1)　3号井戸出土遺物（75～80…1/2、81・82…1/3）



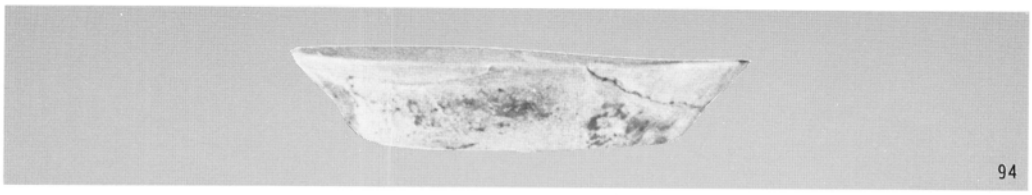
(2)　3号竪穴遺構出土遺物（86・89…1/2、90～92…1/3）



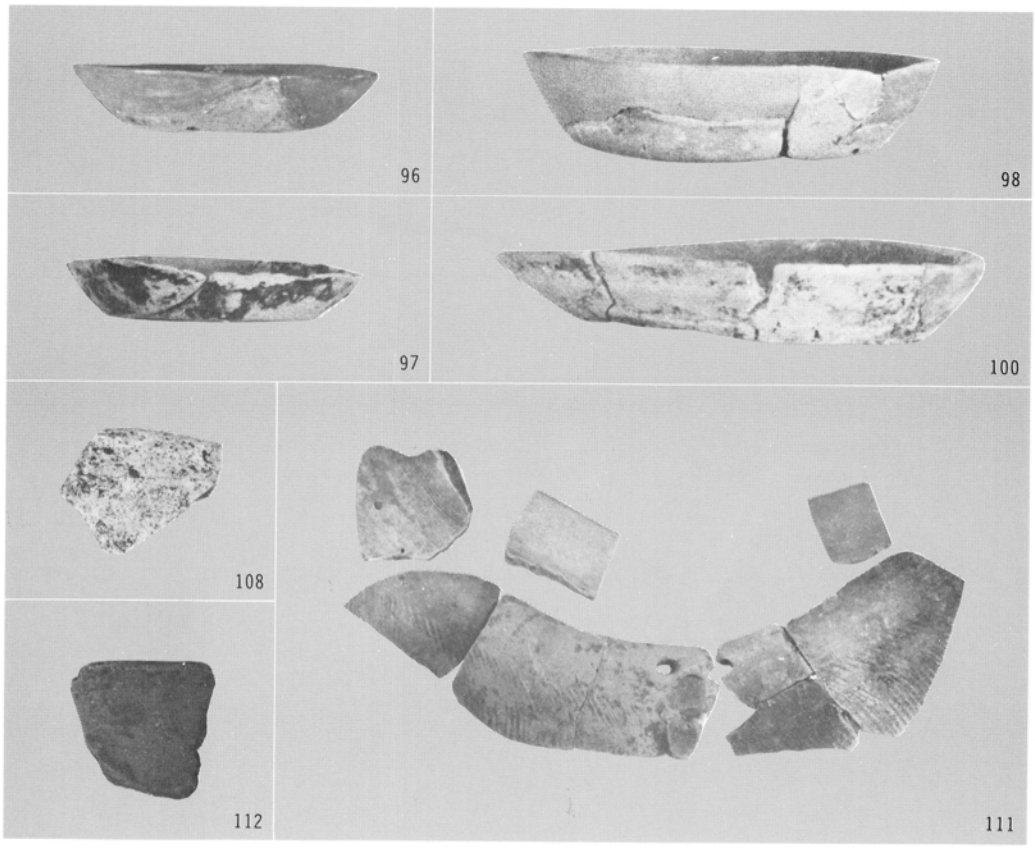
(1)　2号竪穴遺構出土遺物（1/3）



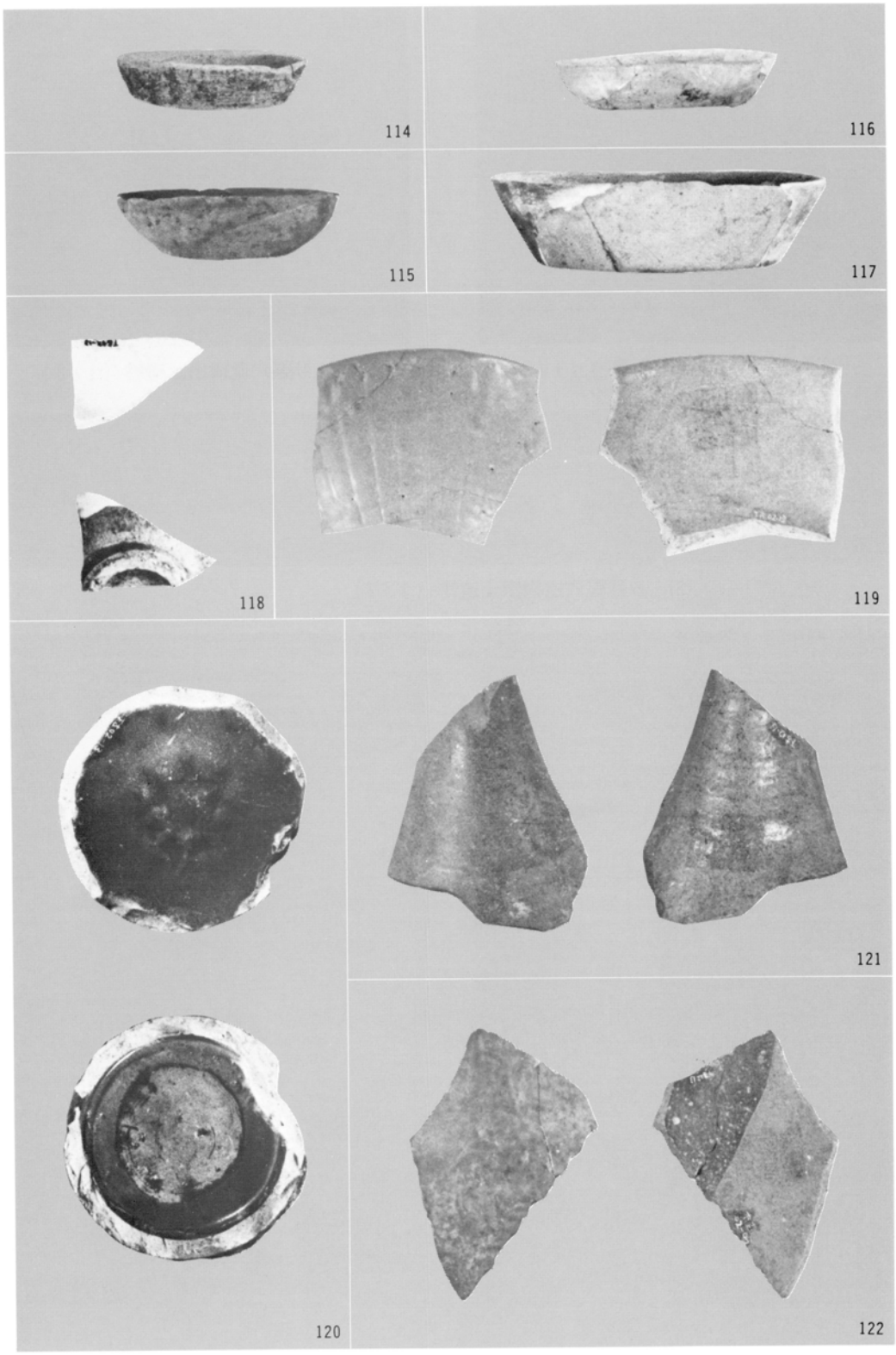
(2)　4号竪穴遺構出土遺物（1/3）



(3)　6号竪穴遺構出土遺物（1/2）

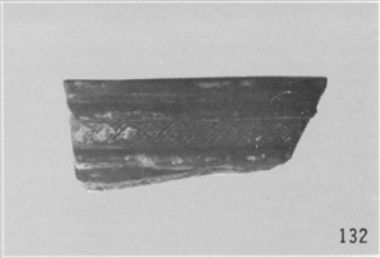


(4)　7号竪穴遺構出土遺物（96～100…1/2、108～112…1/3）



8号竪穴遺構出土遺物1（1/2）

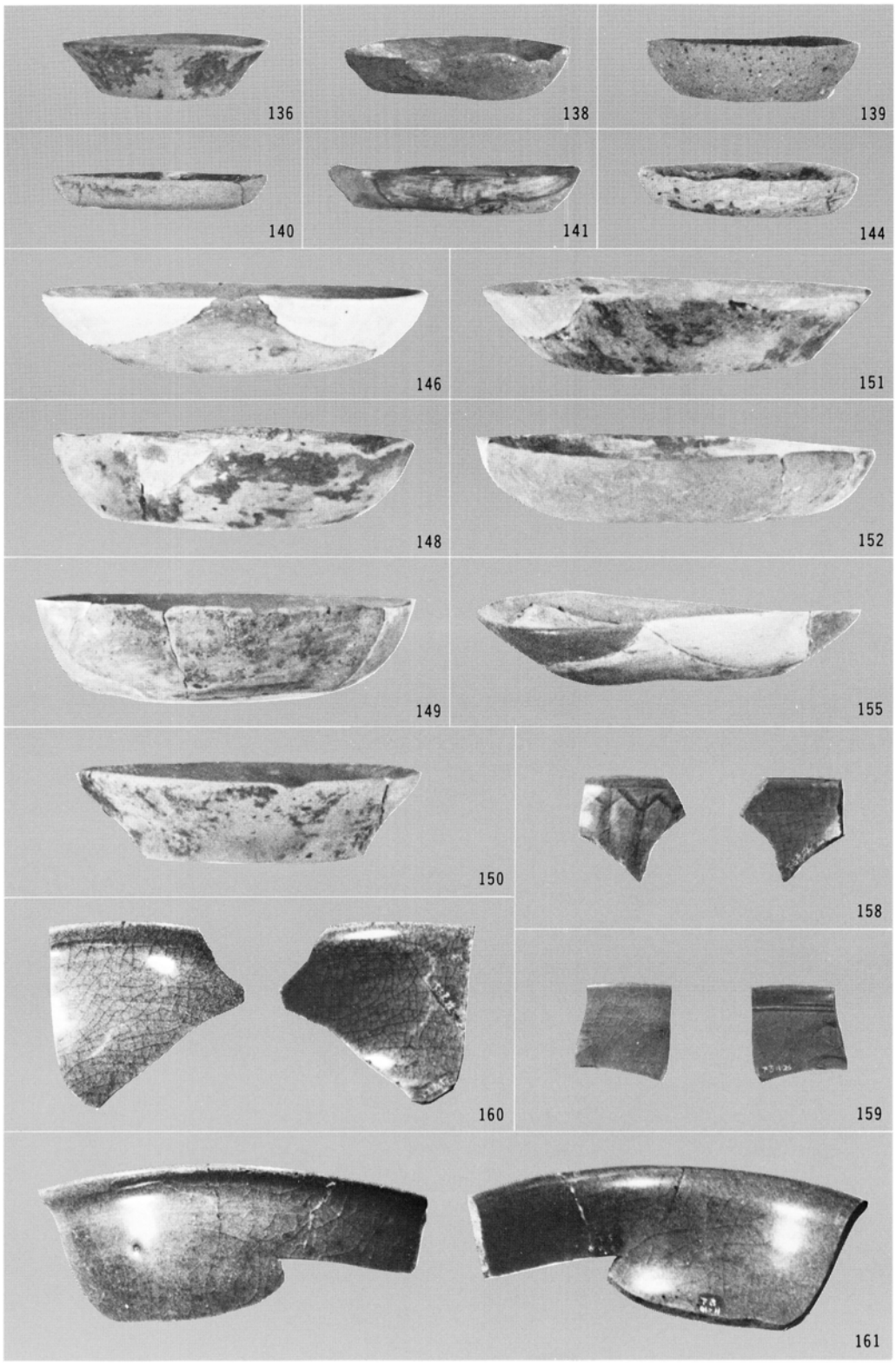
8号竪穴遺構出土遺物2 (1/3)



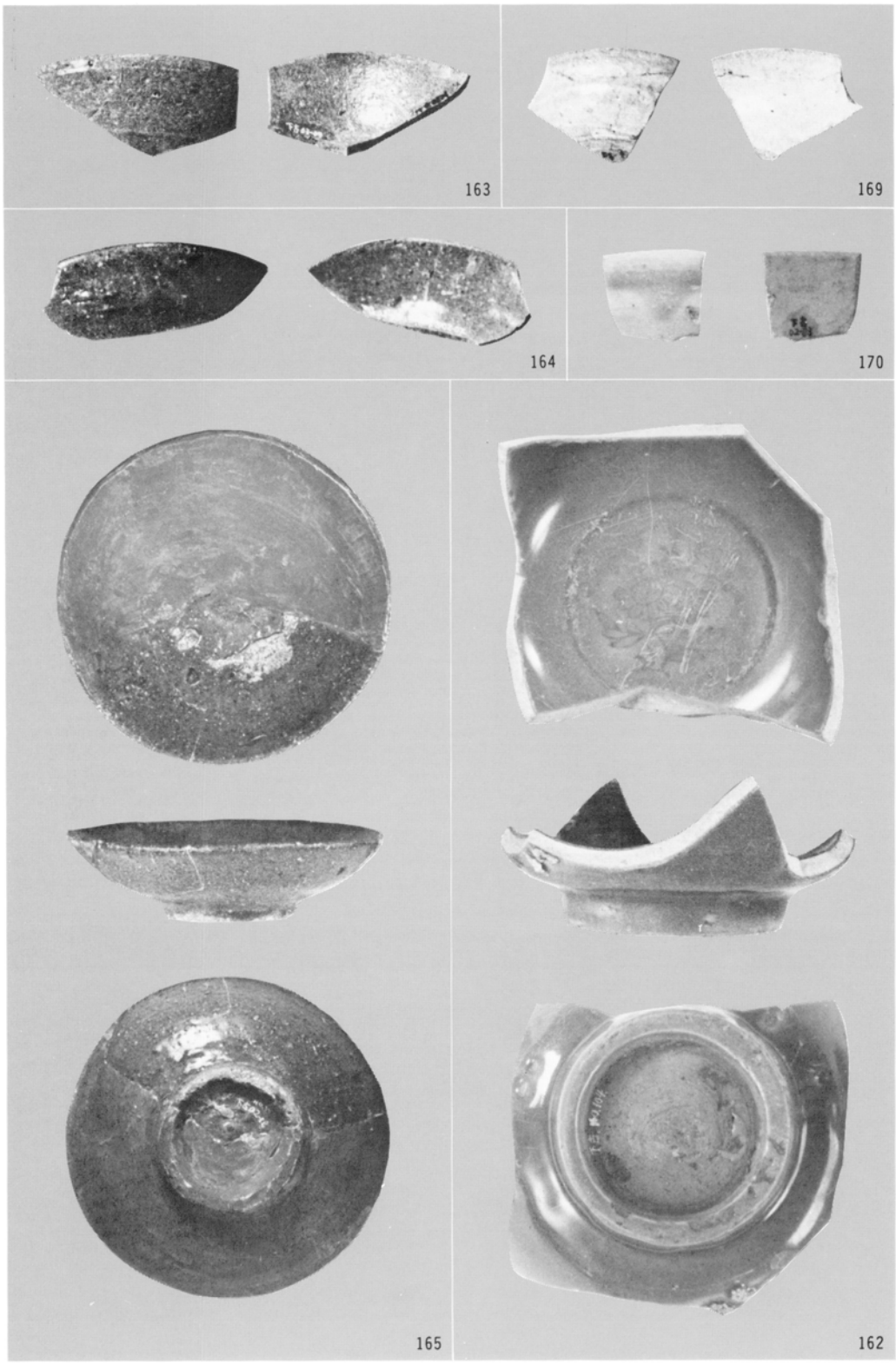
132・133… 1 / 3

134・135… 1 / 2

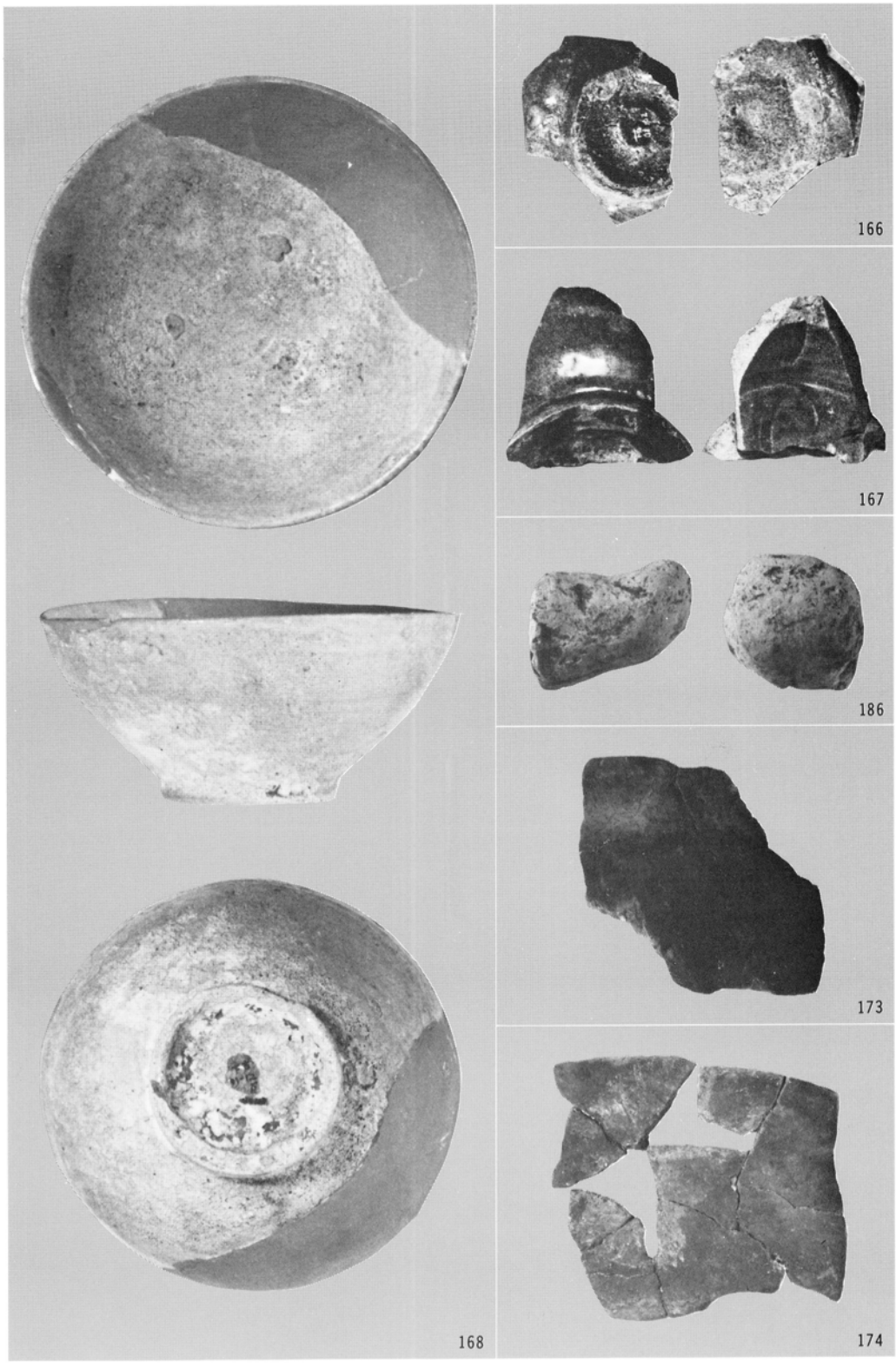
8 号竪穴遺構出土遺物 3



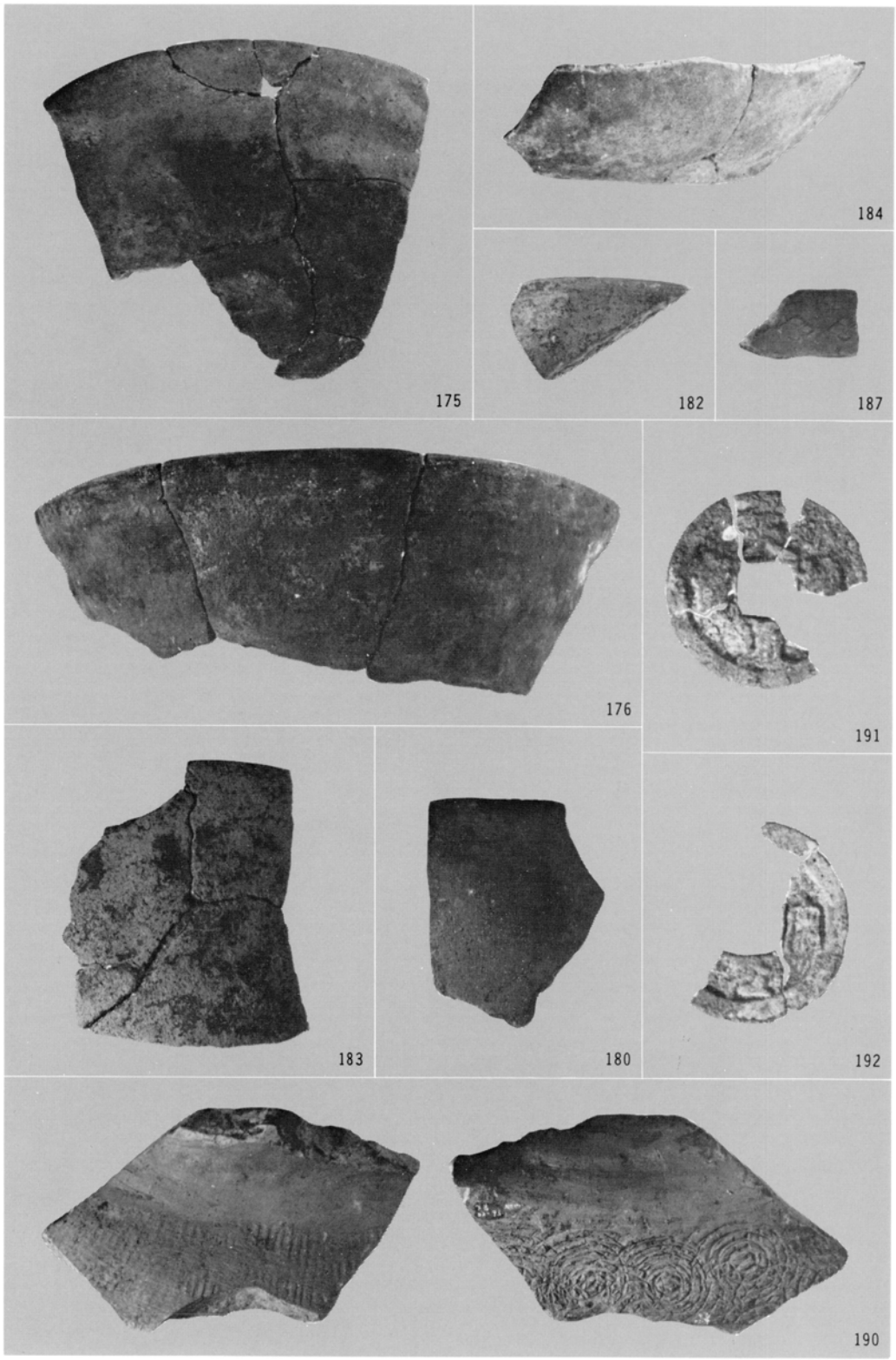
その他の出土遺物１（１/２）



その他の出土遺物２（１/２）



その他の出土遺物３（166～168・186…１／２、173・174…１／３）



その他の出土遺物4 （175～190…1／3、191・192…不同）

福岡市博多区
麦野A遺跡群
麦 野 下 古 賀 遺 跡
福岡市埋蔵文化財調査報告書第107集

© 1984 年 3 月 31 日発行

編集
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目7－23
電言（092）711－4667

印刷　㈲松古堂印刷
福岡市西区大字周船寺407
TEL（806）1661番㈹

麦野下古賀遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第107集

1984

福岡市教育委員会